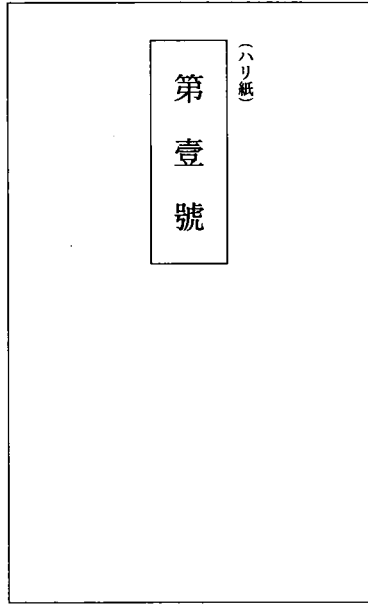


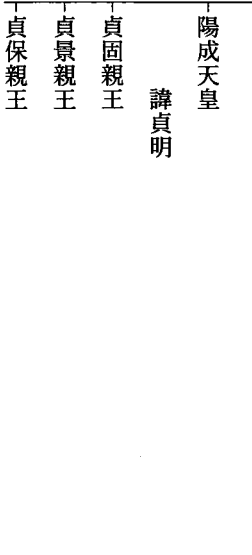
末川家文書家譜

(第一卷 冊子表紙)

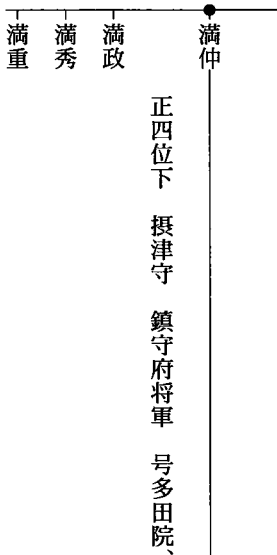
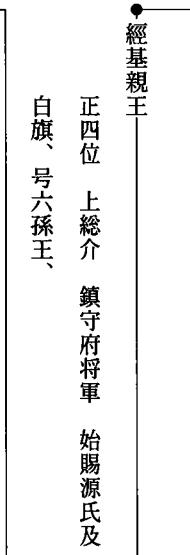
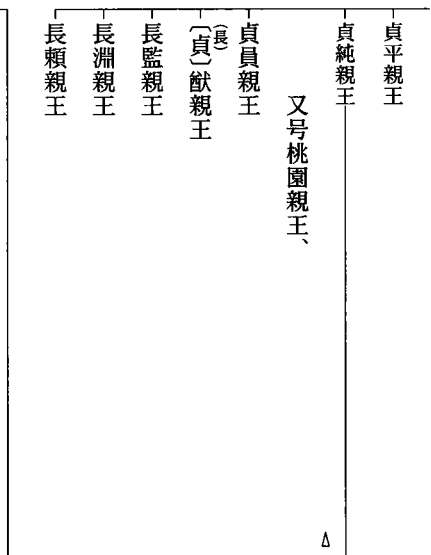


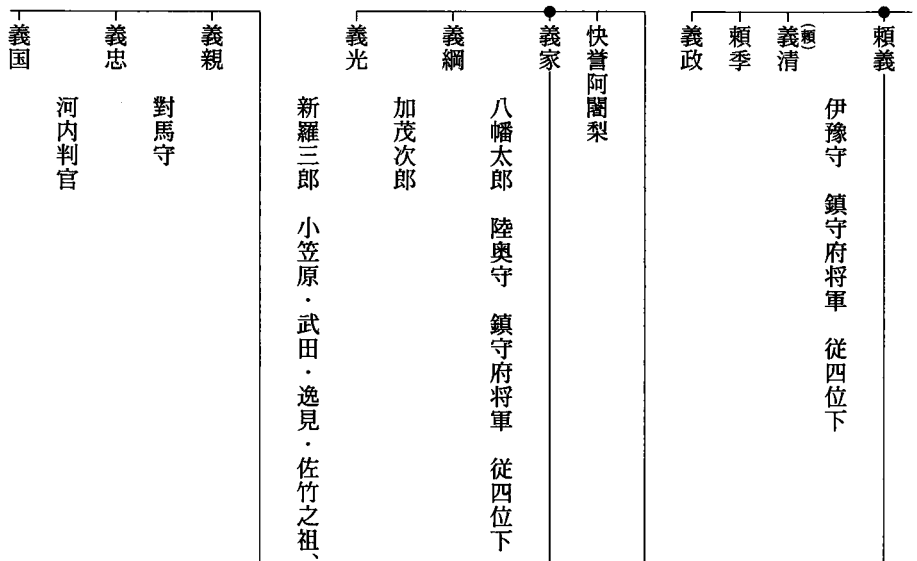
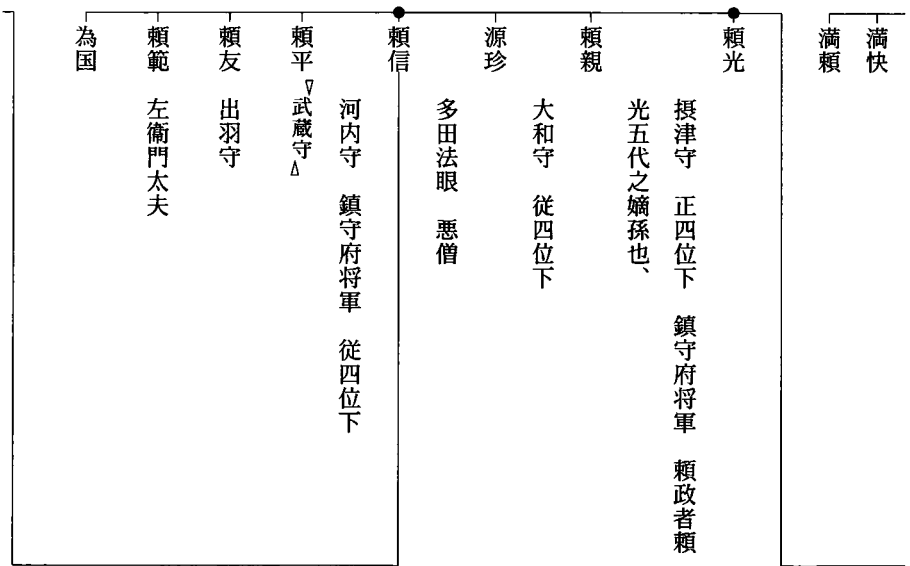
▽人皇五十六代△
清和天皇

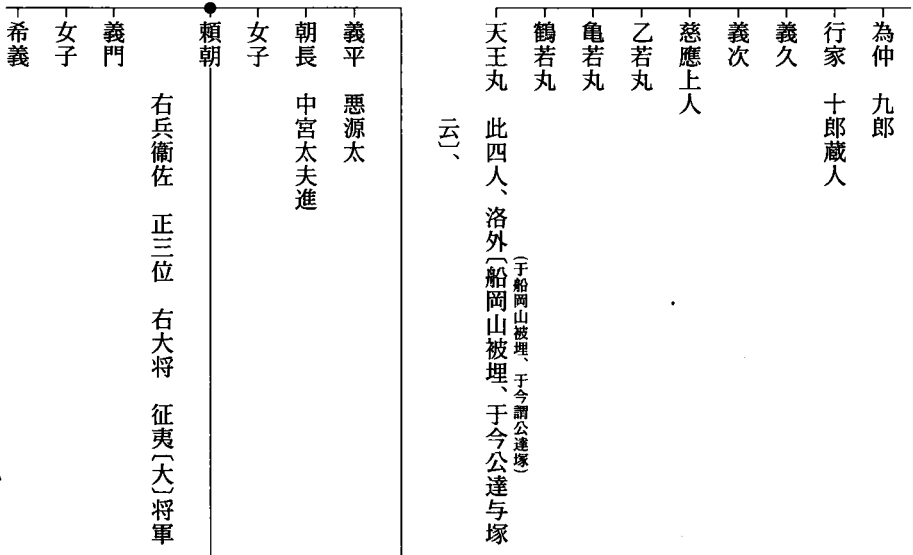
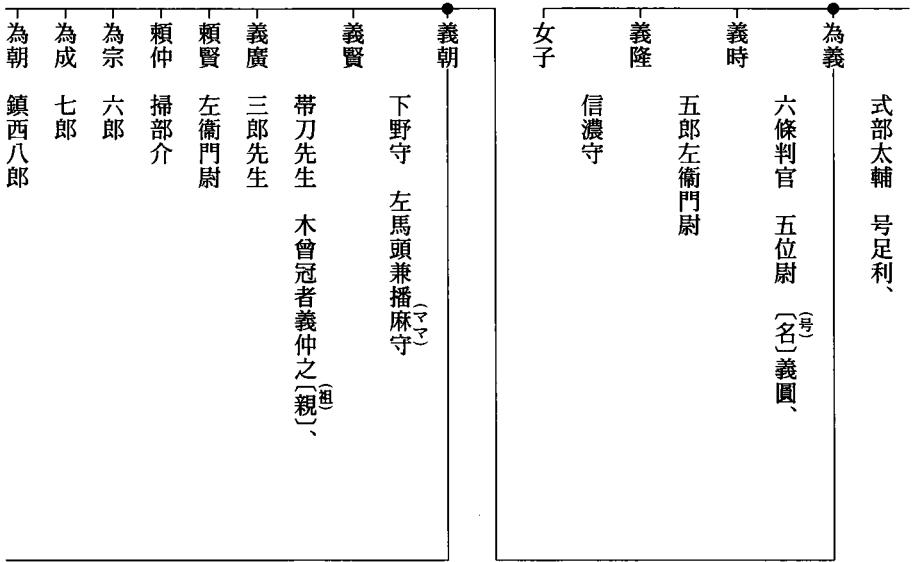
諱惟仁
↙
号水尾帝、▽御母惠仁公染殿皇后△



▽







女子

範賴 蒲冠者 三河守

全成 安野惠禪師

義圓

義經 九郎判官 伊豫守

女子 志水冠者義隆室

賴家 從二位 左衛門督

貞曉法印

實朝 右大臣 左大將 征夷將軍

能直 大友左近將監 豐後守

鳴津元祖

忠久

又三郎 左兵衛尉 宗兵衛尉 左衛門尉

太夫判官 豐後守 從五位下

母堂者比企判官藤四郎能員妹、号丹後局、

治承三己亥(年)、幸於 賴朝卿、而為懷胎

矣、御臺平政子深嫉妬、故畏被害而出關東、

而赴京都、到摂州住吉而日暮入村里、不許

求宿、于時夜雨蕭々甚聞、催産又急也、是故、

社邊之松原踞石上而誕生 忠久公、狐火群

集而照闇夜、以加守護、依之嶋津家者以雨

為喜瑞、以稻荷大明神為代々氏神、然 忠

久公幼童之時、以 賴朝卿之潛命、而八文

字民部[△]太輔[△]廣言[△]之為養子、故号惟宗氏、

賜丹後局廣言之室、其後被養育

近衛前内大臣基通公而成人矣、忝析 忠久

公繁榮、而賜藤原(氏)者也、

畠山次郎重忠為烏帽子子、而取諱之字称忠

久公者也、

文治元年之春、平家之門族悉滅亡、而後

賴朝卿定於諸國之庄園守護・地頭、依之

忠久公補任薩隅日三劔、而且命曰、薩隅日

〔者〕水国〔而〕聞嶋与津多、故家号者可称嶋

津也、旗〔並〕幕之紋者、

賴朝卿之紋^御兩引竜也、豎横之以畫十文字

賜、故万歳之子孫所以用十文字者也、

建久七丙辰年八月朔日、忠久^(公)年十八而

下向薩州矣、此時自 基通公被附警固武士

卅三騎也、

嘉祿三丁亥年六月十八日、於鎌倉而逝矣、

享歲四十九

法号得佛道阿弥陀佛

忠季

若狹守

母堂与 忠久^(公)同、父者八文字民部太^(夫)

廣言也、忠季 頼朝卿為御子分、故作 忠

久^(也)、公之^(也)連枝者^(也)、忠季^(者)、承久兵乱属関

東方、於宇治川而戰死、

忠時

初忠義 三郎兵衛尉 左兵衛尉 左衛門尉

修理亮 大隅守

建仁二壬戌年誕生、母島山次郎重忠女

文永九壬申年四月十日逝、享歲七十一

法号道佛仁阿弥陀佛

忠綱

越前嶋津 四郎左衛門尉 周防守

承久兵乱之時、依嫡子忠義合戰之忠、拜領

於越前一箇国並大庄四箇所矣、

甲斐国花房郷、相模国岩瀬郷、

播麻^(マ)国布施郷・下搦保之庄也、

忠直 三郎左衛門尉 掃部助

女子 小田常陸介室

女子 小田筑後守室

忠繼 号山田式部少輔、他腹

久經

初久時 修理亮 下野守

嘉祿元乙酉年誕生、母伊達判官入道念性女^(妹)

弘安七甲申年閏四月廿一日逝、享歲六十

法号道忍義阿弥陀佛

号中沼、大煩^(マ)助^(介)

高久 三浦四郎式部太夫家村室

女子 式部太夫

忠康 左衛門尉

久時 号阿蘇谷、大煩(ママ)助(介)

忠經

五郎 常陸守

久氏 七郎

宗長 号給黎、彦三郎 左京進

忠繼 三郎兵衛尉

忠光 号町田、五郎太郎

俊忠

侍従房 号伊集院、

久兼

弥五郎

伊集院之庶流者古墻・春成・日置・麥生田・有屋田・黒葛原・吉俊・東・土橋・大田・南郷・松下・大重・富松・四本、福昌寺開山石屋禪師者伊集院(家)五代之六男也、兄弟有十二人、

忠宗

三郎左衛門尉 下野守 上総介

歌道達人

建長三辛亥年誕生、母相馬小四郎胤綱女

正中二乙丑年十一月十二日逝、享歲七十五

法号道義忠阿弥陀佛

久長 号伊作、初忠長 藥壽丸 彦三郎 左衛門尉 下野守 大隅守

女子 扇子御前

(ママ、本来ハ久長一宗久一忠親・久氏ト系)

忠親 下野守 ▽自尊氏公於東寺給扇(有力)哥、九ノ国(よりカ)御代ハ納リテ(有力)口出度夏(有力)ヲ白(有力)ノ花(有力)△

久氏 三郎左衛門尉 ▽尊氏將軍御(有力)寺戰死△(天王カ)

貞久

又三郎 左衛門尉 上総介

文永六己巳年誕生、母三池木工助入道道智

女 貞治二癸卯年七月三日逝、享歲九十五

法号道鑒道阿弥陀佛

自 忠久到貞久(而)五代、淨光明寺殿

忠氏 号和泉次郎兵衛尉、豊後守

忠光 号佐多三郎左衛門尉、

時久 号新納四郎左衛門尉、近江守

資久 号樺山六郎、安藝守

資忠 号北郷七郎左衛門尉、尾張守

久泰 号石坂九郎左衛門尉、

世称七人嶋津〔矣〕、

女子 阿久里

女子 伊作大隅守宗久室

頼久 号川上孫三郎、左衛門尉 上野守

太夫判官越前守 他腹之故不家督、

宗久 幼字生松丸 三郎左衛門尉 太夫判官

元弘二壬申年誕生、母大友因幡守親時入道

道德女 曆應三庚辰年正月廿四日早世、歳

十九 法号久阿弥陀佛

●師久

幼字生駒丸 三郎左衛門尉 太夫判官 従

五位下 上総介 世称総州家、

此時師久^{〔註〕}者治薩州、弟氏久^{〔註〕}者治隅州、分

于〔三州〕兩段而定〔於〕守護職、然師久^{〔註〕}之

一子伊久、其子守久、生質愚癡而非可保国

家人〔也〕、故自伊久于元久^{〔註〕}讓薩劔、而亦

婦一者也、

永和二丙辰年三月廿一日逝、享歳五十二

法号定山道貞

●氏久

又三郎 三郎左衛門尉 修理亮 越後守

陸奥守 世称奥州家、

嘉曆三戊辰年誕生、母同前、

嘉慶元丁卯年閏五月四日逝、〔享〕歳六十

法号玄久齡岳即心院殿

光久 四郎左衛門尉

氏忠 乙壽丸 但馬守

女子 祖鑿房

女子 京子

女子 彌々

伊久

太夫判官 上総介 齋名九花

貞和三丁亥年二月朔日誕生、

應永十四丁亥年四月六日卒、〔享〕歲六十

一 法号久哲道觀

久安

号碓山三郎左衛門尉、始良祖也、

守久

生若丸 太夫判官 播麻守(マヤ) 入道得佛

忠朝

初久明 山城守 入道〔号〕道世、相馬祖

也、

久照

生黒丸 又三郎 称北殿、

忠明

元久

初孝久 又三郎 陸奥守

貞治二癸卯年於大始良誕生、母伊集院長
門守忠国入道道忍女

應永十八辛卯年八月六日逝、〔享〕歲四十

九

法(号)〔名〕玄忠恕翁 福昌寺建立於釈迦堂(而安)也、

置画像于釈迦堂、後建立木像
牌立于釈迦堂、

守邦

乳名梅壽丸 仲翁和尚

福昌寺三代住也、隅州始良含粒寺者和尚

落命之地也、

女子八人 七人(者)為比丘(尼)、〔末女〕一人者伊

作四郎左衛門尉勝久室

久豊

称南殿、次郎三郎 修理亮 陸奥守

永和元乙卯年於鹿兒嶋誕生、

母佐多三郎(三郎)左衛門尉忠光女

應永卅二乙巳年正月廿一日逝、〔享〕歲五

十一

女子
法号存忠義天 惠灯院殿
伊集院彈正少弼頼久室

久世

兵衛尉 三郎左衛門尉 上總介
嘉慶元丁卯年誕生、
應永廿四丁酉年正月十三日、為 太守久
豊於鹿兒嶋而自害、行歳卅一 法号惟馨
久徳大禪定門

久林

犬太郎 左兵衛尉 應永^廿癸巳年誕生、
母伊作大隅守久義女
應永^永二庚戌年十一月朔日、為 太守忠国
被誅^于於徳満城、行歳十八 法号大義道
椿
(ママ、○ニナシ)

忠国

初貴久 小字丸 虎壽丸 又三郎

修理大夫 陸奥守

應永十癸未年五月二日、於日州穆佐高城

〔而〕誕生、母伊東大和守祐安女

文明二庚寅年正月廿日、於薩州別府逝、

〔行〕歳六十八

法号玄誓大岳 深固院殿

用久

初好久^中 持久 薩摩守

出水之領主嶋津又太郎忠辰之祖也、忠辰^者

朝鮮国^從〔之〕陣中私依掃朝之科、自 関白秀

吉公被家廢〔也〕、

季久

越後守 修理亮 豊後守 黒木領主^之祖也、

庶流者平山・加治木等也、

有久

出羽守 文明八丙申年九月十三日、於三俣

小山〔而〕戰死、大嶋之祖也、

豊久

伯耆守 志和知・義岡之祖也、

世称五人嶋津(也)、

僧一人 瑠阿

女子四人

女子 伊集院大隅守熙久室 母著新納近江守忠臣

女

女子 嶋津薩广守用久室 母同前、

女子 新納近江守忠續室 母同前、

友久

又太郎 右馬頭 相模守

母伊作四郎左衛門尉勝久女(也)、

生他腹故不為家督、

立久

安房丸 又三郎 修理亮 陸奥守

永享四壬子年十一月五日誕生、

母(者)新納近江守忠臣女、

文明六甲午年四月朔日逝、〔行〕歲四十三

法号玄忠節山 竜雲寺殿

久逸

初久俊 龜房丸 又五郎 式部太輔

〔河内守〕

勝久

▽初忠豊△ 号桂、又七郎 遠江守

母與友久同、

忠經

号迫水、初清久 七郎三郎 伊豫守

母著與立久同、

守棟

柱山和尚 福昌寺九代〔住〕之住持 母伊集院信

濃守女

女子 嶋津修理亮忠廉室 母松元入道女

忠弘

号喜入、五郎三郎 若狹守 母與立久同、

女子 嶋津出羽守忠徳室 母松元氏女△

女子 早世

頼久

初篤久 又二郎 右馬頭 摂津守

兄為忠弘養子、

英功 湖月和尚 廣濟寺住特 前真如寺

母飛彈守入道女

宗津 天祐和尚 福昌寺十一代住特

母山下入道女 竜盛院開山

運久

初忠幸 三郎左衛門尉 相模守

齋名一瓢

天文八己亥年七月朔日卒、

法号道登大年 大年寺殿

忠昌

初武久 又三郎 修理冠 陸奥守

寛正四癸未年五月三日誕生、

母梶原三郎太郎弘純女

永正五戊辰年二月十五日逝、〔行〕歲四十

六

法号源誉圓室 興國寺殿

僧

還俗而事北条家、此子孫御旗本嶋津八郎

〔左〕衛門尉

忠良

菊三郎 三郎左衛門尉 相模守

齋名日新

明應元壬子年九月廿三日誕生、

母者新納駿河守是久女

一瓢依無世子而伊作又四郎善久之子為養

子、永祿十一戊辰年十二月十三日終焉、

〔享〕歲七十七

法号梅岳常潤在家菩薩

日新寺殿又者梅岳寺殿

女子 嶋津治部少輔忠將室 母同、

女子 佐多又太郎忠成室 母同、

忠治 安房丸 又三郎

延徳元己酉年正月十七日誕生、

母大友豊前守政親女

永正十二乙亥年八月廿五日^(卒)、歲廿七

道号蘭窓津友 津友寺殿

● 忠隆 百房丸 又六郎

明應六丁巳年八月十四日誕生、母与忠治同、

永正十六己卯年四月四日、罹痘疹^(病卒)、

〔享〕歲廿三^(送)号竜盛興岳 竜盛院殿

● 勝久 初忠兼 中忠義 宮房丸 又八郎

八郎左衛門尉 修理太夫 陸奥守

文龜三癸亥年八月十八日誕生、母与忠治同、

勝久^(主)約^(於)忠良^(主)之嫡男又三郎貴久^(主)世子、

而忠良^(主)任国政、而謂安身可養老、而為髡、然

實久有陰謀、而勝久^(主)並忠良^(主)或為和睦、或

為仇讎、且實久欲害^(於)貴久^(主)、近臣察之、遁

其難而自鹿兒嶋歸于田布施矣、是故忠良^(主)合辭

憤而欲誅實久、又勝久^(主)為敵、蓋勝久^(主)天性

不正而信讒罔直、故衆人不暇、因茲^(一)門他家蜂

起^(竟)而国家大乱、勝久^(主)無所安身、奔走于所々、

而^(終)蟄居豊後之冲濱矣、大友豊後守者勝久^(主)

祖父也、故頼豊後也、忠良^(主)〔公父子大歎〕、而對自

国之逆徒、他国之大敵而相戰多年、降者扶之、逆

者殺之、漸^(至)忠良^(主)・貴久^(主)・義久^(主)三

代、而致三州之平均者也、勝久^(主)定貴久^(主)養

子之後、^(於)豊後而有一子、号又三郎忠義矣、到

義久^(主)代、^(而)以使者招^(而)櫻嶋之内藤野構^(於)殿室、

而^(扶持)養育^(忠義)、然男子有三人、嫡子号藤野休右衛

門尉季久、二子為僧、三子号龜山兵部太輔忠親矣、

一女子 肝付河内守兼續^(入道省約)室

一女子 樺山安藝守善久^(入道玄佐)室

● 貴久

虎壽丸 又三郎 三郎左衛門尉

修理太夫 從五位下 陸奥守 齋名伯圍

勝久養子

永正十一甲戌年五月四日誕生、母^(者)嶋津

薩摩守重久女、

元龜二辛未年六月廿三日逝、享歲五十八

法^(名)〔呂〕大中良等庵主 南林寺殿

● 忠將

初昌久^(政) 又四郎 右馬頭

永正十七庚辰年十一月十二日薩州於田布施
誕生、母与貴久(公)同、室者佐多上野介忠
成女、天正二甲戌年六月廿七日卒、

法号宝岩妙珠大姉

尚々以安父子無余義あつかい、たのもしくこ
そ候へ、加治木、ミそへ敵にて候つる時さへ
弓矢ハ被取候、まして能くしめ候ハて、やふ
れ候する事ハ、いかゞにもしふやのものとも
しにきれ候ほとに、其上にとうを、此方ハす
へ候ハてハとこそ申て候へ、若衆などにも談
合きかせられ候へかし、おんミつの条こそ候
へと申事に候、

正興寺へ誂申候句出来、被持せ候、祝着候、礼可
然様ニ頼入候、仍加治木堺乱、さらに此方へ^(④ナシ)遠
州もて承候、返事無明^(④破二)いする事ハいかゝ
と、いつもの申事に候、一ミち御校量肝要候、先
方々へ如此之子細被仰渡候て可然之由、令申候、

其後も以大年寺、敵方へも賀治木之事すて有間敷
通、度々被仕賦候、彼是御座候て可然之由、かこ
しまへ申候、恐々謹言、

七月四日 ^(忠良) 日新(花押)

(墨引) 愚谷軒

右馬頭殿 日新

返事

(本文書ハ旧記雜録附録二八四五号文書ト同一文書ナルベシ)

追而歳末之儀、尤以使者雖可申通候、月迫之
条、不能其儀候、又々恐々、

歳暮之御大慶千秋万歳、雖申納候猶以不可有盡期
候、多幸々、抑如此為祝詞用賀札候、倍々明春諸
吉可申加候、佳事、恐々謹言、

十二月廿五日 ^(忠良) 日新(花押)

右馬頭殿

御宿所

猶々御分別之前たるへく候へ共、一二に白鬮
をあひましへ受へき事肝要候、

態染筆候、仍蒲生弓箭就進退之儀、去年霜月三日、以三ヶ条 正宮御鬮を致祈念候處、無為之御鬮相下候之間、粹其旨雖廻計略候、敵心更以應此義躰なく候まゝ、神慮をそむくに相似なから、剩陳を取付候て如此候之事、冥鑑之程も如何候欵、然處北郷讚州以媒介、國家皆同和平之調義たるへきのよし候、^(則)此等之旨可信用事候欵、將亦此まゝ、以弓箭時節を可相待事欵、此砌一大事之弓箭候之間、猶以御鬮をうかゝひたて、急度社衆へ以御談合彼両条之儀よく／＼祈念候て、御鬮を可被申請事本望候、御入魂之處、満足たるへく候、恐々謹言、

二月十五日

貴久(花押)

右馬頭殿

尚々先日之合戦、弓にて御はたらきのよし、

一たん以可然候く、

先日帖佐五ヶ瀬川合戦之勝利、ひたすら其之はたらきに候、然ハ北原より返事候事、今度之合戦ゆへと存候、此きハさしよせ、使僧なども被遣候て、

てうはうなされ候ハ、^(目)可日出候、是非以きたはらハ召出し度存候、恐々謹言、

八月七日

貴久(花押)

(墨引)

右馬頭殿

貴久

(本文書ハ旧記雜録附録二八五三号文書ト同一文書ナルベシ)

八月廿九日、其方人衆於か治木辛勞之よしきこえ候、御礼使者以申入候、仍此方はたらき延引、口惜候、尾州より無事之いけん度々承候、大もく今月までハ神りよ然々なく候、乍去、か治木堺きふく成候上ハ、神りよをハ^(申ナシ)こい候てとこそ存候へ、延々候間、無御心元候らん、心底之ゆたんにあらず候、恐々謹言、

九月一日

貴久(花押)

(墨引)

右馬頭殿

貴久

(本文書ハ旧記雜録附録二八五四号文書ト同一文書ナルベシ)

尚々日新さま御氣分もはやしさいなく候、万吉々、

態用一書候、仍先日申談候一ヶ条之事、今月十九日(と)しかと相定候、其御心得肝よう、萬々頼存候外無他候、然々之義はかこしまよりこそ可申承候へ、恐々謹言、

十月十日

貴久(花押)

右馬頭殿

〔貴久〕

前日申候ごとく、又四郎岩劔之(番)はん定候て、明日十九彼方へつかハし候、今程そおこ(曾於郡)ほりの様躰いか候哉、承度候、

此度か治木境就弓矢、最前より御辛勞候、申不及候、然者岩劔手入候迎、皆大隅衆之はたらきまてにて候、仍北原方調法、御心をそへられ候、一たんの義候、不事成所ハ彼方之無校量と存候、前日岩劔へ御越候ハ、參會候、千秋万歳候、兼又金峯山御くし進之候、御覽可有候、恐々謹言、

十月十一日

貴久(花押)

右馬頭殿

〔貴久〕

返々令申候、北原之事者、可仰出され趣もありさうニ存候、同かまうの事も、只むミやうニめし出し候はんハ無曲次第ニ候欵、かれこれ御返書くハしく可承候、此せつ可被仰出不似相なから存事候、万吉、

態染筆候、仍如御存知、今度入来院へ皆同無為之儀被仰合、時宜雖事成様ニ候、其後無実儀、于今延引候、敵方之儀、更(二)難計存ながら、從最初大殿様以尊意御談合共候つる、我々よりハとかく無申儀候ツ、案中北原方此度溝邊之ふるまひ并對御領内緩怠、不及是非候、然者縱入来院首尾ハ雖無相違候、一方之事者ハ可被摧、御弓箭之事可然存候、但御心底之趣、何分に候哉、於御同心者、乍恐以御下一往申上度心中候、さ候ハ、急度自身御越候て、不然者為御代々使者候者、こも

と申合度候、委細之旨、此御返事に給候て可令得
其心候、恐、謹言、

五月七日

義久(花押)

右馬頭殿

又三郎
義久

天文六丁酉年十二月廿八日、^(ママ) 忠良(公)攻薩州加

世田之城、于時忠將^{歳十}為大將自擲手急攻責之際、

翌朝陷本城、敵兵大山宮内少輔・富松左京亮討死、

互接劔戟放焰光相戰之際、敵兵三十餘人戰死、此

時阿多飛彈守破城圍戰死、此外谷山藤左衛門尉・

吉富吉左衛門尉被討殺、敵相支^戰暫息、其後大寺

越前守率山田・川邊之衆、欲助新城之勢、貴久

^(主)即催馬、欲追討之時、敵乃斷其後、危莫甚焉、

而忠將急鞭馬、向敵大戰數刻、税所助十郎・猿渡

与一左衛門(尉)・本田九郎・蒲地帶刀左衛門(尉)・

市来備^(後)・蒲^(地)左衛門四郎等八人戰死、

天文八己亥年三月廿八日、^(主) 忠良(公)軍衆薩州屯

河邊故殿、然則高城之城主鎌田加賀守却之、忽乞

降、其外敵兵止於戰、脱甲絶絃皆以降、故 忠良^(主)

(公)入高城於掌裡、以新納伊勢守使為城代、仍鎌

田治部左衛門尉引其妻子而為質来田布施、如此本

城平山悉落居、而俱以新納伊勢守護之、且復嶋津

中務少輔忠時敵 貴久^(主)(公)在薩州市来平城震逆威、

故天文八己亥年閏六月十七日、^(主) 貴久(公)自將欲

陷平城、同廿七日、諸軍落合大日寺之前挑戰之際、

蒲生宮内太輔・樺山安藝守善久・喜入摂津守忠俊、

究竟之強兵定必死相戰半、入来院石見守重聰率大

軍(来)而加味方、此外祢寝・佐多・肝付・伊地知・

穎娃氏等馳来助勢之間、敵軍忽^破敗北、于時忠將

^{歳一}鎮壓本城(之)將也、然串木野城主川上彦三郎

下城、而欲獻串木野之城 太守、雖然彦三郎為幼

稚之間、廿八日曙天、以福嶋某訴 貴久^(主)(公)、携

質人築原氏之幼童而来、同廿九日、新納常陸守亦

失勇、而九月朔日降其本城、

天文十七戊申年十月四日、欲陷本田紀伊守居城隅

州清水、忠將^{歳一}率諸軍押寄攻戰之際、忽敗北而不
得居(矣)、退去于庄内、紀伊守書院^之柱殘短尺和

歌一首、

今日はかくいて、行共住馴し槇の柱と我をわするな

玄佐返哥〔目〕、

なかれてゝかへる瀬もなき水莖の跡はかなくも頼置かな

此歌似不告紀伊守不知風流、未遠行以小勢追駈、

於途中野原、而以矢文射于紀伊守軍勢之中而帰、

仍清水入掌裡、故忠將賜本田領跡而移于清水、此時

〔從〕〔主〕貴久〔公〕町田加賀守忠林〔為〕忠將〔之〕家老、

則〔拜領〕於知行貳百斛、

加治木之城主肝付三郎五郎、為渋谷・菱刈・蒲生

被侵而將及滅亡、貴久〔主〕〔公〕不忍肝付聽危急、天

文廿三甲寅年九月十三日、忠將〔主〕歲卅二率薩摩〔之〕

軍衆先欲攻平松城、以日當比良之地構本營〔矣〕、

又廻謀於軍中、而攻敵城甚急、懼其猛威也、同年

十月二日、帖佐・蒲生・岩劔共俱退散、其後陷於

平松城、以入手裏、

弘治元乙卯年三月廿七日伐帖佐、當此日、薩摩兵

屯別府河原之南、于時忠將〔主〕歲卅六、旗下之兵、発於大

隅在岩野原、各議曰、欲以歩卒輕銃者先為侵侮敵

城際、輕卒五人拔出於數千軍中、而於高樋之橋口

擊殺敵一人又虜一人、依之帖佐凶徒追至岩野原、

故忠將進諸軍、爭先馳進、横遮於牛渡之地、而挑

戰良尚矣、鬪声響山谷動鄉村、而戰暫止、而敵味

方戰死者不可勝計、薩摩之騎歩所斬獲之敵首二十

有六、故我軍乘勝、累日侮敵未止、以四月二日之

暗夜、棄帖佐及新城・山田城、而遁去于祁答院、

弘治二丙辰年、欲陷蒲生氏居城、同十二月五日、

義久〔主〕〔公〕築陣馬立之地、忠將〔主〕歲卅六同所貝血構陣

營、同〔十二〕月十五日、忠平〔公〕荒平之城張於

陣幕、而有菱刈左馬權頭者、與蒲生某之凶乱、仍

欲救蒲生築陣北村之嶮岡、以警衛不怠、故不能陷

敵城令越年、

同三丁巳年三月十五日、忠將〔主〕歲卅七為大將、使菱刈

陣下刈拂麥作、同二十七日、菱刈之軍士襲來貝血

之陣下西村原之際、忠將〔主〕發陣屢戰而得勝利、同四

月十五日、忠將自將而押寄于菱刈陣攻責之時、諸

將馳來而增其勢、弥挑戰之際、蒲生無利而降、同
月十九日、発本城退去于祁答院、故蒲生入手裡、
而領跡為比志嶋美濃守地頭職者也、

永祿四辛酉年、肝付河内守兼續・伊地知美作守重

興・祢寢右近重長同心敵 太守、護廻城之後、七

月十二日、肝付凶徒以匹夫之勇襲高原山、于時忠

將歳四十二勇氣有餘一戎衣、而直前欲赴敵数千、町田

加賀守忠林告忠將曰、夏逼危難、謀計當有于此乎、

夫避一時之急難、期已後之勝利者、古之良將尚有

之、斯非英雄之羞欵、某等一心、(而)向此重圍則

必破一方(者)無疑、窺其隙而免虎口之難、可開後

日之運、如何哉、然忠將聞之、慷慨不變、居腰床机、

而一步去此不氣色、然傲然叫曰、時運有数、我敢退

哉、(凶徒速可來、)于時賊兵如飛、而化鳥有矣、(局力)

(敵持其首、)而歸去、故拳遺体而刻木、以繼首全体葬

采地楞嚴寺、此時家臣戰死者、略記之

町田加賀守 同軍四郎 心清祖甘△知藏△禪師

圭珍上坐僧 野田氏 石谷因幡守 酒匂源左衛

門尉 益崎平内左衛門尉 宇宿大学△左衛門△

敷(根)掃部兵衛尉 沢右衛門尉 桑波田左近

惠鏡了智禪定門 多田隈源兵衛尉 有馬與市兵

衛尉 常慶禪定門 坂元一弥太 岩城新三兵衛

池山備後守 泊助六 三嶋兵庫頭 能勢十郎

二郎 竹下和泉守 (三嶋)稻富石見守 坂元(氏)

月清(清) 同(氏)椿昇 武元(氏)芳林 大寺大煩(助)

草滿氏(道心) 有馬氏惠岳 益崎(氏)淨珍(守) 川

添氏道祐 市来氏心月 宮田氏道滿 春成助三

郎 富松氏祖翁 同氏常心 石塚雅樂頭 平峯

滿右衛門尉 宮田氏 有(河)氏 市来氏 木下縫

殿(助) 新納又八郎

中間道周禪定門 百房淨金 中間道本 中間常

仲 又内(仲) 中間中本 同道樹 同道宥 同道貴 同道

西 同道体 同道金(体)

永祿四辛酉年七月十二日戰死、享歲四十二

法号心翁大安大居士

『忠將家老町田加賀守忠林一人ニテ相勤、(此子孫)代々

垂水(之) 役人相勤也』

(人名)〔旧記雜錄後編二二六八号ニヨリ校訂之〕

(忠林子孫ニ至リ)

女子 大永四甲申年誕生、母同前、

種子嶋左近將監時堯室 離別(一)後嫁肝付
彈正兼盛、

天正十一癸未年閏正月十四日、於伊作卒、

法号椿窓妙英大姉

尚久

曇秀丸 又五郎 左兵衛尉

享祿四辛卯歲誕生、母上木筑後守貞時女
室(信)穎娃周防介兼供女

永祿五壬戌年三月朔日、於加世田卒、享歲

卅五 法号曇秀一枝居士

女子 母(信)与尚久同腹、

太守義久(公)初藤中

永祿二己未年十一月十八日卒、法号花舜妙香

大姉

女子 天文十三甲辰年誕生、母忠成女

入来院彈正重豊室

天正九辛巳年五月廿日卒、法号節心英忠大

姉

以久

初幸久(中) 征久 又四郎 右馬頭

齋名宗恕

天文十九庚戌年誕生、母同、

(本文書八)末川家文書二八号文書ト同文ニツキ省略ス

近衛事、嶋津分領之内へ被遣候、然者日向之内あ
(信賴、信尹)

やより人足百人・乘懸馬拾三疋、則奉行以下申付、

嶋津修理入道居城迄可送届候、北郷左衛門入道か

たへも被仰遣候、猶長岡幽齋可申候也、

(文祿三年) 卯月十三日 (豊臣秀次朱印)

嶋津又四郎とのへ

(本文書八)旧記雜録後編三二二九号文書ト同一文書ナルベシ

大隅國帖佐郷之事、堅(固)可致知行之状如件、

永祿八年乙丑八月廿四日 修理大夫義久(花押)

又四郎殿

11

10

9

〔石三通之文書并古系圖一卷、寛文八戊申年十二月廿三日、嶋津美作守久治（久憲殿より）嶋津權十郎（忠顯）代ニ御所望ニ被思召由、大田小平次・坂元平右衛門（を）以承（候）、依之致返進候〕

此比者致無音候、仍而陸奥守殿（家久）ニ御用候て、高岡

へ使を進入申候ニ、御使昨日罷帰候、於高岡其所御打立之儀、とかく未相知由由出合候由申候間、為御心得態申越候、陸奥守殿御打立候てより、今日はや十二日ニ罷成事候、然處于今各遅陣、笑止存候、惣別今度上方之御仕合も遅陣故、如何可有之哉与心遣千万候、何共一刻も早々御打立可然存候、少も御油断有間敷候、旁為御存如此候、恐々謹言、

（慶長十九年）
十一月廿八日
（義弘）
惟新（花押）
（久信・信久）
又四郎殿

〔以上〕

御帰朝之由候而、先月廿六日、御状濃州之内於（加賀島）か嶋到来、令拜見候、如仰其已後久不申承候処、早々示預、殊更銀子式枚畏入候、猶上国候節、以面談可申述候条、不能巨細候、恐々謹言、

（文禄二年）
五月二日
三成（花押）

嶋津又四郎殿
（以久）
御報

石治少

御状令拜見候、如仰其以来不申承候、御床敷存候處、遠路為御音信、銀子貳枚到来、御懇意祝着之至候、拙者一兩日中重而奥州へ令出陣候、當秋中二ハ可致帰陣候間、其節以書状可申入候、猶期後音之時候間、不能再筆候、恐々謹言、

（天正十七年）
六月十七日
三成（花押）

嶋津又四郎殿
御報

石治少

猶、御懇書儀忝存計候、

就御帰朝、早々治部少かたへ御案内、御使札之通
申聞候處、具示預忝候旨御報被申入候、然而五三
日中ニ可為上着之条、其節可被得貴意候、次拙者
へも唐御道服拜領候儀、忝次第二候、猶以尊面心
事御礼等可申上候、恐惶謹言、

文祿二年

五月二日

八十嶋助左衛門尉



嶋又様人々

貴報

先度致祇公候處、始而申承本望之至候、殊更種々
御懇之段、書中難申盡候、明春者早々可申述候条、
不能一二候、恐々謹言、

寺志摩

(広高)
廣忠(花押)

十二月十八日

嶋津又四郎殿

人々御中

〔此書中ハ於朝鮮國為被遣事候〕

肝付賊徒等、先自永祿四年之夏、掠取同州廻之城、
而弥乘勢寇 太守(者)数年、故先為征伐伊地知、
元龜三壬申年九月廿六日、 太守之弟嶋津左衛門
督歲久・同中務太輔家久欲伐下大隅之凶徒、嶋津
右馬頭以久三(歲廿)嶋津圖書頭忠長・川上上野守信
久隨其軍、則以(小濱)(海邊)為陣營、重興所籠對早崎之
城、於是、 太守義久(公)(主)亦進船(小濱)(海邊)而見要害、
而赴指宿、對衿寢而張陣營(也)、然天正元癸酉年
七月廿三日之夜半、以伊地知美作守勢而夜打歲久
之陣中、于時家久察城中之虛而作逆寄(矣)、衆皆
奮発、同廿四日曉天、(稱)城中、此時副將河南安
藝守兼邦(肝付一族安樂備前守兄也)与家久戰、而奉負數箇所疵矣、
且破備而落行于牛根城也、然伊地知夜戰打負而退
岸之城矣、(今者)而其後降參[△]
同年、衿寢重長既属 太守之旗下、故薩隅二州之
軍衆三月十日入衿寢城、遂欲討肝付之賊徒、同十
八日、(衆兵)欲攻肝付(之)城、到西侯、賊徒相向
拒之、右馬頭以久將隅州兵以進日、兼續者父之
仇、今日之戰固所願也、其勢如疾風迅雷力戰(而)

驚目也、故敵如瓦解而奔走、多得首功而帰也、重

長同在我陣中揚凱歌、而重長詣于指宿謁 太守、

又従到(於)鹿兒嶋、

同年十二月廿四日、欲攻牛根安樂備前守兼寛^{肝付}一族、

城、構陣[△]早崎城[△]平常岡、以往相戰未有止、雖然

不決輸贏、既越年矣、

(太守)〔義久公〕為劫備前守、(賜御詠歌)一首、以矢文射

給于[△]城中、

弓ハうし根ハ折(よとも)引かへて甲を拔はやか

て安樂

備前守、(乍恐)返哥以矢文奉送寄手之陣中、

引もうしねらふ心も武士の梓の弓のえにし任

(せ)て

天正二甲戌年正月三日、兼續之賊徒、越高隈之山

腰到于牛根城前、欲構於茶園尾為後攻、諸將見之

指揮軍中日、越嶮山勞疲之軍固可戰之時也、一步

勿退、既可極必死、右馬頭以久^{歲廿五}・島津圖書頭

忠長・川上上野守信久等下知諸兵指揮、由是、皆

義久(公)以新納武藏守忠元告歲久並諸將曰、已及
三箇年而對陣、一者似無^{ニタリ}大將智謀士卒忠烈(矣)、
敵斷糧道水路、而急可城郭破却、依之一日有評儀、
自同月十八日晝夜三日大手搦手始合戰、而鯨波響
山谷堀嶮涯、飛火放矢而攻戰(也)、且亦以陣僧說
利害^而曰、一味同心之稱^稱寢・伊地知已降參矣、備
前守豈遂素懷哉、故備前守諾而同月廿日開門降伏
(矣)、弟安樂彦八郎兼貫為人質獻(于) 太守、然
又新納武藏守嫡男以刑部左衛門忠堯為人質賜備前
守、是肝付弓箭之終也、忠堯者直勤牛根之地頭職
也、竈城之人数[△]出暇各[△]離散、而帰故郷、
伊東修理太夫義祐法師、對 太守為讎敵者有年、
於茲其黨徒高原之城、據其固而率兵超霧嶋山、
時々犯我疆内矣、故天正四丙子年八月九日、太
守(義久公)及兵庫頭忠平^注率薩隅二州[△]軍衆、発
於飯野到于高原、以称耳付之岡為陣營[△]地、既陣
幕成矣、于時輕銳之士、未將之命、而潜奔走、放
火城外破却門壁絶水路(矣)、亦來晝夜攻責者敢無
怠慢、城中無飢渴之可補者、而同廿三日、請降去

城矣、其間兵庫頭忠平・右馬頭以久藏廿七・嶋津左衛門督歲久・同姓中務太輔家久・北郷左衛門尉時久法師一雲・島津圖書頭忠長等、勞軍務者不可勝計、

伊東義祐法師沒落於日向、而出奔於豊後之後、

伊東家臣有長倉勘解由左衛門備者據日州邊城之城、有欲復仇之志、太守聞之、則與故舊之

臣備評議曰、長倉在石城者、猶一榻之內容他人之

野睡也、然而結黨徒增其勢、起乱国中亦可知之、不如速討少寡、天正六戊寅年七月初六日丙辰、

發数千之大軍將攻石之城、前面有大河、水勢轉石、

無舟可渡、無筏可乘、諸軍著甲手兵器、徒渡其河、

無一人濡其首者、豈有溺乎、我軍士破門踰牆直進

挑戰、賊徒死者数千人、我軍士之死者纔不過三五

人、且此城之固者、鉄関難透、見可而進、知難而

退者師之常也、與徒至於覆敗、不若全師先退、〔先

退〕而諸卒暫退於佐土原、

同季秋上瀬、右馬頭以久藏廿九為大将、伊集院右衛

門大夫忠棟・平田美濃守光宗・上井伊勢守寛兼為

副將再攻之、而陷石之城也、

天正六戊寅年之冬、大友新太郎義統・老父義鎮催

数万之軍衆、來圍日州新納院高城、太守義久

聞之、則率大軍發鹿兒嶋、先屯佐土原矣、同

十一月十一日戊午、義久公發佐土原揚大旗

將卒数万甲兵勵匹夫志、自本營發出來而与我数

万兵屯野外者欲較勝於一戰、其勢似不可當者、然

而我兵与之戰而勇銳之兵者数百人、我軍亦有

本田因幡守親治・北郷藏人者相戰而死、於茲大友

之兵乘其勢追我兵有退者、是時 兵庫頭忠平注率

数万之軍兵、親手戈矛、勇往而對大友之軍、此

時圖書頭忠長与右馬頭以久為伏兵、而合戰之半、

自左右起、而横進討敵兵莫大也、然味方之諸

將士卒数万鼓譟踴躍而爭先赴此地、有洪淵無徒渡

者、大友之諸軍与味方軍士於兵刃既接之時、忽

敗而人馬欲右欲左、無可避之地、以不得已而悉入

深淵溺死者不知幾千万、殘黨者漸興尸而歸豊後且

擒於清田左近・柴田内記者、此兩輩後有其死使帰

于本国、故為報恩願自豐後贈宝刀一腰以久(也)、
其太刀今有垂水之家、義久(公)感於以久之勲功、
賜御馬一疋鹿毛、是偏以久之家臣町田周防守忠房
依軍功顯以久之武勇也、仍自 義久(公)御鎧一領
下賜于忠房、且又自以久拜(賜)宝刀治工忠房、(而今
殘子孫、)

文祿元壬辰年、 関白秀吉公征伐於朝鮮国、依之
義久(公)者肥前名子屋伺候 秀吉公之御陣、舍弟
兵庫頭入道惟新父子三人者引率薩隅日三三州之
軍兵、而涉于朝鮮国、右馬頭以久歲四、同四月十
日、率清水・鹿屋・種子嶋・屋久嶋・永良部嶋之
軍勢(兵)数千、而赴朝鮮、于時以久嫡子又四郎彰
久者、被侵疾病而不能渡海(也)、
伊集院右衛門太夫忠棟入道幸侃陰聞企謀叛、
(而)▽忠恒主聞之△慶長四己亥年三月九日、於伏見
召忠棟于於茶亭而羞佳(美)饌、及于退出、 忠恒
主(公)直追斬之、侍童別府小吉者亦隨而討之、故
嫡子源次郎久真欲報父讎、於庄内而構數箇所之
城郭也(矣)、 忠恒(公)▽此時在上方而聞之、(告)

家康公▽乞暇△而帰薩府、(備數万)
于時右馬頭以久歲五十一為大將、同五庚子年正月四日、
伊集院掃部介所竄破却志和地城郭(矣)、然家臣
海老原源右衛門尉為利致一番鎧、 忠恒(公)歎美
武(功)、而賜備前勝光之宝刀(也)、右馬頭一腰且以久家来高
名 甲乙有 御前糺明、一番鎧
敵四人海老原源右衛門尉、

向大勢太 加世田忠兵衛尉、向大勢
刀打又鎧鎧也 川上六郎兵衛尉、
向大勢 伊作四郎兵衛尉、向大勢
田才之丞、向大勢鎧 樺山清右衛門尉、小川半介
兵衛尉、大勢之時 肝付平右衛門尉、大勢上話 松元權兵
衛尉、同時 同人、大勢上話 竹迫與兵衛尉、同時 同人、
大勢時 本田甚兵衛尉、大勢時太 調所丹後守、大勢之時於
太刀打 本田甚兵衛尉、刀打亦鎧 調所丹後守、高城分捕也
重田七之丞、同日、手負之人数一ヶ所 肝付平右衛門
尉、鎧疵 加世田仲兵衛尉、刀疵 高野談兵衛尉、
鉄炮疵一ヶ所 添田長(介)、右 藤井談五左衛門尉、鉄炮疵
一箇所 山仁介、鉄炮疵二ヶ所 町助作、刀疵一ヶ所 竹忠介、
同日、戰死(者)桑波田飛彈守、海老原源右 衛門尉内者 佐介、慶
長五庚子年、(徒)自以久伏見城責関箇原合戰之為加
勢而桑波田市左衛門尉景永主宰、於鹿屋之軍上而上

洛、▽參石田治部少輔殿館、而自以久告加勢△属 義

弘(公)者也、(慶長)七壬寅年八月十八日、加治木

三郎五郎・同仙次郎(幸佩)兩人(從)義弘(公)召

鹿府、然於谷山梯而右馬頭以久、(慶長)八癸卯年自

伏(兵)打捕兄弟者也、(慶長)八癸卯年自 公方△家

康公(以久拜領佐土原、而從垂水移佐土原)(慶長)十五

庚戌年四月九日、於山州△伏見卒、歲六十一、法

号高月院仁雄宗怒大居士、(墓所京四条通寺町之内在

大雲寺境内、)殉死四人墓有同所△殉死士肝付治部右

衛門尉・日高大煩兵衛尉・久保權太兵衛尉・猿渡

右近、)四人也△「自忠將至以久而領清水・鹿屋、然以幸

侃之謀略而帶 関白△秀吉公之命、而亦賜種子・屋久

・永良部△三嶋者須當天正之末欵、)其後△拳三嶋而賜

垂水者可當慶長四五年欵、年月日不詳、以久家老今者役

人卜唱(候)、町田周防守忠房始者一人)二而候△(其後

子町田周防守忠義、同役二吉竹云人有之由古文書二見候、共 俗名不相知

以久代息町田周防守忠義役人、同役二吉竹云人在、俗

名不知也、)又別文書二久雲、忠義二見得候、久雲(川南安藝人入道久雲二而

候、忠義者川上六部兵衛忠義二而候、右忠義者以久・彰久・信久迄二代役

南安藝守入道久雲也、忠義者以久・彰久・信久三三代

人相勤候、右忠義も同前三代役人と相勤候、忠義嫡子町田勤左衛門忠義

役人相勤、川上出羽守忠實毛以久・彰久・信久三三代

者彰久・信久兩代役人相勤候、信久代安樂休左衛門兼致役人相勤申憑
役人ヲ相勤也、忠義嫡子町田勤左衛門忠照者彰久・信久
兩代役人を勤、安樂休左衛門兼致も信久一代之役人を
相勤候、)

女子 嶋津圖書(頭)忠長室

天文廿三甲寅年八月廿七日誕生、母同、

寛永四丁卯年二月八日卒、(享)歲七十四

法号楊窓妙宣大姉

彰久

又四郎 修右衛門尉

永祿十丁卯年誕生、母北郷左衛門尉時久女

「以久離別(而)庄内住 元和九癸亥年六月九日卒、
池上、故称池(之上)

法号考慶龍壽大姉 玉牌石塔在庄内都之城竜峯
寺△

一昨夜野村一得下着仕候而、其元様(御子)承申候、就

夫此元より玉林坊へ飛脚相到、龍伯様御状差關

紙涯分御佐之儀、相濟關紙可被申入候關紙 少将様

關紙見關紙御悦共申上候て可然候者、其許にて關紙

御引之

關紙見關紙御悦共申上候て可然候者、其許にて關紙

關紙認候て披露肝要候、恐々謹言、

(慶長八年)

正月廿日

右馬入

宗愨(花押)
(以久)

参

又四郎殿

(本文書ハ「日記雜錄拾遺家わけ」新城島津家文書東大八一号文書卜同一文書ナルベシ)

肥前国高来郡有馬修理大夫鎮貴者、此時九州之内肥筑豊前後六箇国之探題竜造寺隆信有龍鷹一羽、不知翔而行方(也)、鎮貴得之而薩隅日三刃之探題獻義久(公)、隆信僞聞之、甚怒而殺質子兄弟(也)、鎮貴大歎而遺恨滿乾坤、(雖)欲報仇勢微而不能敵、故来佐土原而見嶋津中務太輔家久而乞援兵也、家久憐之、入鹿府告義久(公)、(對)義久(公)曰、(近隣之國)主臨危難、則相救者古今有例而所義士守(也)、雖然衆寡強弱雲泥万里也、誠似以小不可敵大、然不可不討無道、家久率將(卒)以謀計(不日)可征伐、故天正十一癸未年、使援兵渡高来警衛鎮貴焉、隆信又聞之集軍兵、故家久為大將、其子又七郎忠豊与嶋津又四郎彰久(歲十)七

同姓圖書頭忠長為副將、(而)天正十二甲申歲三月、

渡高来而撰吉日、同廿四日、以將卒必死志自海陸

進而構陳嶋原、而相戰自辰到未、于時又七郎忠豊

戰半横進(而)如電光呼叫(而)打敵、大崩而逃去矣、

戰死者不可勝計、終得勝利而帰陣矣、取隆信首者

川上左京也、此時彰久分捕而勵軍功、敵携鎧、勇

懸雖突貫太刀鏢、彰久奪勇暫戰而打敵、且負痛手

遁其難(也)、家臣戰死者有馬宮内少輔・蘭牟田大

煩兵衛・池山藤七兵衛・蒲池佐助・竹下助左衛門

等也、

文祿二癸巳年、又四郎彰久(歲廿七)雖未病愈、自父以

久言上秀吉公快然而朝鮮陣中(詆)父子代合、蒙

御免畢、依之彰久无是非、同五月十一日癸清水、

於名子屋之御陣見于秀吉公、然名賜修右衛門

尉而渡于朝鮮国、

同三甲午年三月十日虎狩之時、彰久家臣安田次郎

兵衛尉捕猛虎而顯強勇、故義弘(公)感武工而賜

宝刀長光一腰、(矣)

猶々申まいらせ候、こゝもと立ちまへのよし御前よりうけたまはり候、去なからかうらいにててんきう(典殿、以久)へも御談合申、よきやうことゝのへ申へく候間、御心つかひ入申ましく候、さてハ又天きうはうへ御祈念の事、猶々御たのミ被成候てしかるへく候、馬など御引せ候ハ、其次を以かいふん(竿打)御憑あるへく候、またく(竿打)いつミへさほうちくたり申候、自然御心つかひ共候するや、少茂其元の儀にてハ無之候、いつミまでの事にて候間、御心得のために候、こゝもとへ申ちらし候ふんハ、あか國入と申候間、能時分まかりわたり候間、さきのしあわせもよく候するとこそそんし候へ、あか國さへめしはたされ候ハ、やかて御さちう(掃朝)と申候間、御こゝろつかひあるまじきかところ存候へ、又々留守中おくへいらさる物共まかりとをるへからさるよし申付候、又々申越し候間、御こゝろへのために候、御つほねいわミ・大しむ、その外の人數へかい

ふんく御奉公又は火ようしんなど申され候やうニ御意あるへく候、

たよりのまゝ申まいらせ候、京留りより出船申候てよりしゆん風よく候て、過つる廿八日ニひら戸へ入津申候、しかれハなこやへ使を上申候て、御意をうけ(甲)候へは、御前(三)も来六日ニ御渡しなされ候間、それかしも御さきへまかりわたるへきよし御意にて候間、明日とかい申へきかくこに候、れう(龍也)はく様御ろうたいと申、御しんらう申ハかりなく候、御身もきこしめし候て、御こゝろつかひさつしまいらせ候、又々(久信、信久)きく壽手ならひ申され候哉、ゆたん候てハせうしまてに候、しかく(八)のすミにてハ無御座候へ共、こゝもと(八)ありあひ候まゝ、二丁進之候、かいふむく手ならひかんようニ候、又々(九)とをあるきの事むようにて候、れん、申やうニ、いらさるわらん(童)へ共あつめ候てハしかるへからす候、御とも申候するもの共心かけ申へき事かんようニ候、しせん川あそひなどへ御つかハし候ハ、しかくの供しゆ被仰付候てしかる

へく候、又々先日(彩久母)は池上御(御)こしなされ候へとも、

いそき申候てしかく御會尺共不申(御候)、いまに残

おほく候、そのちいかほと御とうれう共めし候

哉、いかとこそ申候へ、池上へも文して可申候

へ共、いで舟にていそき候ま、其もとより被仰

越候てしかるへく候、又六もかうらいへたやすく

つき申候てしあわせよく候よし申候、池の上定

〔而〕きこしめしたく候する間、如此候、かきねて

(文祿二年)

六月二日

きよ水

うちハ、へ

参人々申給へ

ひら戸より

又

(本文書ハ旧記雑録拾遺家わけ十二新城島津家文書黎明館三三三号文書下同一文書ナルベシ)

過つる十一日ニふさんかいへたやすく入津申候て、
今日十四日こちやハんニつき申候、しよへんい
まてハ仕合よく候、石田殿などへハさしいて不
申候へ共、さためてしあはせよく候するかと存候、
又々きく壽かいふんく手ならひ申へく候、去な

からこもとへさいく手火矢のをときこへ

申候、さやう二候は、ふち馬・やき・ひつし・ろ

馬など、其外いろくめつらしきものともとめ

候ておき候へ共、とをありきなと申候は、進し申

ましく候、かいふんく手ならひ申候やうニ御分

別あるへく、又々池上様へこもとへたやすく

つき申候よし、次之折ふしハおほせこされ候てめ

てたく可存候、いそき〔の〕ま、如此候、かきね

(文祿二年)

六月十四日

うちは、

へ参

より

又四

(本文書ハ旧記雑録後編二二一四一号文書下同一文書ナルベシ)
(本文書ハ旧記雑録拾遺家わけ十二新城島津家文書黎明館三三三号文書下同一文書ナルベシ)

なをくきく壽とをくありき申ささるやうニ
候てしかるへく候、こもとよりおそろしき
ものまいり候間、しせんゆきあひ候てハめい
わくたるへく候、しせんありき候するおりふ

しハ、しかくとも共つれ申へきやうニしか
るへく候、又々ひたちさかしく御座候哉、(内
馬場)う
ちハ、へまいる候するニ、御酒などふかくく
たされざるやうニおほせらるへく候、それか
しもやかてきちう申へきよし御物かたり被成
候て御きかせあるへく候、

こゝもとへたやすくつき申候、いまほときんむい
と申ところへさつましゆハミなく御座候間、同
前ニまかり居候てさきへもとをり申さす、何共
手(御持)向わるきやうニこそ候へ、いし田とのへもいま
たまかりいてす、(御候)去なからさしいて申へきよし
被仰候間、明日かたまかり出へきかとそんし候、
さてハ又三郎・弥三衛門尉一たんさかしくほうこ
う申候、二蔵か事ハちと不心かけに御座候間、銀
衛門尉・善蔵か間ニかへ申たく候間、そのしたく
御させ有へく候、とかく此方(御方)より一人を以申こし
候する間、こさいはそのしふん可申上候、又々き
く壽へほうさうさけさや・くつ、上井のつかひへ
もたせ申候、又善兵へへつむき二たん、まことに

21

御音信まで候、かきねてく、

(文様二年)
七月三日

うちは、
かうらいより

へ参人々申給へ

(本文書ハ「旧記雑録拾遺家わけ」新城島津家文書黎明館三七号文書ト同
一文書ナルベシ)

此あひた御さううけたまわらず候、こゝもといま
ほとなにことなく候、つきにハきくしゆしやうら
くのこといか候や、御こゝろもとなくそんし候、
てんきうへかいふんくおほせられ候て、御とゝ
のへあるへく候、はやく此ころハうつたちも候
や、うけたまわりたくそんすはかり候、われらも
きふんあしくて、なにとともくきつかいにそんし
候へハ、このころハすこしつよく候まゝ、いま
ふんにて候ハ、したて候するかとそんすはかり
候、又々かうかんまこ上のこと、てんきうまへよ
り、(幸佩)そもしさまへおほせられ候や、そもしさま御
まへよりハふけんにて御る候まゝ、いか候す
るやとおほせのやうにてんきう御物かたり候、

こゝもとにおひてかうかんへ、てんきうまへより
おほせられ候へ共、くにもとにおひて御へいしあ
るへきのよしおほせ候まゝ、なをくもてんきう
へたん(談合)かう候て、たとひしんしやく候とも、かた
くおほせられてとちまり候やうに御ふんへつかん
ように候、これハいこのためになるへきかとそん
し候てかやうに申候、又こゝもとふりよのこと
候て、なにともせうしにそんし候、さやうに候へ
ハ、われらしんしやうのこと、このたひにて候す
るかとそんし候、そもしさま御まへより、れう
はくさまへよくく御申候て、しかるへく候、(御)
やうに申候も、きくしゆのためとそんし候てかや
うニ申候、うすくきいはやくくのほり申候ハ、
ちくこなどを御のほせ候て、れうはくさまへ御
申あるへく候、このたひわれらしんしやうのこと
とちまらず候へハ、なにともくめんほくをうし
ない申候まゝ、よくくせいを御いれ(御)て御申あ
るへく候、てんきうまへより、御申候すること
もハなりかたく候するのあひた、そもしさま御

まへに候するとそんし候ことに候、てんきうまへ
よりハ、(安宅)あたきとのまてなにとそ御申候てしかる
へく候、たゝ大かたにおほしめし候てハなるまし
きかとそんし候、こゝもとをのくあつかいのや
うもつたへてうけたまハリ候、へちにハたれも候
ハぬよし、をのく申され候とうけたまハリ候
まゝ、よくくせいに御いれあるへく候、ちうこ
んなからかやうに申候ことも、きくしゆのためを
そんし候て申ことに候、又れうはくさま御ま
へより、きくしゆのこと、又われらこゝもとへま
かりる候とて、たひくかたしけなききよ(御意)ひ候、
つるてのおりふしハ御れい御申てたまハるへく候、
かやうなることも、人々うけたまハリ候ハぬや
うに御ふんへつあるへく候、申におはす候、なを
かさねて、めてたくく、かしく、

(文様二年カ)
九月十一日

▽(御)墨引

▽(御)より

うちは、▽(御)にて

又

人々申給へ

〔本文書ハ旧記雜録拾遺家わけ十二新城島津家文書黎明館三八号文書ト同一文書ナルヘシ〕

猶々申まいらせ候、此たひきんちうと申とり
 二ツとゞき申へきことハ不存候へとも、つか
 ハし申候、又々其もとはん衆何事もゆたん申
 候ハぬやうニおほせ付られ候てしかるへく候、
 小者その外のものハ申ニおよはず、おくへま
 いら候ハぬやうニはん衆何右衛門尉などへ申
 付候、かとなともはやく敷御さゞせ火用し
 んかれこれゆたんなきやうニおほせ付らるへ
 く候、又々次之おりふしハ、京都へ御申ある
 へく候、たひくかたしけなきよしおほせく
 たされ候、ことにそれかし留す申事にて候間、
 何ことも御ことはをくわへらるへき事、奉頼
 よし御申あるへく候、又らいせんゆたんなく
 かんきん申候哉、かいふんくせいを入申へ
 きやうニおほせ付らるへく候、清水（寺）・たかて
 ら・たいみやうしなどへかいふんくきねん
 ノ事御たのミあるへく候、又々申候、まかり

たつ時分ハ、ひたちきあひあしく候ツ、い
 か、候哉、こ（ろ）もとなく候、年よりの事に
 て候之間、さいく御たつねなされ候てたま
 わるへく候、こ（分）もと申ちらすも、正月ハ
 ミなくちん引あるへきよし候之間、其うち
 かいふんやうしやう申候てまち可申由、おほ
 せきかせらるへく候、又々ゑのこ犬などもミ
 なくさかしく御座候哉、山などへもひき申
 へきやうニ、きく壽前より申付候てしかるへ
 く候、またたよりノおりふしハ、こまかにか
 き付候て御つかハしあるへく候、
 そのうちハ御左右うけたまはらす候、こ（も）とへ
 何事なく拾月卅日ニつき申候、しかれハせんちう（船中）
 にてハきあひも次第くニよきやうに候つれ共、
 から嶋へつき申てよりきふんしかくなく候て、
 何共めいわくに存候、将又其もとにてハおそくた
 ち申候とて、（武庫 義也）御前もあしく候よし、い
 ろく申かた共候つれ共、こ（も）とノやうすハけ
 つく此ていにてたち申候とて、種々御ねんころニ

おほせられ候間、まんそく此事^②候、又々きく壽
 さかしく御座候哉、このころハさは打と□^⑤候する
 間、其うちハあそひなどへさしいて申へき事むよ
 うにて候、かいふんく手ならひノ事ゆたんなき
 やうニしかるへく候、あけ字申候ハ、ミ申たく
 こそ候へ、さほ打はて申候ハ、手ならひノすき
 くくハうつらかりなどへ時々ハよく候するか、
 とも衆など^⑥ゆたんなきやうニおほせ付らるへく
 候、きく壽へ何たるめつらしきものかなと存候へ
 共、さやうノものも今ほど^⑦なく候、のろノ子もい
 ろくくろかけ候間、いかさまとらへ次第つか
 ハし申へく候、かさねてめてたく、かしく、

文禄三年カ
 霜月拾七日

うち馬場 から嶋
 まいる人々申給へ より

本文書ハ旧記雑録拾遺家わけ十二新城島津家文書黎明館三九号文書下向
 一文書ナルヘシ

猶々申まいらせ候、やさうの事めしつれたき
 よし申入候ツ、去ながら其折ふしよろつとり

ミたし候て、しかく不申入候、こゝもと
 きやくら^⑧いしけく候へハ、とりあわせ申もの
 しかくなく候間、やさうの事らいはるまい
 り候するやうニおほせ付らるへく候、又々や
 さうを以、きくしゆへいぬもせいたうの事申
 候ツ、いか候や、くわしくうけたまはりた
 くこそ候へ、またく犬つき衆へ山などへさ
 いくまかりのほり候するやうニ、きく壽前
 より申つけへく候、又々池の上へたよりのお
 りふしハ、それかきあひしかくなく候、
 去なからいろくやうしやう申候間、御こゝ
 ろやすくおほしめし候へ、又さんせうのきあ
 ひもしかくなく候てせうしニこそ候へ、此
 よしたより^⑨の^⑩時候てよきやうニおほせこさ
 るへく候、又々申候、ひたちの事せんとも申
 こし候へとも、又々申事候、年よりノ事にて
 らうきなども御座候間、さいく御たつね候
 てたまはるへく候、又さけなどすき申候ハぬ
 やうニおほせ付らるへく候、らいはるハかな

らすく(帰朝)きちう申候する間、其うちさかしく

まち申候へとおほせきかせらるへく候、留守

の事にて候之間、火用しんかれこれ御ゆたん

なきようおほせ付られ候てめてたかるへく候、

以上、

まかりたち候てより後は、御さふうけたまはらす

候、そこもと御さかしく共おはしまし候や、それ

かしせむ中にてハき相も次第ニよきやうニ候つれ

共、こゝもとへまいりつき候てよりきふむしか

くなく候て、いつかたへもさしいて申さすやう

しやう申候、去なからりせいめしつれ候之間、い

ろくくすりなとたまはり候て、ゆたんなくやう

しやう申候、それニ付ても神りよの事、たいもく

にて候之間、てんりう坊などへ御たのミなされ、

其外御ゆたんなきやうニ御分別を以おほせ付らる

へき事、△たかるへく候、らいせん一たん

しむらう申候らん、なをくきねんの事、ゆたん

なきやうニおほせ付らるへく候、次はさほ打之事、

いかゝ候やと心つかひ存計△候、たよりのおりふ

しハこまかにおほせこさせらるへく候、又々きく

壽手ならひの事、かいふんく御せつかん被成候

て御ならハせかんようニ候、去なからよくならひ

申候ハ、すきくにはあそひなどもそとハよく

候するか、(上字)あけしなど申候ハ、御つかハし候へ、

ミ申たくこそ候へ、てさへならひ申候ハ、のろ

のかのこらせ申候てめしをき候間、此たひ

もつかハしたく候へとも、▽よその舟にてなりか

たく候間△かさねてのたよりへつかハし申へく候、

かさねてかしく、

(文禄三年九)
霜月廿九日

きよみつ より

うちは、 から嶋

(△にて)人々申給へ

(本文書ハ旧記雑録拾遺家わけ十一新城島津家文書黎明館四〇号文書ト同一文書ナルベシ)

彰久在巨済之陣中而病漸々重、文禄四乙未

年七月五日、不幸(而卒、蔵二十九)短命而卒矣、(法号天宗慈叟)殉死之士

大押定門(△) 安田九右衛門尉・濱川糸右衛門尉 ▽九右衛門 糸右衛門

兩人者朝鮮國より遺体之仕仕、濱市へ着船之節、故郷清水迄者不被帰、於濱市殉死仕候。

彰久死骸渡隅州清水之采地、而葬楞嚴寺、

于時家老町田周防守(忠堯)供奉矣、於朝鮮國(之)彰久之軍(勢)之軍代者、自 義弘(主)

命川上六郎兵衛(附)忠實、然大明人之合戰忠實顯軍功、蒙數箇所疵而辭軍代、故後軍代

命肝付豹右衛門(附)兼弘、

〔文祿四乙未年七月五日卒、享歲二十九〕

法号太宗慈雲大禪定門]

重時 初忠豐 鎌三郎 又六

天正元癸酉年誕生、母同前、入来院彈正、

重豐猶子 室嶋(津)左衛門督歲久女

慶長五庚子年九月廿三日、(濃州)関(ヶ)原(合戰)破而於中途戰死、歳三十 法号雲庵

定曉居士

北郷讀岐守忠能室

天正廿壬辰年誕生、母原權兵衛尉女

寛文八戊申年(三)二月廿日卒、法号花庭玉蓮

大姉

女子

女子

女子

女子

忠興

堯舜坊 從五位下 右馬頭

慶長四己亥年五月廿九日於種子嶋誕生、

母種子嶋衆中、松木貞右衛門尉姉

慶長十五庚戌年、(右馬頭)以久(卒于

伏見)之後、從 公方家康公日劬佐土原

賜以久之嫡孫又四郎忠仍、後相模 守信久、然深奉

辭之間、忠仍之伯父忠興賜佐土原、而為

居城之地者也、

垂水之住人樺山清右衛門尉、相模守佐

土原移之儀奉辭由を承、相模守伯父堯

舜坊ニ以久之遺領を欲令相續候而、相

模守へ伊勢參宮之暇申候而致上洛、駿河

之府中(三)參候而、家康公ニ以久之跡

目(を) 相模守辭申候間、堯舜坊へ被仰

付被下度之趣奉訴候処、(二)江戸(三)下り

候而、秀忠公(三)可申上旨、(二)御差圖(三

而) 秀忠公ニ右之趣奉願候へ者、相模

而) 秀忠公ニ右之趣奉願候へ者、相模

而) 秀忠公ニ右之趣奉願候へ者、相模

久雄

女子

守御断於申上者、弥堯舜坊ニ可被仰付由候而御内證ニ而以久跡目御免之御證文預候而罷下、堯舜坊ニ申聞置候、然者表立候而堯舜坊還俗仕り、佐土原城主相續之儀被仰渡、則御受申上、〔致上澄〕家康公〔御父子三〕以久續目之御礼〔申上〕被申上、且又江戸へ参、秀忠公江茂續目之御礼被申上候而佐土原〔三〕移候而〔御座〕候、依之伯父松本貞右衛門江者知行五百斛、樺山清右衛門へ者此節之忠儀ニ依而知行千斛被宛行候、

寛永十四丁丑年六月十一日於江戸卒〔去〕、
 歳三十九
 法号青蓮院原隆宗普大居士

早世
 母岩本善兵衛尉女 法号桂昌芳林大姉

忠高

久退

久〔重〕

万壽丸 右馬頭
 寛永十癸酉年三月四日誕生、
 母丹生新三郎女
 室 中将光久〔主〕公御女
 寛文三癸卯年十二月二日卒、〔卅一歳〕
 法号見光院殿直普隆庵居士

初久寧△ 羈千代 久三郎 〔主膳〕

久壽
 式部▽少輔△ 惟久〔依〕幼稚〔而〕勤守
 護代、後讓家督于惟久、〔故〕分地高
 三千斛、

半兵衛

初国久〔中〕 久英 万壽丸 又四郎 飛彈守
 慶安四辛卯年三月四日於江戸櫻田屋敷誕

生、

〔室〕

延宝四丙〔辰〕年八月十一日卒、歳二十六

於智恩寺火葬、法号松殿院殿隆誓宗雲良

心居
士

惟久

万壽丸 又四郎 左京進 淡路守

女子

立花出雲守〔實〕長室（尊）

忠〔就〕（雅）

▽初忠就△ 万壽丸 又四郎 但馬守 加賀守

元禄十五壬午年霜月廿九日於江戸誕生、

久睦 主膳

正方 大膳

久府〔山城〕（式部）

久柄

又四郎

信久

初忠仍 菊壽丸 又四郎 相模守

天正十三乙酉年四月廿四日於隅州清水誕生、

▽〔母〕太守義久公第二御女、名称新城△

又四郎忠仍、菊壽丸与申節伏見江為人質、

五六ヶ年も為相詰由〔申傳〕候、父彰久朝鮮

國〔江〕在陣之内上洛〔之儀〕、彰久書中 竜伯

公御書中、又者石田治部少輔殿より新城さ

まへ被遣候書中ニも相見得候、

24

為改年之祝儀被差越使者珍重候、先以其元無事候
由大慶候、此方無相易儀候間可心安候、然者伊勢

兵部少輔所より銀子之事申越候処ニ、百貫目無利

ニ借給候段、祝着之至候、此外之儀、手前ニ無之由

候間可為其分候、猶期来首候、恐々謹言、

〔寛永元年〕
三月十一日 家久〔花押〕

相模守殿

猶以御懇意之儀共忝存上候、何も追而可得御
 意候、以上、
 御懇書忝候、然者平右衛門尉殿ニ被仰合候通候て

先年上洛之時分、為饑別銀子拾貫目厚志之処、何
 角兔取紛不能礼詞、誠背本意候、今度又琉球へ銀
 子用段ニ付、方々借銀之儀、從年寄中申之處、貴
 所手前より百貫目無利談合在之由、兩度之忠儀不
 淺候、今時分如此儀共者、其類少事候、向後不可
 致失念候、恐々謹言、

(寛永元年)
 三月十三日 家久(花押)
 相模守殿

當春之為祝儀被差越使者、殊太刀一腰・馬一疋至
 遠境慇懃之段令祝着候、將又煩之様子、如何躰候
 哉、雖不及申候、療治不可有油断候、猶追々諸慶
 永日中可申加候、恐々謹言、


(寛永元年)
 三月廿五日 家久(花押)
 相模守殿

得其意候、殊見事之御鉄炮式挺拜領候、忝次第二
 候、猶肝付平右衛門尉殿へ申入候、恐惶謹言、

(文祿二年)
 五月廿五日 八十嶋助左衛門尉


嶋津又四郎様
 人々貴報

猶々御音曲承候、大慶不過之追々可得貴意候、
 乍恐令啓達候、仍昨夕者被加食丁寧之御振舞、誠
 以忝次第候、殊御口切御茶被下儀共、無二冥加儀
 共ニ候、先為御礼一書申候間、御前之儀万端可然
 候様、宜預御取成候、恐々謹言、

(文祿二年)
 五月廿七日 八十嶋助左衛門尉

 柏原彦左衛門尉
 乗政(花押)

伊集院半右衛門尉殿

(本文書ハ「末川家文書一〇号文書ト同文ニツキ書略ス」)

慶長十五庚辰年四月九日、祖父以久於伏見病死之後、自〔公方〕家康公以久使遺領賜

嫡孫相模守忠仍、歳二十六、然外祖父 竜伯

〔公〕^(主)在病床故、移〔于〕遠方依難成孝養而堅

奉辞之際、以久之三男忠興拜領佐土原、

相模守佐土原を奉辞候子細者、 竜伯〔公〕御宗領

孫三而、内々 御意御座候者、 我等ハ女子三人

二而無男子候間、薩隅日三刃之守護職を相讓坎、

無左候ハ、御隱居〔領之〕高六萬斛、是を後年可

被下之旨、兼而相模守へ被仰聞置候、依之佐土原

之儀頻ニ御断為申上由候、〔其〕^(此)以前相模守江守護

職御讓之儀、御家老中へ被仰出候処、^(二)嶋津下野

守殿より御申上被成候者、御血脉ニ付而者御世讓

之儀ハ御尤^(二) 奉存候得共、 惟新様自國他國之御

弓箭ニ御軍代^(一)御勤^(一)被成候而、彼御勲功を以御家

御安全之儀、諸人目前ニ為存事候、其^(御)忠賞ニ者

惟新様を御養子与申上度候へ共、御年齢左迄御違

も無之候得者、 惟新様御息又八郎〔忠恒〕殿を聲

御養子ニ被成、第三之御女國分様を奉取合度事之

由御申上三而候、然者両条之間、 竜伯〔公〕御心

依難御決、正八幡宮江被遊御參詣、御孫相模守・

御甥又八郎兩人之間、守護職御讓之御鬮御申上被

成候処、又八郎殿へ御鬮下候而、又八郎殿御養子

〔三〕御成被成候、其後慶長拾六辛亥年正月廿一日、

竜伯〔公〕御逝去之後、御隱居領御讓之儀も内々之

御約束ニ而、何も御證文なども無之故、相模守^(此)

七^(藏)申分も不罷成事候、然者守護職も相廻、佐土原

も取墜、御隱居高も不相齊、皆為空事△

秀忠公江戸御城御普請ニ付〔而〕、相模守^(藏)為御加

勢竹・柱・筵等直献上〔仕〕候、〔其節〕使者安樂休

左衛門相勤申候、休左衛門者相模守知行壹万八千

斛之内納戸附之高千斛方之役人ニ而候、

手形写

拾二端帆一艘船頭内藏允、水〔手〕^(主)拾六人、上乘安

樂休左衛門主從四人、合貳十人、積荷なよ竹千五

百束・角柱三百本・琉球筵千枚・まくり貳千斤・
鉄五百斤・(①果木)櫃五・皮籠大小貳十、但相模守殿
役人江戸へ被相廻由候、無吳儀可差通候、若此書
物ニ令相違、其外年号月付餘程延於罷通者、堅留
置爰元へ可致披露者也、

元和四年五月七日

(伊勢貞昌)

兵部少輔印

(三原重種)

諸右衛門尉印

(町田久幸)

圖書頭

(比志高国貞)

紀伊守印

分國諸浦

通舟改衆

(本文書ハ「旧記雜録後編四」一五三二号文書ト同一文書ナルベシ)

休左衛門江戸へ着仕候而、献上物之首尾江戸御老
中様方江申上候而右之品々相納、其後 御奉書御
渡之節者御城ニ登り、御老中様方へ御目見仕候処
ニ、白銀三枚(從)公方様頂戴仕候而、難有奉存
候、外(三)又諸國諸浦之通船御手形卷通者如何仕
候哉、紛失いたし候、

※行團

(知行壹万八千石之内、千石者相模守納戸付高ニ即季、取納御座
「相模守」(壯年之時分高壹万八千石之内、千石後年隠居料
候、右千石方之役人安樂休左衛門相動候内、江戸へ使者相動候付、御手形
トシテ差分取納有之処三付千石方之役人安樂休左衛門江
ニも相模守殿役人與書記有之候、然者相模守信久代安樂休左衛門兼致役人
被仰付候而相動申候内、秀忠公江戸御 城御普請ニ為
相動候、同役者忠実・忠義ニ而有之候へ共、支配連ニ御座候)
御合力、相模守より直献上之節、休左衛門使者相動申
候」

寛永七庚午年、中納言家久(主)御代江戸上屋鋪(二)

公方・秀忠公御光儀之節、相模守信久(歳五)御目見

仕候、其節之次第(左ニ)相記候、

一 四月十八日卯之刻、公方様数寄屋露地口よ

り 御成、御相伴丹羽五郎左衛門尉・加藤左

馬助、数寄屋者古田織部、指圖之写三帖臺目、

一 掛物 楚石 横文字 一茶入 平野肩衝(かんたう)

東山(之)の
れんの切、

一 茶碗 高麗三足割かうたい

一 茶杓 利休(之)作 一水指 しからき、耳有、ともふた、

一 花入 かねの筒 一香合 瑪瑙 山谷と銘有、

一 釜 車軸 一炭入 ふくべつんと切、

▽⑩ 一棚に環・羽箒貢之△

(旧記雜錄後編五二九八号ニヨリ補之)

一 御花 公方様被遊候、花ハいちちはつ白きと紫と、
出(し)ニ者岩藤也。

一 後之御炭 公方様被遊候、何れも比類無御座候、

鎖之間

一 釜は白ミ之かね、八角、色々之紋有、

征夷將軍頼朝卿之釜と言、自在ニ而釣(之)也、

一 茶入瀬戸肩衝、但袋棚(二)置之、棚之中之重二

臺天目置之、下に水さし・蓋置あり、水さし

ハかねのつるへ南蠻物也、

一 囲爐裡之西之方ニ上壇書院有、書院之真中ニ

鉦をかくる、一休之軸之物、硯、筆架に筆墨、

側ニ羽箒掛之、硯は未央宮之瓦、此銘東波居坡

士と有之、

(銅壺)
たうこの間

一 囲炉裡あり、釜ハ高麗、五徳ニ居る、棚之上

に中次之茶入、此外飾道具有之といへとも略

す、

一 同床ニ三幅對之墨繪掛之、牧溪筆、

中ハ布袋、此贊寧退耕、両之脇朝陽對月、此贊

痴絶、掛繪之前ニ大机有、唐物也、机之面ニ

(色々)
〔石色々〕の紋あり、筆返しハ唐木、机之真中

ニ蓮之葉ニ翡翠之泊りたる胡銅之香爐有、

一 御茶過て鎖之間へ出 御被遊、道具共被成

御覽、夫より御寢殿へ成せらる、

御寢殿の筋粗記之、

一 御寢殿上壇之床ニ龍虎之二幅對掛る、左ハ龍、

右ハ虎楊月礪筆也、其前ニ花瓶式ツ、池房立之、

花之心、左ハ松、右者竹也、

一 床之前ニ置鳥・置鯉(瓶子)ニ重二筋之之、其前ニ

御座ニ帖敷て、其上に錦之御蒲團置之、御座

之右之方へ御手懸、左之脇ニ御弓、御箠ニ征

矢廿五さす、弓ハはつして弦ハかうよりにて

結い、内竹を御前ニ向て豎之、其次ニ御鏡か

らうとの蓋には不受、疊之上に置(て)御甲わ

たかミの上に置之、如舊記、家老伊勢兵部少

輔飾之、置鳥・置鯉、二重瓶子ハ大草流を以

調之、於此座敷式三献奉調進之、御相伴家久、

一 同床之左之脇ニ三重之違棚有、此棚ニ臺天目、盆ニすわる、水瓶、紫調之鴨之香爐、曲輪之食籠、盆ニ居る、硯箱、骨吐一對、御同朋福阿弥筋之、

一 同御書院床ニ青磁之岩組之硯屏、硯丸山八海之筆架、くりく軸之筆、古銅牛之黒留、古銅柿之水入、筆洗、盆石黒塗鉢ニ居ル、印籠曲輪盆ニ居ル、上ニ釣香爐、脇ニ拂子、御同朋福阿弥筋之、

一 御納戸のうちに硯・文臺置之、

一 此御座敷之次之間ニ梨子地蒔繪之臺子有之、風爐釜・臺天目・茶入・水さし・蓋置・柄杓たて・水こほし、何れも黄金也、躰阿弥鑄之、一 此次之間西之方ニ十二合之折、筋之盛物、きそく有之、式三獻、七五三、十二合之折、何れも天野圖書調之、

一 於御寢殿拜領物

御太刀一振正恒 御脇指一腰正宗 御小袖百御拾二百 御夜物式十唐織 越前綿千把

銀子三千枚

右中納言拜領之、

御腰物來國光 御拾百 銀子五百枚

又三郎拜領之、

御脇指一腰 御拾五十 銀子三百枚

又十郎拜領之、

御脇指一腰 御拾式十 銀子三百枚

越後守拜領之、

一 於御寢殿進上物

御太刀一腰左文字 御脇指貞宗

中納言進上之、

御脇指一腰正宗

又三郎進上之、

御會所之筋略記之、

一 御會所上壇之床ニ三幅對掛ル、中八王右軍竜眠筆、贊之、左者伯牙・子期、右者阮咸・荀勳、皆王暉筆、前三三ツ具足、卓ニ居ル、両之脇ニ大花瓶、是も卓ニ居ル、花者池房立之、心者松也、

一同床之脇ニ上壇違棚有、臺天目・茶入・肩衝
曲輪之盆三居ル、青貝之食籠右同、毬籠臺二居ル、沈
〔金〕箱食籠曲輪盆二居ル、書物石莖鉢鉢ハ、砂青磁
之物有之、

一同書院有、上に喚鐘掛ル、左右之柱ニ大鏡、し
も掛之、下ニ硯屏・硯、龍之筆架、中之墨留
文鎮、古銅之水入、青磁之筆洗、けさん掛算一對、
印籠、軸之物、盆石銘ハ雪舟、鉢ハかねノ物、青磁之花入生
花有、右、何れも福阿弥筋之、

一於此御座敷御能 御覽、上壇よりハ舞臺依程
遠、下之御座敷ニ御座をニ帖敷て、上に金襴
之御蒲團置之、上壇之廣縁ニ畳を敷て東向に
臺子を置、風爐釜・水さし・水こほし・蓋置・
柄杓立已下皆銀也、是も躰阿弥鑄之、

一御會所四之間之大床ニ四幅對掛、繪ハ四季之
景、贊ハ徹明筆、前ニ中央卓之、上ニ瑠璃瑪之之大
香爐に薰物を燒、左右ニ耳花瓶一對、立花有、
心者まつ、花瓶ハから木の机ニ居る也、四幅
對之時、花瓶ニ瓶置事、如旧記、

一御老中衆之座敷、掛物違磨、竹心香盆三層之、
左之違棚二鴨之香爐、〔かねの物也、〕又香
爐・香合ハ盆ニ居置也、食籠曲輪、硯箱・料紙箱
置之、

一御會所江 御成前ニ御簾を卷揚、上壇与廣間
之間之障子を取拂、御座之前より廣間之縁を
懸て進上物積之、

御太刀一腰黒一文字 御小袖百 御拾百
紅糸コウシ二百斤 黄金三百枚 生糸千斤
御馬一疋鹿毛 鞍置 貞誠作

御別當木村孫八郎へ嶋津下野守渡之、
右中納言奉獻之、

御太刀一腰信國 御馬一疋鶴毛久慶

御別當木村孫八郎へ嶋津彈正渡之、

御拾二十 銀子三百枚

〔右〕又三郎奉獻之、

御太刀一腰系 御馬代〔銀子〕二百枚 御拾十

〔右〕又十郎奉獻之、

御太刀一腰系 御馬代銀子百枚 御拾十

〔右〕越後守奉獻之、

一家中之者、於御縁御禮申上候次第

嶋津彈正大弼

嶋津相模守(久傳)

嶋津豊後守(久實)

佐多丹波守(忠治)

樺山采女正(久應)

北郷出雲守(忠亮)

北郷佐渡守(久加)

穎娃長左衛門尉(久政)

入来院石見守(重西)

種子嶋左近太夫(忠時)

嶋津下野守

伊勢兵部少輔(貞昌)

右銘々ニ御太刀・御拾進上之、

一公方様より家中之者へ拜領物

御拾十・銀子百枚

嶋津彈正大弼

右同

嶋津相模守

右同

嶋津豊後守

御拾十・銀子五十枚

佐多丹波守

御拾十・銀子五十枚

樺山采女(女正)

御拾十・銀子百枚

北郷出雲守

御拾十・銀子五十枚

北郷佐渡守

右同

穎娃長左衛門尉

右同

入来院石見守

右同

種子嶋左近太夫

御拾十・銀子二百枚 嶋津下野守

右同

伊勢兵部少輔

一右御禮相濟候而、御座敷へ積置たる進上物皆

々脇へ退、御間之障子をもたて候て、やかに

御能初る、酒井雅樂頭從御前舞臺へ被為入、(忠世)

御樂屋之幕之外より、御能はしめよと仰られ

てより太夫罷出ル、最前ハ御能與七番たりと

いへ共、御乞能有之(三付)、以上八番也、

翁觀世太夫 高砂同人 清經長門守 源氏供養七

太夫 天鼓長門守 黒墳金春太夫 桜川七太夫

御乞能玉鬘長門守 呉服觀世太夫

一御能三番過候而、舞臺へ要脚五万疋積之、觀

世・〔金春・〕金剛・保昌・七太夫江者唐織纒

薄三ツツ、遣之、猿樂衆・役者・地唄まで二

百人江小袖二ツツ、遣之、

一此時御簾をおろされ、公方様御寢殿へ被為

成、七五三之御膳参り、御易之御膳まで参る、

一今度 御成ニ付、從琉球國樂童子数人召奇、

内思徳十三才・真志金十四才・思次郎十五才・江
洲之里主十六才、城間(マヤ) 何れも美麗之童子也、
御寢殿におひて御膳参り、(やかて)樂被仰付、
琵琶・琴・しんせん・三味線・笛・ひちりき・
こ弓・どら・太鼓等ニ而樂仕る、御座敷之佳
興不可勝計、

公方様御快然不斜、日本ニ於て如斯吳國之音
曲別而めつらしく思召之由御説ニ而候、

一 暫被遊 御休息、やかて又御會所之御座敷へ
成せられ、御簾上り御能 御覽あり、きり相
過下候而△則還御、

一 御湯殿之床に御圖子の棚、御手巾掛に御手
拭之、ゆすりつき・御櫛箱・九重の香合・御

香爐・上壇錦之御蒲團・御腰物掛置之梨子
地時繪・御

湯桶・御かいげ(横筒)・水囊、何れも御紋葵之丸、

御水船・御敷板時繪之
御紋有・御西浄之筋等いつれ

も伊勢兵部少輔致之、

一 御寢殿江筋置御鎧一領白糸、かな・御甲一はね御
物惣金い、・御弓一張重藤、・御征矢一腰兼金銀、
ちやう、・御矢数廿五、御

成以後進上之、

(已上)

一 相國様御成、同四月廿一日卯刻、御数寄屋并
御座敷之筋等 公方様御成之時同前也、数寄
屋之御相伴丹羽五郎左衛門尉・加藤左馬助、
御會席も同前、

一 相國様被遊候、御花者朽葉色之百合草、出し
に者鉄せん花、御花比類無御座候(と云い)、

一 御茶以後之御成、相國様被遊(之)、誠ニ比
類無御座候(与云い)、

一 御寢殿へ御成、斯時式三献参り、やかて御會
所江御成也、

御太刀一振長光 御刀一腰正宗

御小袖百 御拾百 八丈絹二百端

銀子二千枚

中納言拜領之、

御太刀一振吉家 御拾五十 銀子五百枚

又三郎拜領之、

御脇指一腰貞宗 御拾三十 銀子二百枚

又十郎拜領之、

御脇指一腰米國光 御拾十 銀子二百枚

越後守拜領之、

〔進上物〕

御太刀一振包平^(永) 御刀一腰貞宗 御脇指一腰貞宗

御小袖百 御拾百 白糸千斤 狸々皮二十間つき

黄金二百枚 御馬一疋栗毛、鞍置、貞常作、鐙同、

中納言進上之、

御別當誦方部源次郎へ嶋津下野守渡之、

御太刀一振助平 御刀一腰國俊 銀子二百枚

御拾二十 又三郎進上(也)^(之)、

御太刀一腰 銀子百枚 御拾十

又十郎進上之、

御太刀一腰 銀子百枚 御拾十

越後守進上之、

家来之者江拜領物

銀子貳百枚

嶋津下野守

右同

伊勢兵部少輔

銀子百枚

嶋津彈正大弼

右同

嶋津相模守

右同

嶋津豊後守

右同

北郷出雲守

銀子五拾枚

佐多丹波守

右同

澁谷石見守

銀子五拾枚

樺山采女正

右同

北郷佐渡守

右同

穎娃長左衛門尉

右同

種子嶋左近太夫

一家来之者共御礼申上次第之儀、十八日、公

方様江^(之)進上物同前也、

一御會所へ御成何れも相濟候而御能始る、酒井

^(忠行)

安波守御前より舞臺へ御入候而、樂屋之幕之

外より御能初(め)よと被仰候而(より)太夫罷

出ル、御乞能(共二)八番、

御能与

翁七太夫

白鬚金春

実盛長門守

船弁慶長門守

蛭觀世太夫

熊坂七太夫

御乞能自然居士長門守

養老金春

一 御能三番相過候而舞臺へ要脚五萬疋積之、觀世・金春・金剛・保昌・七太夫江者から織縫

薄三ツツ、遣之、猿樂・役者・地唄迄二百人小袖一重ツ、遣之、

一 斯時御簾を下され、相國様御寢殿へ成せられ、七五三の御膳、御易之御膳まで參候也、

琉球樂人衆被召出、公方様御成之時のことく樂被仰付、御座敷之興不斜也、

一 御寢殿へ暫御休息、聽而御會所之御座敷江成せられ、御簾上り御能御覽あり、きり〔相〕

過て還御也、此日、家久注度々御前へ被召出酒沈醉之故、御跡より御禮と候て令登城候

処三、御城二玄閑迄乘輿御免二而、參觀之仕合誠恐悦之至也〔写云、〕、

一 兩日共ニ御寢殿・御會所之飾福阿弥、御数寄屋御鎖之間之筋山元道勺筋之、此外御寢殿・

御會所・御湯殿・御西淨之筋〔等家老〕伊勢兵部少輔致之、

一 御寢殿江筋置、御鎧一領紫金かな・御甲一はね物指金

御堅・御弓一張重藤・御征矢兼金銀、矢、數廿五、御成之物金、以後進上之、

相模守嫡子又四郎久敏母者嶋津中務太輔家久之未女也、耳聾之病有

而容貌愚成やうに相見得、父相模守之氣二不入、二男大和守家臣池田六郎左衛門秋宗之女也、家督させ度為存知由候、

依之家中二葉立候而、又四郎方大和守方と相分り睦敷無之候、其節いか成事哉有けん、相模守鹿

屋より垂水ニ差越、家老町田勘左衛門・川上出羽謀伐・川上内匠三人を於垂水城致手打候、左候而、大

和守江者、祖母新城さま御假粧田三千七百斛を被相讓、其上大和守奥方太守家久御假粧田千斛取

合、高頭四千七百斛を以主御女〔垂水〕二男家ニ別立候、〔領地者〕鹿屋を居城之地といはし〔新城二而〕候、兄又四郎者壹萬五千

斛を取候而垂水を居城之地ニ被致候△扱又相模守者勇猛相勝レ候而△國中之人茂相恐たる事之由候、然

処ニ家久主〔公〕被召上候者、龍伯公守護職御讓之儀、双方を御兼為被成事候、然者守護職之為

相迎事を、萬一相模守無念ニ存候而、別心共八有

間鋪哉与被思召上候處ニ讒者有之、〔弥〕御疑為被遊由候、右之風聞相模守承付候而相驚キ、御納殿〔役人〕東郷肥前守・四本伊豆守・児玉筑後守〔を〕三人を頼、一毫も別心〔之儀〕無之、忠貞を以奉事心底候、御疑被遊候ハ、靈社之神文相調可差上由〔二而〕、御内證より神文差上候へ者、此上者無残所与御返答為有之由候、然処^二相模守感冒之病有之、御典藥松井玄性^{〔珠〕}与申醫師之藥を用候時分、毒藥を〔被盛〕候を用毒味を察シ、則砂金を煎用候而、玄性を招人、對其方向そ意趣遺恨も無之候、誰人之謀計ニ而毒〔藥〕を盛候哉与相尋候へハ、絶而毒〔藥〕を〔進せ不申〕候、今朝者本方ニ加味仕候間、御味可違由〔御〕申候、然共不審〔二〕存候、右藥を煎置候間、為試可被飲挨拶ニ而、玄性無是非被下候而則退出之処ニ、我宿之門之間越ニ顧倒して被相果候、〔依之〕相模守事ハ漸々身弱〔被〕成、終ニ者相果候、此段大和守兄弟別而残情ニ存〔候而〕、御披露申上候者、親相模守為何罪科も無之処ニ、不思儀之毒害ニ逢候、いかさま張本之人可有

之候^{〔四〕} 御穿鑿被仰付被下度御訴申上候処ニ、玄性を科人ニ成、知行三百斛被召揚、〔妻子〕^{〔子共〕}者御内被召放候、然共大和守心底者不相暗、内々遁世之志為有之由候、

相模守へ御一門中^{〔并〕} 御家老〔中〕 其外之人より被遣候^{〔御書中〕} 卷、^{〔内三拾四通〕}

※〔行四〕

〔相模守家老三人被致誅伐候ニ付、中納言家久より町田・川上之儀者有由〕忠堯嫡子町田勘左衛門者相模守手打、川上出羽者桑波精垂水家ニ為被召附置者之子孫之処ニ、無披露何故致誅伐候哉与御科日御田市左衛門、川上内匠者安田源右衛門打取候、依之 太座候、然者私事ニ而申聞之儀も無之ニ付而、始良之含粒寺へ相模守寺願仕候守家久より相模守へ被仰渡候者、町田・川上之儀者先祖而御断被申上候而事為相濟儀ニ候、但相模守手打者町田勘左衛門者人、川上代々由緒有之、被召附置候者之子孫を無披露誅伐之儀不出羽者桑波田市左衛門打之、川上内匠者安田源右衛門打之、屈候、為何訳を以誅伐被致候哉与 御察御座候、然者為差申立も無之ニ依而、始良之含粒寺へ相模守一年之寺領ニ而御断被申上候而、事漸相濟候、此根元者、嫡子又四郎を隠居させ、二男大和守ニ家督仕らせ申企ニ而候処ニ、右三人之役人帰服不仕事之故、誅伐之由候^{〔一〕}

①ハコユニ四〇号文書アリ

寛永十四丁丑年五月十一日於鹿屋卒、歳五

法号昌岳元盛居士 金牌〔並〕玉屋〔安置〕^(建)
屋〕安養寺、

相模守信久△母者 太守義久〔公〕^(主)第二御女、
名称新城、

永祿八乙丑年誕生、

32 (本文書ハ「末川家文書」六号文書ト同文ニツキ省略ス)

33 (本文書ハ「末川家文書」八号文書ト同文ニツキ省略ス)

34 (本文書ハ「末川家文書」九号文書ト同文ニツキ省略ス)

35 (本文書ハ「末川家文書」一、二号文書ト同文ニツキ省略ス)

36 (本文書ハ「末川家文書」一、三号文書ト同文ニツキ省略ス)

37 御のほりにつゐて御いんしんとして、すくしニツ

をくり給候、御こゝろさしまんそく申候、又四郎

殿御たつね之あひた、御めにかゝり候、一たん御

せいじん、なをこれより申へく候、かしく、

(慶長三年)
五月廿日

いした

ちふの少(花押)

しまつ又四郎殿

御ふくろへ

御返事

38

なをくさいせんほんたけんゑもんつかひに
まいり候折ふしも、やくぎの事ハよくく申
やりまいらせ候間、なにさまわれくのほり
の折ふし、ふしミへ御さうまち候へく候、か
しく、

こゝもとくたりニつゐて、御見まひとしてわざと
御つかひにあつかり、ことに見事のまきもの言ッ
たまハリ候、御こゝろさししゆうちやく申まいら
せ候、しかれハつかひにおほせせふくめられ候事と
もうけたまハリとけ申候、ふしミにてもうけた
まハリ候きさミ、このはうくたり候折ふし、又四
郎殿も御くたりにて候まゝ、たかひニとりまされ、
(延引)
ゑんにん申まいらせ候、御ちきやうやくぎの事も
ふせ候とあり、われくもきゝわけ候へく候あひ
た、やかてくのほりの事にて候まゝ、ふしミに
てすまし可申候、かうらいもみなく御きてうの
(武庫) (屏朝)
事候あひた、ぶこへもねんころニ候へく候御こゝ
ろやすかるへく候、かしく、

ちふのせう

(慶長三年)
十一月十八日 三成(花押)

又四郎殿
御ふくろさま

返事

なをく／＼とをくの御見まひかすく、かしこ
まり入のよし、ねんころに返事申まいらせ候、
又又四郎さまより御いんしんもまんそく申さ
れ候、すなハち返事申され候、いつれもこの
人申され候へく候事、又まきもの一ツくたさ
れ候、かたしけなくそんし候、いつれもく
かさねて申へく候、かしく、

ちふのせう御見まひと候て、わさと御つかひさし
つかハされ候、すなハち御ふみ又おほせふくめら
れ候とをり、つふさに申きかせ候へ^(は)、いつれ
も御返事に申され候、まつく御ちきやうの事、
おほせられ候ことくにおほえ申候、そのうちとか
く候て二千石のふんハうちすき申候、か^うらいの
事もすみて、みなく御^(席朝)きてうの事候ま、ふし
ミにてよろつすまし申へく候、そのおりふし、やく

ぎの事もすまし申へく候、よしにて候ま、ふしミ
にそれさまよりの御ふんの御つかひ候ハ、御の
ほしなされ候、よひいたして申あハせ、ふしミに
てすミ候やうにつかまつり候へく候、いさひの事
ハ、この人のこうじやうに申まいらせ候、又この
人ニおほせふくめられ候事もうけたまハリと、
け申へく候、そのとをりも申きかせ候へく候、御
こゝろやすかるへく候、なをこれより申へく候、
かしく、

(慶長三年)
十一月十九日

(墨引) やそしま



又四郎様御ふくろさまの

御つほねさま江

返事

すけさへもん

(新城袋方へ 竜伯主より)
〔竜伯公より新城懐江〕被遣候御自筆之御文四卷

内

壺巻八鹿兒嶋・國分・佐土原・細嶋より三拾

七(通)^(章)

壺巻八京・伏見・大坂より三拾壺^(章)

壺巻八肥前名子屋より式拾式^(章)(通)

壹卷八式拾七(通)

(新城袋江 家久主・光久主并御一門中より被遣候御文壹卷五十三章)
〔壹卷八〕 家久公・光久公より新城懐へ被遣候

自筆之御文并御一門中より之御文五拾三通

(新城袋江御一門中其外人より被遣候御一蓋五章)
〔壹卷八御一門中從其外より新城懐へ被遣候御

文四拾五通

新城(袋)懐童女之(時)節、伏見へ為人質 竜伯(主)公御

同道之節、 竜伯(主)公者 秀吉公より御暇(結り)三而

御帰國之(時分)、離別之不堪愁情和哥一首を詠(候)

而細川幽齋老(藤孝)三被遣候、

二世とは契らんものを親と子の別ぬ袖の涙をもし

れ

幽齋老返哥(一)

馴くて身をハはなたし玉手箱二世と懸ぬ中にハ

有共

此両首を幽齋老前より 秀吉公被備御上覽候處(二)、

不便ニ被思召上候而、人質(を)御免(二)而、御(親)

子御帰國(之)〔為被遊〕由申傳候、新城(袋)假粧田初者

式千七百斛(二)而候へ共、咸陽宮(之)硯 竜伯(主)公

江被致献上候(而)〔廻(二)〕、右御礼として千斛被下候而、

合高三千七百斛ニ罷成候、其節懐方之役人(小)、蘭牟

田伊賀(伊賀代)ニ而候、其後〔石人為代〕桑波田市左衛門

役人△相勤申候、

(新城懐代妙蓮寺・淨瑠寺二ヶ寺)
〔新城ニ妙蓮寺・淨瑠寺二ヶ寺新城懐代〕建立之儀

者、御父母 竜伯(主)公并御簾中さま為御菩提建立

ニ而御座候、懐之母上者種子嶋左近將監時堯之息

女ニ而候故、元來法華宗ニ而候、然者母上者元龜

三壬申歲十二月廿三日、於京都御卒去ニ而、法号

圓信院殿実溪妙蓮大師(師之)与奉申候、依之為(御菩提)一

寺建立之儀、海老原源右衛門、明山(忠)仲兵衛を以

竜伯(主)公へ奉願(御免を以)〔蒙御免候而〕初而鹿屋へ一寺建立

被致候、種子嶋より本来坊(參)罷上り住職勤(二)候へ

共、無程御断被申上候(一)而去候△其跡京本能寺弟子

本住坊相勤之内、懐事も垂水被移候而垂水(寺)

り候、其以後(懐)新城(被罷移候而)新城ニ又引移(申)候而、

佛通山妙蓮寺(二)相改(と山号寺号相定)、寺高四拾石相附候、開山

者京本能寺弟子(二)之間、本能寺之末(寺)子ニ罷成候、

其後 竜伯(主)公慶長十六辛亥正月廿一日御逝去被

遊(候)、御法号貫明存忠庵主与奉申候、是又為御菩提

一寺建立之儀、新城袋より 家久(主)へ奉願、蒙

御免候而、新城二寺建立仕候而、(擇月山貫明寺と山号寺)〔寺号貫明寺〕

相定、号▽竜伯主△御牌勸請仕り、高五拾斛被相付

候、其節ハ垂水節心寺末寺二而候処、其後▽大和守

不幸故△多年致類轉候處ニ、福昌寺特峯和尚弟子俊

良長老新城素生之一筋を以盡功力候而致再興、開

山を特峯和尚ニ定、貫明寺ハ(本寺)之御法名ニ而

恐多故、領主相談之上、新城懷法名之内を取▽候而

△浄珊寺ニ相改、一所之菩提寺ニ(いたし)被成候、依之福

昌寺直末ニ罷成候、

寛永十八辛巳年八月十五日▽於新城△卒、歳

七十七

法号湖月浄珊庵主 一周忌殉死〔土〕留山助

兵衛、元来者朝鮮人也、▽朝鮮国征伐帰陣取

童子来、然自義久主昇、新城懷寵愛而於奥養育

而成人、故感厚恩殉死△

久敏

初忠弘 菊袈裟 又四郎

40

慶長七壬寅年九月三日誕生、

母鳴津中務大輔家久末女 父信久離別而後

嫁球麻士相良内藏之(介)頼安、

▽○猶以當年之為御祝儀、酒代・銀子送被下忝存候、其

上又五郎殿・菊千代殿よりも銘々二音信、別而満足

申候、何様急度罷下、可得御意候、以上△

誠改年之御慶幸甚々、猶更不可有休期候、此等

之為御祝儀、預御状辱存候、將又 又八郎様へ年

頭之御祝言御申可被成ニ付而、進物之儀、於此方

可相調由被仰越候条、御太刀并樽壹荷・折一ツ令

進上候、下野守殿・(前田幸)圖書頭殿へも樽一荷・折一ツ

宛為御音信進入申候、何様満足之由被仰候、此等

之段、為拙子御礼可申入旨候、然者北郷殿(翁)打立之

事、從茄兒鳴被入御精、庄内へ度々稠敷被仰越由

承候、一段辱存候、併北郷殿も二月廿日比二細鳴

出船可被成由を仲右衛門尉於大坂承由申候、左様

二候者、来月中二者此地へ可為下着与存候、左候者

追付打立可申候、為御存知候、猶期後面候、恐惶

謹言、

(元和六年)

三月廿二日

相模守殿

参人、御中

又四郎

忠弘(花押)

(本文書ハ旧記雜録拾遺家わけ士新城島津家文書(東大八四号文書卜同一文書ナルベシ)

又四郎幼童之節、(為人質江戸へ)〔江戸江為人質〕相詰候(其御祖母新城袋へ遺候書中有之)、(内之書)中ニ而候、外ニ菊袈裟と申時、新城懐へ為差下自筆も御座候、

寛永元甲子年十月十三日於(武刃)江戸卒、

歳二十三

法号節心良忠大居士〔此時改天宗寺号節心寺、〕

忠政

又五郎〔早世〕初釜壽丸

慶長十三戌申年誕生、母(者)家臣池田六郎左衛門秋宗女

元和九癸亥年十月九日於鹿屋卒、歳十六

法号幻心聚泡大禪定門

千法師

慶長十五庚戌年誕生、母同(前)、

同廿乙卯年二月廿六日於垂水卒、歳六

法号幻玉童子

久章

菊千代(丸) 大和守

元和元乙卯年四月五日於垂水誕生、母同(前)、

室(者)、太守家久(主)御女、正保二乙酉年五月

十日卒、法号桃岳英仙大姉、歳二十六 玉

牌安置桃仙院、玉屋(者南林寺有寺中)、

大和守居屋敷者 御城下ニ而候△今者肝付殿(為)屋

鋪、

寛永元甲子年九月八日、從(家久主新城袋鹿屋御城へ被召者候也)〔太守家久公相模守

懐新城より鹿府 御城へ被召寄〕、御直ニ 御意△

御座△候者、東之丸御姫千龜殿五歳ニ被為成候養(う)

御子ニ被進度被思召候、此段被仰渡之由候、新城

懐より先以難有奉存候、則御請申上度候へ共、(我等)私

年罷寄、御養育難申由被申候也△(此)、且又後來御姫様へ何之差上可申物も無之

候間、御断ニ奉存候へ共、押而被進度由御意候ニ

付畏(入候)、於其儀ハ 竜伯(主)様より▽高三千斛餘
為△假粧田被下置候、是を(差)上可申由二而御請申
(後年可差上候、依之親子御契約之)

上、則於 御城御祝進上▽被申△候而、其後御家

老衆江も右之趣被仰(出)被下度(由)△、以書物市来

八左衛門ニ而被申上候、嶋津相模守信久二男大和

守久章成人ニ付、新城懐より 家久(公)△へ願被申

上候者、千龜殿御年生も▽御似合△能候条、御縁與

為申上、我等假粧田鹿屋・新城を本領ニ候て、高

頭三千七百斛を讓上、大和守軍役御奉公を(も)為

相勤度由被申上、(達)上聞願之通(被)仰出、寛

永十三丙子年十二月廿四日婚禮(相濟)、大和守一

家立御奉公▽相勤△申(上)候、

寛永十四丁丑年四月九日、中納言家久(公)△大和

守宅へ婚禮(之)為御祝儀 御(光)儀御座候而、御膳

進上仕候、御相伴嶋津下野守殿夫婦・嶋津玄蕃頭

殿夫婦 御城(三)被成御座候、御姫様方ニ而候、

尤御(家)老中・御用人其外御詰衆段、有之候、

家久(公)より大和守へ拜領物、御拾一重(斗)壹ッハ熨

壹ッハ吉・鮑廿三一臺・昆布十把一臺・天井折十

兩(御紋付)

合(青銅) 〔鳥目〕五拾貫文・鈴鉢三・切立三・手燭臺三・

御馬式疋(内一疋糟毛、名元翁、一疋青毛、吉野駒、

大和守與江拜領物、御拾一重(内壹ッハはく、深合一

合・御樽二荷、〔女相中江拜領物〕、〔鳥目〕三拾六

貫文、

家久(公)△へ大和守より進上物、

御太刀一腰・銀馬代十枚、御姫様(乙)名敷(并)女中方

江(御)銘、▽進上物△(御)引手物御座候、

相模守より 〔太守家久公御代〕御用ニ付、銀子兩

度ニ式百貫目無利ニ被借上置候、御家老(中)より

之御借状格護仕置候処、相模守より千龜殿へ、

小身之家ニ被為入、萬事御不如意ニ可有之候(間進

借状ニ通進せ置)之候条、後日御申上被成候而、式百貫目御申受

可被成由二而被讓置候、〔左候而、大和守へ御縁

與之砌〕 太守光久(公)△(主御代)御返濟之願被申上候(処

二)、寛永十六年十二月十九日、高式千三百八拾石

申良小原村へ拜領被仰付、〔別而〕難有奉存、〔尤

御借状(式通)者、市来備後守を以則返上仕候、其

砌大和守事者江戸へ御使ニ罷上り不罷居、宿本よ

り申遣、翌十七年二月九日相達候而、御家老中
〔五〕以書狀御礼申上候、爰元之儀ハ、大和守奥よ
り以樽肴御礼〔之〕一首尾申上、一秋取納仕候處
〔二〕、▽嫡家△嶋津玄蕃頭久重殿より右被下候高之
儀ニ付御申分〔共〕有之、▽双方△依難御分、御物
へ〔先〕御預り高二〔備〕成候、

寛永十七庚辰年、光久〔主〕より公方家光公江
年頭之為御禮使大和守〔二被仰付〕、前年癸卯十一
月〔鹿兒嶋を致發足〕、江戸へ閏十一月廿三日着仕
候、然者登、城之節訊有之、大和守病氣之由二而、
新納右衛門殿為名代登、城御座候而、公方〔棟〕御

禮使之御目見相濟、其後大和守者病〔快氣為仕〕
由二而、嶋津下野守殿同〔心〕二而、阿部豊後守殿・
土井大煩介殿・松平伊豆守殿・三浦志摩守殿・朽

木民部少輔殿・阿部對馬守殿・堀田加賀守殿此御
七人江参上仕、大和守年〔頭〕之御礼使二國本より
年内罷下候処、病氣到来仕、御城勤〔も〕不相叶
別人〔相勤申〕候、頃日〔得〕快氣候ニ付、下野守召
烈御見廻申上候由也、御進物者卷樽壹荷ツ、二赤

貝〔之〕なしもの一桶ツ、也、然者正月廿八日、阿部
豊後守殿より伊勢兵部少輔殿方へ〔被仰遣候者〕、

大和守同道二而登、城可仕旨被仰下、登、城仕候
処、家光公より御取次を以御時服二〔内沓ッハ紋嶋葵
御紋梅鉢、拜領仕〕、御奉書者松平伊豆守殿より

御渡被成候而、御城退出仕候而、御家老中へ御
時服拜領之御礼、且又御暇△申上候而、江戸へ滞在
仕候處、光久主も御參勤被遊、同十八辛△巳四月

十四日、新納右衛門殿御取次二而、江戸御暇被下
候而、同廿日二罷立、〔同〕五月二日二京着いたし、

洛中洛外為見物滞在候處ニ、同十七日、大和守外
方へ近習役井之上伊慶左衛門壹人召烈罷出、行ゑ

不相知〔候〕、依之方々手分を仕、家来共相尋候得
共不相知、同廿日、役人伊地知大藏京木之下御屋

敷御藏奉行伊地知左右衛門へ右之趣遂披露候へ者、
随分相尋、可申候、此方よりも問合せ△可申〔由〕承候、

然処二七月拾日比、高野山蓮金院へ道心を起罷居
候段相聞得、同十三日、役人高野山〔二参〕對面仕

候而、出走之旨趣を相尋候へ者、兼、遁世之志有

之、其上今度於江戸子細有之、公方様へ御目見

不^(致)儀を殘情ニ存、鬪胸之餘り道心を為起由候、

然共蓮金院委細を^{(被)聞届}承届、剃髮法衣者未^{(不被)免}被差免候、

依之役人申候ハ、先此御寺へ滞^(在)留^(在)被成可然由申

置、京都へ帰^(家)り、右之趣左右衛門へ申達候処、右

前方 琴月様御骨高野山ニ御納ニ付、御家老川上

因幡守殿、御用人平田狩野之介御供ニ而高野御佛

事之御作法御取仕廻ニ而、上方ニ被為有合候ニ付、

左右衛門より因幡守殿^(二)へ^(三)被申談候而、狩野之

介・左右衛門兩人を以、大和守へ歴々之御一門と

して光久^(主)公^(主)へ無御披露御遁世之儀、いかさま御

分別も可有之候へ共、他國江之聞得取沙汰もい

か、敷候而笑止千万^(奉)存候間、御下り可然御

教訓候へ共、落着無之候、依之因幡守殿より以飛

脚江戸へ 光久^(主)公^(主)ニ御申上被成候へハ、出家之

志候ハ、國本ニ而も可相濟候間、先可罷下之御差

圖御座候而、高野山相迎也、大坂ニ七月廿四日相

下り、夫より帰國ニ而、寛永十八辛巳九月六日、
直ニ川邊之内山^(玉稱寺)之寺ニ寺領被仰付候、其内井上伊

慶左衛門事、大和守出走之^(時)節言人供仕^(り)、諫

言も不申、同^(敷)欠落仕候科ニ依而 公儀より遠

流被仰付候、其代役安樂休兵衛へ被申付相勤申候、

然者大和守江 光久^(主)公^(主)より遠流之儀、市来備後

守^(大和守後)を以被仰渡候処ニ、大和守御返答申上候

見^(役)ハ、未嶋津^(之)家ニ流罪之例無之候間、此儀者御断ニ

奉存候、切腹被仰付候ハ、可奉畏由申上候、依之

備後守も笑止ニ存、三日致滞^(主)在^(主)諫言申候へ共納得

無之故、無是非石之段 光久^(主)公^(主)為被申上由候、

然者其後 御内意候者、山之寺も深山ニ而住居不

如意ニ可有之候間、門前一之瀬村ニ可罷居ニ付、

一之瀬村ニ移候、其節ハ鹿屋・新城より家来共五

六拾人ツ、替合ニ而相詰申候、又谷山衆中も三四

人ツ、為番人被召附置候、左候而、正保二乙酉年

十二月初ニ、大和守^(より)家来共ニ申渡候者、我

等寺領^(者)いつ可被召直事も不相知候間、皆々罷

帰^(り)荒玉之歳を家ニ而迎可申由ニ而暇を出、相殘

候者財部權之丞・安樂休兵衛^(西)人、小者ニ山下
才七・同才次兄弟其外人足四五人相詰居候、^(一之瀬)
^{(之)者}

三家来減少之時を見合可申出之御内通為有之由候、然者因幡守殿御取次ニ而、光久(主)より大和守方へ、来レ國光之刀被致所持候御所望(被遊)候間、可被差上候、代銀之儀者、後日可被下由奉承知候ニ付、右刀一腰安樂休兵衛宰領仕リ、因幡守殿御宅へ参り、与力衆を以差上、其外大和守用事之儀有之、屋敷へ滞在仕候、休兵衛者右式之故、生害之場ニ相迎申候、然者又御内意候者、一之瀬も人里遠く、萬事不如意ニ可有之候間、山之寺末寺清泉寺ニ罷移、可然由被仰出候故、同十二月拾日、清泉寺ニ(應)移候處(三)、翌十一日ニ光久(主)より大和守遠流可仕由ニ而、清泉寺下ニ関船壹艘相廻り、御上使并乘船差引諸道具改(之)檢者として、御兵具奉行三原傳左衛門、新納仁右衛門被差遣、萬一不慮之儀も為(可)有之、鹿兒嶋より足輕も多人數被遣、谷山衆中也追立ニ走向、清泉寺を取圍候而、先上意之趣番人を以案内申入候処ニ、大和守遠嶋へ渡海之時ニあらざる事を不審ニ為存候、不随貴命、番人を悉く切散シ、寄手之人数江寄也、懸与呼り、清泉寺板縁ニ踊出候処ニ、本結はつと切、毛髮逆ニ立登り、暖

拆て血を瀉キ、其勢宛も如焚噲ニ依而、雖十重廿重(二)圍、其威ニ懼レ、曾而一人も近付人なく候、三原傳左衛門(弓之名人)山ニ登リ、岩上より弓を以被射候処ニ、相對ニ太刀之勝負なき事を恨ミ、庭石ニ腰を掛致切腹候、然者大勢卷懸、鏝數本を以突詰たる由候、尤財部權之丞・山下才七・同才次も戦死仕候、此時新納仁右衛門も為被致戦死由候、

正保二乙酉年十二月十一日、於谷山清泉寺△生害、(歳卅一) 法号松月庭柏庵主 玉牌(並)墓所(安置)清泉寺、

久實(傳)

越後守 (後)次郎兵衛(尉)

寛永二乙丑年五月七日於鹿屋誕生、

母(者)鹿屋住人隈元清右衛門(尉)女

明暦元乙未年、廣瀬家(為)養子(子孫者改称)(後改称)和田、

妻仁礼主計女

延宝七己未年九月廿九日卒、(享)歳五十五

法号仙叟雲英居士

忠盈

初久寬 三四郎 官兵衛尉

寬永四丁卯年十一月二日於鹿屋誕生、

母者、大始良住人中村九郎左衛門尉 清安女

大和守於谷山清泉寺生害之後、鹿屋新城 公領二

(鹿成)被一、依之弟嶋津越後守・同三四郎事渡世難續

ニ付而、光久(主)より正保四丁亥年正月廿四日、

伊東仁右衛門御取次ニ而、越後守・三四郎江老入

ニ付高百斛ツ、合式百斛拜領被仰付候、翌廿五

日、兄弟共ニ御禮ニ登 城仕候、越後守ハ(其後)

廣瀬家之養子被仰付候節、右拜領高百斛被召上

候、三四郎儀者無妻子、死去之後又拜領高百石茂被

召上候、

寬文三癸卯年十月十三日於新城卒、歲卅九

法号、心芳得安居士

久重

初忠紀 久敏養子

万千代丸 越後守 從五位下 玄蕃頭

元和八壬戌年二月十九日誕生、

父太守中納言家久(主) 母嶋津備前守忠清

女(光久公同腹) 室桂山城守久盛女

寬永八年辛未四月朔日、大相国秀忠公令薩广守

家久轉任大隅守、又加冠于又三郎忠元、而任薩广

守、且 家光將軍賜松平薩广守光久、是日任侍從

叙從四位下、其弟又十郎又元服任式部太輔、次弟

越後守任玄蕃頭叙從五位下、於是 大相国賜脇指

包于家久、家光將軍亦賜刀左文

国網于式部太輔、將軍亦昇刀包、大相国昇刀長于

玄蕃頭、將軍亦昇刀元、此時家久父子為謝恩有

進獻、記于左、

〔一御太刀白包 一腰 御拾二十 銀子三百枚〕

公方樣江薩摩守進上之、

一御太刀一腰 御拾二十 銀子三百枚

相國樣江薩摩守進上之、

一御太刀一腰 御拾十 銀子二百枚

公方樣江中納言進上之、

一御太刀一腰 御拾十 銀子二百枚

相國樣江中納言進上之、

一御太刀一腰 御袷十 銀子百枚

公方樣江式部太輔進上之、

一御太刀一腰 御袷十 銀子百枚

相國樣江式部太輔進上之、

一御太刀一腰 御袷十 銀子百枚

公方樣江玄蕃頭進上之、

一御太刀一腰 御袷十 銀子百枚

相國樣江玄蕃頭進上之、

▽ 一御太刀一腰 御袷十 銀子百枚△

一酒井雅樂頭江太刀一腰・袷十・銀子卅枚薩摩守

進之、太刀一腰・銀子十枚式部太輔獻之、〔太刀(右同)

一腰・銀子十枚〕玄蕃頭獻之、

一土井大炊頭江太刀一腰・銀子百枚、薩摩守進之、

太刀一腰・銀子三十枚中納言進之、太刀一腰・

銀子二十枚式部太輔獻之、〔太刀(右同)

一枚〕玄蕃頭獻之、

大炊頭(利隆)

一土井遠江守江太刀一腰・銀子百枚薩摩守進之、

一酒井讚岐守江太刀一腰・袷十・銀子三十枚薩摩

守進之、太刀一腰・銀子十枚式部太輔獻之、〔太刀(右同)

刀一腰・銀(子十枚)〕玄蕃頭獻之、

一酒井阿波守〔江〕太刀一腰・袷十・銀子十枚薩摩

守進之、太刀一腰・銀子十枚式部太輔獻之、〔太刀(右同)

刀一腰・銀子十枚〕玄蕃頭獻之、

一永井信濃守江太刀一腰・銀子二十枚薩摩守進之、

太刀一腰・銀子十枚式部太輔獻之、〔太刀(右同)

銀子十枚〕玄蕃頭獻之、

一稻葉丹波守江太刀一腰・袷十・〔銀子十枚〕薩摩

守進之、太刀一腰・銀子十枚式部太輔獻之、〔太刀(右同)

刀一腰・銀子十枚〕玄蕃頭獻之、

一内藤伊賀守江太刀一腰・袷十・銀子十枚薩摩守

進之、太刀一腰・銀子十枚式部太輔獻之、〔太刀(右同)

一腰・銀子十枚〕玄蕃頭獻之、

一森川出羽守江太刀一腰・袷十・銀子十枚薩摩守

進之、太刀一腰・銀子十枚式部太輔獻之、〔太刀(右同)

一腰・銀子十枚〕玄蕃頭獻之、

〔幸成〕

一青山大藏太輔江太刀一腰・袷十・銀子十枚薩摩

守進之、太刀一腰・銀子十枚式部太輔獻之、〔太刀(右同)

刀一腰・銀子十枚〕玄蕃頭獻之、

〔正保四〕丁亥年八月廿二日於〔武州〕江戸卒、
〔享〕歲廿六

法号陽廣院殿玉峯英閑大居士
〔玉牌安置〕
〔牌建〕垂水心翁寺、

女子

寛永廿癸未年七月五日誕生、

母桂山城守久盛女

鳴津中務久輝室

元禄九丙子年正月廿五日卒、法号桂林院殿

慈芳元昌大姉

久治

初久憲 万千代丸 美作守 玄蕃頭

正保二乙酉年十一月二日誕生、母同前、

室^{〔主〕} 太守光久〔公〕御女 初〔者〕鳴津大膳

久豫室也、

元禄六癸酉年七月廿七日於山笏伏見卒、享

歲四十七

法号聚徳院殿慈鑑照海大居士

〔玉牌安置〕
〔牌建〕垂水心翁寺、

忠直

虎安丸 又四郎 玄蕃頭 久治養子

元禄元戊辰年四月五日武州江戸於芝屋敷

誕生、

父 太守綱貴〔公〕^{〔主〕} 母薩州田布施土江田

五郎左衛門尉妹

室新納市正久珍女

正徳元辛卯年六月廿五日卒、歲廿四

法号性空院殿静海即瀧大居士

玉牌安置垂水心翁寺、

安次郎

初安千代丸 〔早世〕

宝永三丙戌年四月廿四日誕生、

母鹿兒嶋土鎌田權右衛門尉女

宝永五戊子年三月十五日卒、[▽]天亡[△]

法号秀崑幻松童子

女子

釜羈

宝永七庚寅年十二月廿一日誕生、

母同前、

久典室〔智養子〕

元文元丙辰年六月廿三日卒、7歲二十七△

法号蓮池院殿即心成覺大師

貴儔

初久典 小源太 玄蕃頭

忠直〔解〕養子

宝永五戊子年十二月廿三日於御本丸誕生、

父〔者〕太守吉貴〔主〕、母〔者〕名越右膳

妹、

女子

於富

享保十二丁未年三月廿一日誕生、

母忠直女

女子

於銀

享保十七壬子年六月十八日誕生、

母同前、

〔男子〕鍋十郎 早世 母同前、

〔男子〕清五郎 早世 母7家臣△梅元延壽〔坊〕妹

久次

小源太

元文三戊午年十一月朔日〔於磯〕誕生、

母肱岡伊左衛門尉女

父太守吉貴〔主〕 貴儔為〔嫡〕子、

久次

金之丞

元文四己未年二月四日誕生、

母者伊勢兵部家臣山下平左衛門女、

女子

於袈裟

元文四己未年十二月廿四日誕生、

母肱岡氏女

將次

万次郎

寛保元辛酉年正月廿九日誕生、

母同前、

女子

千亀〔夭亡〕

寛永十四丁丑年十一月廿一日於〔鹿兒嶋〕誕

生、

父嶋津大和守久章 母 太守家久〔公〕御女

寛永十八辛巳年十一月廿一日卒、歳五

法号幻夢童女

●忠清

菊千代丸 又介

寛永十六己卯年十一月廿六日誕生、

父母同前、

室 肝付半兵衛尉兼屋女 万治三庚子年霜

月十七日卒、法号龍心妙顔大姉

正保二乙酉年十二月十一日、父大和守不隨 君命

戦亡之段、別而恐多奉存、悴菊千代丸則福昌寺〔三〕

寺領仕候而御佗言申上候へ者、無程被召直候而

後日無不忠神文被仰付〔候而〕、七歳ニ而相調差上

申候、然者 光久〔公〕御側ニ朝夕〔三〕召置成人い

たし、嶋津又介忠清〔公〕与申候、

正保三丙戌年七月晦日、野村大学〔助〕・相良權兵

衛尉御取次ニ而市来備後守・郷田源介〔并〕役人伊

地知大蔵〔被〕召寄、御城ニ而被仰渡候者、大和守

氣假致他国、其時分上方三川上因幡守有合候而

大和守を烈被下候、則科をも可被仰付候得共、有

訳家ニ候故、寺領を被仰付候、乍去不忠之至候間、

一節〔之〕流罪被仰付候処ニ、背 上意、其上数人

を損シ、傍若無人之振舞候、依之菊千代丸へも科

可被仰付候へ共、幼稚候間〔其〕儀ハ御免被成候、

依之大和守領地鹿屋・新城者被召揚候、菊千代〔丸〕

江者母上之御知行千三拾石者被下候間、難有可奉

存候、依之菊千代丸家致衰微、家来も悉分散仕候、

左候而、鹿屋・新城之儀者大山伊豫守〔へ〕則地頭

〔職〕被仰付候、

正保三丙戌年八月朔日、伊東仁右衛門尉御取次ニ

而、市来備後守へ被仰渡候ハ、鹿屋高牧大和守自

分牧ニ候へ共、跡断絶被仰渡候間、公儀江差上候段、御厩へ可申出旨承、其首尾申上候事、

承應二癸巳年五月七日、光久(主)より平田藤右衛門御取次ニ而、大和守跡者不被召立候、依之又

介事者嶋津美作守久憲之弟ニシテ此時又介者十三歳、美作守者十歳、二而

殿者卒(去後也)家相續被仰付候而、又介難有奉存

御礼申上候、

明曆三丁酉年九月十三日、堀四郎左衛門(別)御取次

ニ而、光久(主)より又介江薩州吉田之地頭職被

仰付候(而相勤候)、

萬治三庚子年十一月七日、又介奥病氣ニ付、為御

尋 光久(主御來駕ニ而)公被遊御來駕御膳進上仕候、御相伴肝

付半兵衛奥(方)・新納大藏江被仰付候、

大和守代(者)鹿屋役人(者)池田早右衛門(者)・折田新右衛

門(者)・伊地知主水、新城(者)役人者(者)明山九郎左衛門(者)・

猪八重(内)藏之介・平山勘兵衛、鹿兒嶋屋敷役人

者伊地知大藏(喜人)ニ而、又介代迄大藏者老人ニ

而勤來候処ニ、老躰ニ罷成候故、相役櫓木九郎

左衛門へ被仰付候、(大和守不幸ニ而)一節新城公領ニ而、其

後△被返下候節之新城役人者池田仁左衛門・中津野太郎左衛門相勤申候、

寛文二壬寅年五月十七日卒、歳廿四

法号日見法光庵主 玉牌初建桃仙院、後安置

置(于)新城淨珊寺、墓所南林寺境内

女子 米菊

万治元戊戌年五月十五日誕生、

母肝付半兵衛尉兼屋女 久侶室

天和二壬戌年十一月廿六日卒、(享)歳廿五

法号芳徳院殿梅林貞紅大姉 墓所南林寺境内

内 牌建桃仙院、後安置新城淨珊寺、

女子 米壽

万治二己亥年七月十六日誕生、

父母同前、

嶋津主計久年初室 無子、

天和元辛酉年五月十日卒、(享)歳廿三 法

号覚照院殿慈海妙香大姉 墓所南林寺境内

忠顯

後忠智 好壽丸 權十郎

明曆三丁酉年六月五日誕生、

寛文二壬寅年十二月二日、 光久〔公〕十男

好壽丸命〔子〕又介忠清死後之養子、

寛文五乙巳年正月廿日、 御城馬場末南之方屋敷

光久〔公〕より權十郎へ 拜領仕候〔而〕、同年三月十九

日、 御城より權十郎屋敷ニ移〔而候〕、

同年同月廿五日、權十郎儀又介養子〔繼〕め之御礼

御太刀目録・三種二荷ニ而申上候、

寛文六丙午年十一月廿日、權十郎宅へ 光久〔公〕

被遊御來駕、三日御滞在ニ而御膳進上仕候、肝付半

兵衛奥〔方〕・平山久馬・野津弥五左衛門始終相詰〔二〕

而△候、左候而、役人伊地知大藏・樋木九郎左衛

門へ御目見被仰付候、此時 光久〔公〕より九郎左

衛門へ御筆拜領被仰付候、

寛文七丁未年二月八日、 光久〔公〕桜嶋へ權十郎

被召寄候而、初完仕候、依之 光久〔公〕矢披之祝

二同閏二月十八日、權十郎宅へ 御來駕〔被遊〕御

膳進上仕候而、御太刀献上仕候、 光久〔公〕より

御祝被遊、柳樽壹荷・干鯛一折・昆布一折・猪一

折・大鮓一折拜領仕候、御相伴嶋津市正殿・町田

勘解由〔殿〕・肝付半兵衛〔奥〕・嶋津又六殿懐・權十郎へ

被仰付候、

相模守〔代〕より 家久〔公〕御代ニ銀子兩度〔二〕貳百貫

目被借上置候處ニ、右為御返濟、大和守代寛永十

六年間申良小原村江高式千三百八十石被下〔候而〕△、

一秋取納仕候〔後〕〔殿二〕嫡家嶋津玄蕃頭久重殿より御申

分有之、双方依難御分、式拾九ケ年 公儀御預り

高ニ罷成候処ニ、權十郎代肝付半〔兵衛殿〕奥方肝煎

〔を以〕〔二而〕、嶋津美作殿權十郎方熟談之筋ニ罷成、其

趣 光久〔公〕達上聞、右高之内千石者美作殿、千

三百八十石者權十郎方へ、前、本領新城江右高支

配被仰付候段、寛文七年未三月廿九日、喜入五郎

兵衛〔尉〕御取次ニ而被仰渡、難有奉存候、尤御支配所

より新城高并御支配地山野之内ニ出申候、右高之

内千百九拾七石五斗九升八合式勺九才者新城、百

八拾式石四斗壹合七勺壹才八山野之内山野村ニ出

申候、

引付写

鹿屋之内新城名、嶋津權十郎殿江去々年雖被給候、
海山不被相附之処(二)、今度如先代被相附之由被仰
出候間、鹿屋名可被相除者也、

寛文九年酉四月八日

(諏訪兼利)
李右衛門印

(島津久元)
帯刀 印

(島津忠広)
市正

(島津久通)
圖書

丹生弥兵衛殿 伊東六右衛門殿 鎌田後藤兵衛殿

如右之被仰渡候、本書者御支配所江留置候間、書
写遣申候、以上、

御支配所

寛文九年酉六月三日

丹生弥兵衛印

伊東六右衛門

野村太兵衛印

鎌田後藤兵衛

嶋津權拾郎殿

寛文十一年辛亥年二月九日、光久(公)より權十郎

事又介養子ニ被仰付置候へ共、庄内嶋津外記養子

〔二〕可相成旨、相良吉右衛門(尉)・高崎惣右衛門(尉) 御

使ニ而奉承知候、其節 御意之趣、左ニ相記候、

御書付写、

▽^①仰出[△]

嶋津外記跡め[▽]②嶋津[△]權十郎江被仰付候之間可申

渡之、庄内之儀一節ニ而も難被明置^③所之故如斯^④

候、尤後見之人以御見合被仰付、仕置をも可被相

改之間、内々其心得可被仕候、次〔三〕北郷家之儀、

代々忠節之家ニ候処、至此節血筋可致断絶儀不御

本意之間、後日以御見合血脉被定儀も可有之^⑤〔候〕、

此段も可被承置候、委細之儀ハ御受之後可被仰渡

旨 上意候、以上、

寛文十一年亥二月九日

(本文書ハ「旧記雜録追録」二二六六号文書ト同一文書ナルベシ)

同年二月十一日、權十郎庄内養子之御請申上候而、

同三月朔日(二)權十郎鹿兒嶋[▽]屋敷[△]罷立、庄内都
之城ニ移候、

久侶

虎介 權八 權兵衛 壹岐守

明暦元乙未年六月廿三日於御本丸誕生、

[▽]寛文十一辛亥年、從 綱貴公實名久侶之名乘拜領仕
候、 綱貴公 御名判之書付有[△]

太守光久(公)八男

母鹿兒嶋土津留筑右衛門^嗣正時女

(光久主) 〔寛陽院殿〕御逝去之後、為尼(而)称慈廣院、

宝永六己丑年九月六日卒、歳八十二

(法号慈廣院殿法雲心日大師) 墓所南林寺境内 玉牌建桃仙院、後安置(于)^(新城)

淨瑠寺、

寛文十一辛亥年二月十二日、權八江 光久(公)よ

り權十郎事庄内(之)跡目(ニ)被仰付候間、為其代權

八事又介賀養子ニ被仰付候而御受申上候、同三月

廿一日、御城より移り申候、

同年四月朔日、權八儀又介養子(繼)目之御礼御太

刀目録・三種式荷ニ而申上候、御取次次大山權左衛

門、同日ニ鹿屋地頭職喜入次兵衛(御取次ニ而)

被仰付候、

同五月廿一日、光久(公)權八養子成ニ付而、為

御祝儀(被遊) 御來駕、御膳進上仕候、御相伴嶋

津市正殿・新納又左衛門殿・肝付彈正殿・鎌田又

七郎殿奥江被仰付候、御太刀(目録献上)仕候、

光久(公)より權八江拜領物、御太刀目録・柳樽一

荷・干鯛壹折・昆布一折、權八奥并妹へ青銅貳百

疋ツ、乙名敷三人江青銅三百疋ツ、女共相

中へ青銅五百疋、上置菱刈孫兵衛へ青銅貳百疋、

中押野元種右衛門へ青銅百疋、役人伊地知治部右

衛門・檜木九郎左衛門へ青銅百疋ツ、拜領(仕)候、

右之衆并役人迄御目見被仰付(御通り被下)候、

延宝二甲寅年十一月十七日、光久(公)より紋所

丸之内二十二輪十文字、西之御丸於御奥、官女お

〔ちか〕御取次ニ而被下候而、御礼以樽着申上候、

貞享二乙丑年二月十日、光久(公)江戶御參勤之

節、御番頭役(ニ)御先立ニ罷上り候、與力者有

馬市右衛門・中野伊右衛門兩人ニ而候、役人者權

木弥右衛門ニ而候、

同三年丙寅正月二日、於江戸 御城江 光久(主)御代として壹岐守御太刀献上仕候、支度ハ(帆掛)烏帽子ニ素袍ニ而、御城勤相仕廻申候、左候而、同四月廿五日、江戸御番頭役首尾能相(勤)仕廻候而罷立、西目筋罷通(り)鹿兒嶋へ(致下趣)下着仕候、元禄三庚午年九月三日、綱貴(主)御着城之為御礼使罷上り候、与力者有馬市右衛門ニ而候、左候而、(江戸へ)着仕、十月十二日ニ留守居△伊勢十兵衛同心ニ而御老中廻り仕候、大久保加賀守殿・阿部豊後守殿・戸田山城守殿・土屋相模守殿・牧野備後守殿・柳沢出羽守殿・秋元但馬守殿・内藤丹波守殿、右御口上者薩摩守申候、公方様益御機嫌能被為成御座之由恐悦ニ奉存候、御自分様江も御堅固(二)御勤被成之由、珍重ニ存候、私儀先比國許江之御暇被成下候而△、九月三日國元へ着仕、難有次第(二)奉存候、依之為御礼使者差上候ニ付而、目錄之通献上仕度奉存候、宜様ニ御差圖奉頼候、委細者書中ニ申上候、書中之品迄目錄之通致進覽候、錫一箱少、被進候、然者同十一月朔日

登城仕り、

公方綱吉江御献上物(差上)、

一 白綸子甘本 一 干鯛一箱 一 鯛一箱

一 御樽一荷紫綱卷 御目錄

壹岐守御礼使之御目見仕り、次ニ自分献上物差上、
自分之御目見仕候、献上物左ニ相記候、

奉進(上)

御太刀 一腰

御小袖 三

御馬 一匹

以上

松平薩摩守家来

嶋津壹岐 久侶

表書之通、御納戸江相納候、以上、

元禄三年 十一月朔日 土井周防守内 角田十左衛門印

〔本文書ハ「旧記雜錄拾遺家わけ」新城島津家文書東大九二号文書ト同一文書ナルベシ〕

右之節、御進物番西尾七兵衛殿ニ而〔御座〕候、壹岐守支度者熨斗目長上下ニ而御目見仕候、此支度ハ先例無之儀ニ候へ共、〔留守居〕伊勢十兵衛申候者、萬一使者支度之儀_{御尋}△候ハ、私より壹岐_守事ハ大隅守子ニ而、餘之家臣与者違候間、長上下致着候由答可申候、松平陸奥守〔_様〕御着城之御礼使長上下ニ而候間、苦ル間敷由申候ニ付着仕御目見仕候へ共、誰ぞ御咎被成御方も無之候、壹岐守長上下着初之以後者、御禮使之面、皆以先例ニ罷成候、

同十一月二日、御奉書出申時、壹岐守登 城仕〔候而御奉書〕受取申候、其節御羽織一・御綿入二・御袷一拜領仕〔候〕、左候而、元禄四辛未年正月廿五日江戸罷立、小倉筋罷通〔り〕下着仕候、

〔_同元禄四辛未年〕十二月十三日、光久〔_主公〕より壹岐守へ御本尊三幅、志和屋左京御使ニ而拜領仕候、壹幅ハ不動明王、壹幅者三宝荒神、壹幅者青面金剛、繪師ハ米村祐以筆ニ而地絹極彩色ニ而〔御座〕候、

元禄六癸酉年二月廿一日、綱貴〔_主公〕肝付御通道_△ニ而江戸御參勤_△之節、新城へ御一宿被遊_△候而△膳進上仕候、御太刀目録〔_進〕献上仕候、其節御供之御家老者根占八郎右衛門殿、御用人ハ野村多左衛門_{〔_庄〕}ニ而候、〔_然〕次者家来之者新城役人并由緒之者共御目見被仰付、自分献上物差上御通〔り〕被下候、御取次者野村多左衛門〔_二〕而候、御目見之人數者、役人榎木弥右衛門・中津野主税・吉長次郎右衛門・中村采女、其外ハ桑波田堅物_{〔_監〕}・伊地知治部右衛門・恒見七右衛門七人ニ而〔御座〕候、

〔_同元禄六癸酉〕年六月廿九日、光久〔_主公〕御着城之為御礼使_△壹岐守_△罷上候而、伊勢十兵衛案内ニ而御老中廻りいたし候、大久保加賀守殿・阿部豊後守殿・戸田山城守殿・土屋相模守殿・牧野備後守殿・柳沢出羽守殿・秋元但馬守殿・内藤丹波守殿・加藤佐渡守殿_{〔_{明委}〕}・松平左京亮殿ニ而候、八月十一日登 城仕り、

公方綱吉公江御献上物差上、御礼使之御目見_△仕り_△并自分献上物差上御目見〔_得〕仕候、其節_{〔_之〕}献上物

左三相記候、

奉進上

御太刀 一腰

御帷子単物 三

御馬 一匹

以上

(大隅守)
松平薩摩守家頼

島津壹岐
久侶

表書之御太刀・馬代・御帷子三請取之、御納戸江
相納[㊦]申候、以上、

(元禄六年)

西[㊦]

八月十一日

當番

久世出雲守内

瀧戸藏印

(本文書ハ旧記雜録拾遺家わけ十新城島津家文書(東大九三号文書卜同一
文書ナルベシ)

同八月十四日、御奉書出申候、阿部豊後守殿より
御渡被成候而、御時服四拜領仕候、左候而、江戸
罷立、同十二月十二日(二)致下着候、与力八川畑

諸左衛門三而候、

元禄八乙亥年(三月二日)、寛陽院様御遺物之御

(龜)形見として御鉄炮一挺 綱貴^(主)公より伊瀬知休

右衛門^(を)上使三而拜領仕候、(寛陽院様)光久公御存生之内

者、壹岐守^(江若年頭歳尊)八歳暮年頭三者御祝物(二種ツ)年々

(以上使)御上使を以て拜領仕候、

壹岐守御當國三而、勤方者與頭・番頭其外御馬追・

御関狩之御代、靈社靈佛所々御寺之御代參相勤申

候、壹岐守代役人者榎木九郎左衛門・伊地知治部

右衛門・中津野主税・榎木弥右衛門、新城役人者

吉長次郎右衛門・中村采女・吉長十郎右衛門、

元禄十丁丑年九月廿八日卒、(享)歳四十三

法号大勝院殿悟山悦心大居士 墓所南林寺

境内 玉牌^(初)建桃仙院、後安置新城浄珊瑚寺、

女子 仙千代

天和二壬戌年四月十八日誕生、

母又介忠清女

權七久茂室 壹岐守久侶聳養子

女子

元禄十一戊寅年四月廿六日卒、〔享〕歳十七

法号宝龍院殿光岩玄珠大姉 墓所南林寺境内

内 玉牌〔初〕建桃仙院、後安置新城浄瑠寺、

袈裟 夭亡

元禄七甲戌年二月廿日誕生、

母高岡衆中坂元宇左衛門〔男〕女

同八乙亥年五月二日卒、法号蓮昌露香童女

〔久齋〕
〔ルビ〕キウゴウシ

初久茂 久倫 久雄 久邦 ▽ヒサユキ
久齋△

源七 權七 備中 監物 市太夫

延宝八庚申年九月二日卯時於御本丸誕生、

光久〔主〕〔公〕廿男 母〔者〕 光久〔主〕〔公〕官女、平

佐衆中西牟田休之丞妹、

〔光久主〕〔寛陽院殿〕御逝去之後為尼〔而〕称妙高院、

元文〔マア〕二丙辰年七月十一日卒、歳七十七 墓

所南林寺境内 ▽玉牌建桃仙院△

久侶依無〔世〕〔實〕子〔而〕弟久茂為養子、

初室久侶女 後室樺山相馬忠郷女

享保十六辛亥年八月十三日卒、歳卅九

法号高嚴院殿芳至妙桂大姉 〔墓所南林寺境内〕
玉牌安置桃仙院、

元禄三庚午年五月八日、光久〔主〕〔公〕より以黒葛原

治部、弟權七を壹岐守可致養子之由被仰渡、壹岐

守〔より〕御見合難有奉存、以樽肴御禮申上候、

元禄八乙亥年二月九日、權七從御下屋鋪壹岐守宅

ニ移候、壹岐守より權七親分平山次右衛門ニ申付、

数年相動候、

同年三月二日、〔光久主〕〔寛陽院様〕御遺物之御〔形見〕と

して鉄炮一挺 綱責〔主〕〔公〕より伊瀬知休右衛門を以

拜領仕候、

元禄十丁丑年八月四日、吉貴〔主〕〔公〕御着 城之御

禮使〔に〕罷上り、同九月〔十〕五日、登 城〔仕り〕

公方綱吉公〔江〕御献上物差上、御礼使之御目見仕并

自分献上物差上▽候而△、自分御目見仕候、献上物

左ニ相記候、

45

奉進上

御太刀 一腰

御小袖 三

御馬 一匹

以上

松平薩摩守家頼

島津權七

久茂

表書之通請取^(之)、御納戸江相渡申候、以上、

(元禄十年)

丑

九月十五日

黒田甲斐守内

小幡藤市印

(本文書ハ旧記雜録拾遺家わけナ新城島津家文書(東大九四号文書卜同一文書ナルベシ)

同九月十八日、御奉書一通戸田山城守殿^(より)御取次ニ

而^(頂)御渡被成候、左候而、御羽織一・御小袖三^(頂)拜

領^(近陣)仕候、御奏者松平對馬守殿ニ而候、同十一月十

二日江戸罷立、^(鹿府へ致下着)〔西め筋罷通下着仕〕候、与力者吉

井七左衛門・北原三左衛門兩人ニ而候、^(主)役人中津

野主税供仕候^(頂)

元禄十一戊寅年正月廿五日、綱貴^(主)〔公〕より^(主)去

九月^(頂)△壹岐守卒去ニ付、御香奠白銀五枚若松次右衛

門上使ニ而^(頂)〔拜領〕仕候、

元禄十二己卯年二月廿八日、綱貴^(主)〔公〕江權七續

目之御礼御太刀目錄・三種二荷ニ而申上候、

同年三月廿七日、御家老種子嶋藏人殿より^(久時)猿渡喜

右衛門御取次ニ而、隅笏鹿屋地頭職被仰付候、

同年十二月廿九日、綱貴^(主)〔公〕より權七江與頭番

頭役^(御取次)猿渡喜右衛門^(御取次ニ而)を以^(主)被仰付候、

元禄十六癸未年十一月三日、綱貴^(主)〔公〕御在國二

付^(而)、年頭之御禮使被仰付罷上り候、與力ハ吉井

圓右衛門、役人ハ檜木弥右衛門ニ而候、同十七年

申正月二日、登城仕^(り)年頭之御祝儀申上候、

支度者^(帆懸)烏帽子・素袍・熨斗目ニ而、御通例

之御太刀^(目錄)進上仕候、^(御取次松平對馬守殿ニ而候 案内吉留守)〔案内ハ留守居伊佐岡伊右衛

門、御取次者松平對馬守殿〕ニ而候、

元禄十七甲申年正月二日、甲府大納言家宣公并

御簾中様江も年頭之御礼使ニ參上仕^(候、尤)御献

上物^(差上)〔御座〕候、然処ニ御簾中様より金田伴右衛

門殿御使ニ而御時服ニ拜領仕候、^(而)御礼ニ翌日參上

〔仕〕候、

同〔年〕正月晦日、吉貴^(主江高輪)〔公〕高輪御屋敷嶋津助之

〔允〕殿〔長屋〕二而、〔以 御意〕御膳進上仕候、〔左候而〕御、〔保昌太夫被石寄候〕、〔御相伴嶋津助之允殿二而候〕、右御膳進上之儀ハ、此節備中勤方〔萬事宜二依而〕〔首尾好二付〕被仰付之由候、

宝永元年、 甲府大納言家宣公〔江〕當正月年頭之御礼使相勤候二付〔而〕、御時服二近藤長右衛門殿御使者二而拜領被仰付候、右時節者備中〔儀〕ハ罷下り居候二付、芝御屋敷〔三〕御上使御入来〔二〕之由二而、國本二而五月廿八日〔被為預置候、然二五月廿八日於鹿府〕猿渡喜右衛門御取次二而御口上之趣奉承知、右御時服二〔も〕頂戴仕候、依之御礼之儀近藤長右衛門殿迄以書中則 ∇ 御礼 Δ 申上候、

〔同〕〔宝永元年甲申年〕九月十九日、綱貴〔主〕〔公〕於江戸〔被遊〕御逝去、御遺体様御〔備中二付而〕〔下向二付〕備中小倉迄御迎ニ參上可仕由被仰渡、同十八日鹿兒嶋罷立、同廿七日小倉〔二〕着仕、十一月四日〔三〕内裏〔江〕參候処〔二〕御遺体様御着船二而、内裏を同七日〔御立二被遊〕御立、同廿日〔二〕之夜入候而、福昌寺〔江被遊御入〕候、尤〔備中御供仕〕〔福昌寺迄御供仕申〕候与力者海老原筑兵衛、

46

役人者吉長拾郎右衛門、

宝永四丁亥〔年〕九月朔日、吉貴〔主〕〔公〕御着 城之御禮使ニ ∇ 備中 Δ 罷上り候、与力ハ名越與右衛門、役

人者中村平右衛門二而候、〔此時海上順風無之、安藝之山陽道を通過候而東海道ニ懸候処ニ、十月四日、箱根之峠ニ而大地震ニ達候、跡立之人數者遠州新居ニ而〕地震津波ニ達、其節平山

助市相果申候、且又嶋津中務〔大边〕同十月十日登 城仕候而、

殿足藍 \square 石塚勘七も相果申候 Δ

公方綱吉公江御献上物差上、御礼使之御礼申上〔候〕、

次〔二〕自分献上物〔差上〕、自分御目見仕候、案内者

留守居森川利右衛門二而候、〔献上物左ニ相記、〕

〔奉〕進上

御太刀 一腰

御小袖 三

御馬 一匹

∇ 御以上 Δ

松平薩摩守家来

嶋津備中

久茂

表書之御馬代銀、御納戸衆江相渡申候、以上、

〔宝永四年〕 當番 本多弾正少弼内

亥

十月十五日

片山十郎兵衛

〔黒印アリ〕

〔本文書ハ旧記雜録拾遺家わけ十新城島津家文書〔東大九五号文書ト同一文書ナルベシ〕

西之御丸 大納言家宣公江御献上物差上〔候〕并自分

献上物目錄之〔通達上仕〕〔写左三相記〕候、

進上

御太刀

一腰

御馬

一匹

以上

松平薩摩守家来

嶋津備中

久茂

表書之御太刀・馬代〔御〕銀子△壹枚、御納戸江相納申〔御之〕

候、以上、

〔宝永四年〕

亥十月十五日

安藤長門守内

岩下忠太夫

〔黒印アリ〕

〔本文書ハ旧記雜録拾遺家わけ十新城島津家文書〔東大九六号文書ト同一文書ナルベシ〕

同十月十五日御奉書出申候、御時服四大久保加賀

守殿御取次ニ而頂戴仕候、案内者〔留主居〕森川利右衛門〔尉〕ニ而候、同十一月十一日江戸罷立候而、小倉筋罷通り鹿府江致下着候、

宝永六己丑年六月廿日、備中以口上書申上候者、私持高〔當分〕貳千九百六拾七石餘有之候、然処ニ内之浦ニ仕明地七拾九石餘有之候、且又借銀為返濟、宮越孫兵衛持高之内拾七石餘受取、合高頭三千三拾石餘罷成候間、三千石以上成之御免被仰付被下度之旨奉願由、御家老種子嶋藏人殿へ書物差出候處ニ、翌廿一日蒲〔生〕十郎兵衛御取次ニ而、願之通蒙御免許候、

宝永七庚寅年閏八月十三日、

〔中御門天皇〕當今様御即位・御元服ニ付、御祝儀之正使備中守〔ハ合願之〕

久雄ニ被仰付候、副使者山沢十太夫盛秀〔三〕被仰付候而〔上洛仕〕〔罷上〕候、〔備中守〕與力者龜山五郎右衛門・

木場次郎左衛門〔相勤申候〕、役人者桑波田八郎右

衛門ニ而候、〔左候而、〕十一月 御即位之筈候処

ニ、正月ニ延候故、大坂へ滞留いたし候、

宝永八辛卯年二月十五日、

御即位・御元服之為御祝儀、備中守 禁裏へ参内仕候、吉貴(主)公御献上物御太刀一腰・御馬代銀

三拾枚、御目錄を以長橋之御玄喚ニ而献上仕候、

備中支度者風折烏帽子・布衣・指貫ニ而候、

仙洞様江御太刀一腰・御馬代銀廿枚、女院様・(新)女院様(八台頭)大准后様方江白銀拾枚ツ、御豎目錄ニ而

献上仕候、長橋御局江者紗綾五卷御進物、此御使

者八京留守居和田次兵衛相勤申候、

當今様御傳奏高野前大納言様・庭田前大納言様、

仙洞様御傳奏梅小路中納言様・藤谷前中納言様、

其外御上使榊原式部太輔殿、御副使織田能登守殿、

京御所司松平紀伊守殿、御町奉行安藤駿河守殿・

中根摂津守殿、禁裏御守役山口安房守殿・久留伊

勢守殿、仙洞御守役荒木志摩守殿(正羽)・山田伊豆

守殿江初中後之御付届御座候、尤右之御方(主)江吉

貴(公)より御進物(御座候)、備中よりも自分進

物(仕)候、同二月十八日、

禁裏様御勅答、高野前大納言様御亭ニ而庭田前大

納言様御烈座ニ而被仰渡候、并女院様方より之

御返答も同被仰渡候、

仙洞様御勅答、藤谷前(中)中納言様御亭ニ而梅小路

中納言様御烈座ニ而被仰渡候、女院様方より之

御返答も同被仰渡候、

同日、近衛相國様・左大将様江御即位之御祝儀

吉貴(主)公より御目錄を以御献上物御座候、備中(守)

よりも御着一折・御手樽壹荷ツ、献上仕候、左候

而、御目見被仰付直ニ御料理被下候、相伴進藤刑

部太輔殿ニ而候、山沢十太夫も同前ニ而候、左

大将様御方者御目見被仰付、御吸物ニ而御酒被下

候、相伴今大路治部太夫殿ニ而候、

同月廿一日、相國様・左大将様より越前綿五把

ツ、御使者藤井甚兵衛を以(頂戴仕)拜領被仰付候而、御

礼ニ参上仕候、

吉貴(主)公御在江戸之故、備中(守)江御即位并御

元服之御祝儀之使者首尾好相勤候段、御家老嶋津

帯刀殿迄以書中首尾申上候、

同四月四日(二)、(西)西め筋罷下鹿兒嶋へ下着いたし

候、

宝永三丙戌年正月廿一日、吉貴(主)公(公)より鹿屋地頭職日州野尻地頭職(替)二御線(替)被仰付候、右之段肝付主殿殿より直(申)承候、

正徳元辛卯年十一月廿二日、吉貴(主)公(公)より市太

夫二男家より者代、細瀧名字を名乗可申由、肝付

主殿殿より御書付(直)二御渡(而)、名字拜領仕候、

(同)正徳二壬辰年二月十七日、吉貴(主)公(公)佐多表へ

被遊 御越候節、新城之城屋敷(御入與)二被遊御入候(而)

御膳進上仕候、其節御太刀一腰・銀馬代目録(而)二

進上仕候、御披露種子嶋十左衛門(而)候、然者市

太夫儀者新城へ不及罷越之由前以被仰渡(候)、依

之用頼岩(本)六右衛門罷越候而御用等承候、同三

月七日、佐多より御帰館之節も御立寄被遊、御

膳被召上、夜入候而御立(而)、垂水之(様)二御通

路(而)御座候、

正徳二壬辰年四月十一日、江戸御留守居御番頭役

二而鹿(府)罷立候、與力者は枝連右衛門、役人

(者)桑波田八郎右衛門(而)候、左候而、同五月廿一日、江戸へ着仕候而、芝御屋敷へ相(勅申)話候、

同八月(三)日、於江戸市太夫旅宿へ又三郎様被

遊御入御馳走申上候、御供(衆)後醍院喜兵衛・福

山平太夫・肥後嘉右衛門・伊地知仲阿弥其外御小

姓衆(而)候、

同八月十日、陽和院様より三十六歌仙巻冊、智

性院様より源氏一部、御両所様御遺物之為御(形)

見、三雲新兵衛御取次(而)拜領仕候、

同九月十六日、又三郎様市太夫旅宿へ又被遊御

入(候而)御(取持)馳走申上候、御供衆右之面(而)二而御

座候、

同十月二日、吉貴(主)公(公)より市太夫儀、前(而)より

新城壱所領來候、然者今度一所持并一所持格御改

被成候二付、市太夫事壱所持二被仰付候、御取次(者)

黒葛原源左衛門(而)候、

同十一月十五日、於増上寺 公方文照院様御吊(而)

付(而)、吉貴(主)公(公)より御香奠御献上之御使者(市

太夫江被仰付)相勤(申候而)、御香奠致献上候(候)、

薩摩守殿名代(候)二候間罷出候而、御玉牌(を)奉拜、(御

燒香可仕由、御大老并伊兵部殿より被仰渡候(而)

其通ニ相勤候、客殿者御詰衆大人數ニ而御座候、
案内者留守居阿多六郎右衛門ニ而有之候、

同十二月廿六日、公方様御名武藏守様与御(称)

号、御官位、大納言ニ御昇進之御祝儀、吉貴(主)

より御太刀目錄御献上之御使者ニ市太夫登、城仕

候、(案内者)同心者留守居森川利右衛門ニ而候、

正徳三癸巳年正月五日、武藏守様御袴召初之(御

祝儀、吉貴公より之(案内者)為御祝儀市太夫登、城仕候、

(同心)伊佐岡為右衛門ニ而候、

同三月廿七日、武藏守様御元服被遊、家継公与

御称号之御祝儀、吉貴(主)より御太刀目錄御獻

(上之)為御使者市太夫登、城仕候、同心阿多六郎右

衛門ニ而候、

同四月十六日、公方文照院様御臺様御隠居被遊、

一位ニ御昇進被成候ニ付、吉貴(主)より(御祝儀

之(候而、御進上物を獻)為御使者(市太夫)登、城仕り(御献上物差上)候、

▽案内伊佐岡傳右衛門ニ而候△

同四月廿一日、近衛前摂政様將軍宣下之為御勅

使、去三月廿四日(江戸へ)被遊御下向(候)ニ付、吉

貴(主)公者御在國ニ而候へ共、國元より御機嫌伺之儀為申越由ニ而、御献上物之御使者市太夫相勤候

(而)御目見仕候、案内森川利右衛門ニ而候、

同五月朔日、近衛(前摂政)様江戸御参駕ニ付而、

又三郎様より(之)御使者市太夫相勤(申)候、案内

森川利右衛門(ニ而候)、

同日、吉貴(主)公より今度御家(之)御格式御改ニ付、

市太夫江如本家之字久を弟子丸與次右衛門御取次

ニ而拜領仕候、

同日、吉貴(主)公より嫡家嶋津小源(貞徳)大殿御方へ被

仰渡候者、市太夫家(以来)ニ男家よりハ(以来代々)將

之(候而)字名乗(之)之父字ニ用△可申候、當分▽ハ如存△小源

大殿幼(種)之故、嶋津周防(貞徳守)殿より以書付被仰渡

之由候、其節市太夫儀者在江戸(之)而候故、用頼

岩(元)六右衛門罷出候而承申候、

同九月九日、市太夫儀者江戸御番頭(俊)ニ而罷上り、

未罷下内に、種子嶋(久基)彈正殿より市太夫同格之人御

用候間、名代可差出旨承候而、入来院主馬殿(重矩)頼上

被為出候処(ニ)、市太夫御、城馬場筋當屋敷御用候

間可被差上候、返地(二)者下天神馬場筋土(屋)屋敷八ヶ所被下之由被 仰渡候、

(同)〔正徳三癸巳年〕九月廿九日、江戸御番頭役首尾(能)相仕(通候而)、西目筋罷通り鹿(府)〔兎嶋〕へ致下着候、

同四甲午年二月三日、下天神馬場筋拜領屋敷普請致成就罷移候、

享保貳年酉八月廿八日、蒲生地頭職嶋津(久当)将監殿御取次(付)而被仰(渡)候、

同九甲辰年四月、屋敷下南廣小路屋敷内(二)圍申度訴之事、

口上覚

私居屋敷、南側廣小路竪四拾五間程横拾間程草取掃除等被仰付置候(二)付、入念不荒様(二)相調申候、右廣(小)路之儀者中一通り踏明候迄(二)而、草生候(二)付見掛悪敷、其(通二)而(者)難召置候、殊(二)地下行下りめ(二)候へハ、大雨之節水深(二)相成、每度修補相加、別而物入(三)而候(二)間、御預地(二)被仰付被下候ハ、一圍(二)仕り、相應(二)外廻り相調召置可

申候、尤御用之節者何時(二)而も差上可申候、右圍之内(二)家作等相調不申、明地(二)而召置可申候間、此等之趣宜御披露奉頼候、以上、

(享保九年)
辰

四月廿一日

嶋津市太夫

右之書物、用頼永田次右衛門を以御月番御用人左近允(商左)與太夫(近)差出(之)請取(之)候、然(者)五月十日以御書付被仰渡趣、左(二)相記(候)、

覚

嶋津市太夫殿

右屋敷、南(之)方廣小路草生見分も悪敷、其上右降候節者水溜り、每度修補相加候(二)付、物入も御座候間、御預地(二)被仰付被下度候、左候ハ、屋敷一圍外廻り相調、家作等不仕、右地面之分者明置、御用之節者可差上旨段、被申出趣有之、願之通被仰付候、右場所之儀ハ為火除明地(二)被仰付候間、屋敷圍之儀者願之通、家作等之儀者不相調、御用之節ハ可被差上候、右之通申渡候、勘定奉行

其外首尾相掛ル座、江不洩様ニ可申渡候、以上、

(享保元年)
五月

(島津久春)
大蔵

右之通、左近允與太夫御取次ニ而被仰渡候、右ニ付而者(市太夫)罷出、直ニ承答候処(二)、折節不快ニ有之、町田郷九郎頼存候而御用承候、尤右之御礼之儀、同人ニ而申上候、(御目附左近允會右衛門詰合之由候、)

享保六年辛丑年、御領國中札御改御座候ニ付、札御奉行役市太夫江被仰付候、同役者入来院主馬・平田新左衛門ニ而候、二月九日より札御改座御春屋御書院ニ相立^レ候而^レ罷出候、左候而、丑ノ年より卯ノ三月迄三ヶ年ニ相濟候、其内御座も嶋津圖書宅ニも相直り、仕(舞)^(通)口ニ者市太夫宅へ御座相直候、永々之勤方、萬事首尾能相濟候、

同九甲辰年、鹿屋上名村嶋津玄蕃^(頭)殿御持切名ニ為被仰渡由候、然者上名村之内、此方高并持留^(仕)明地も有之、家来等も多人数罷居候ニ付、以口上書御訴申上候趣、左ニ相記候事、

50

口上覺

私家来四拾九家内鹿屋へ致中宿罷居、作職之餘勢を以渡世仕り来候、然處ニ鹿屋上名村之内、野津安右衛門へ御免之持留仕明地相拂候ニ付、延宝七年未三月、私方江致買地、太粧成并手溝自分物入を以漸々相調、近年地方丈夫ニ罷成候ニ付而、御竿入高式百三拾石餘出来仕候、右之内高六拾石餘、且又右高之外上名村へ私持高八拾五石餘^(有)之、都合高百五拾石程右家来共江給地ニ出置、小身之^(者)共致自作、兎哉角作職之御陰を以渡世仕候、然處ニ頃日家来人数多罷成、右高迄ニ而者作職地^(三)祐分不仕(候)付、先比上名村之内大山野拾五町餘新仕明持留高願申上御免之上、自分失墜を以家来共為渡世相開キ申候、其段者此内別紙を以御竿入之願申上候、然處ニ上名村之儀、嶋津玄蕃殿より依願持切名ニ被仰付、山野迄被召附候由致承知候、依之申上候、右家来共事者、私先祖嶋津大和代(二)鹿屋壱所領之節より罷居候處、其後鹿屋外城ニ被仰付候砌、右之者共別而小身故、罷移候儀難叶、

直ニ致中宿、今以数拾年在附罷(在)候、然者上名村此節御繰易ニ付而者、返高最寄違ニ被下候へハ、家来共作職地ニ相離、其上移先無御座必至与行迫り迷惑仕、無遣方仕合ニ罷成候、當時者ニ男三男迄男女都合式百式拾人餘ニ罷成候、然者右人数壹所ニ移り先無御座、猶以差迫り申筈御座候、尤方々散々(仁)罷移候而者新城より遠方ニ而、私方も差支申候、右次第御座候間、餘人之持高ニ者相替申候条、近方ニ返高奉願、漸々家来共罷移候様ニ茂願申上度奉存候へ共、近方ハ私領、或者持切名ニ而、左様成(も)願難申上、旁以差支申候、此内鹿屋衆中終原江致中宿罷居候、跡屋敷内々致借地罷居候へ共、終原も此節(者)玄蕃殿方へ御繰易地被仰付、中宿衆中も鹿屋之様ニ引移申筈ニ而、借地相返候様ニ申来、猶又差迫り候由、家来共段々訴申出候、右之訊御座候へ故何共難仕候条、上名村私持留高并現持高都合三百拾石餘、且又先比御免之大山野新仕明地、此節御竿被召入候出来高右同前ニ中名村・下名村之内ニ御繰易被仰付被下度奉願候、

尤家来共へ給地高出置候高百五拾石餘程并直ニ家来共作職地ニ被下置度候、左候ハ、直ニ鹿屋江致中宿罷居、此内之通自作を以致渡世候様ニ可申付候、多人数之儀(三)御座候へハ、最早別而御訴可申上様無御座候、尤自分勝手得ニ而申上ル儀ニ曾而無御座候、餘多之家来共為介抱迄ニ申上ル事ニ御座候、右訊を以御吟味次第何とぞ願之通被仰付被下度奉存候、此等之趣を以宜御披露奉願候、以上、
(享保九年)
辰九月十二日 嶋津市太夫

右口上書、大御支配方御用人鎌田六郎太夫江東郷仁右衛門を以差出候処ニ被為請取(候)、其後辰十月拾日、六郎太夫より仁右衛門へ鹿屋之繪圖一枚被為渡候而被仰渡候者、高隈權現宮居を本ニ仕、市太夫持高式門有所、且又先年之仕明、此節之仕明地有所、右宮より何方ニ而、道程何拾何町有之候哉致繩引、委細相札可申出旨被仰渡候ニ付、鹿屋中宿與頭中へ右之趣申越、繪圖壹枚相渡候、左候而、右之首尾以後申上候、

然者、辰十二月朔日、大御支配方より市太夫御用候間、麻上下致着可罷出由候ニ付罷出候処、於芍藥之間、御用人谷山角(患起)太夫御取次ニ而彈正殿より被仰渡候趣、左ニ相記候、

覺

嶋津市太夫殿

右持高鹿屋上名村之内八拾五石餘、且又仕明持留高式百三拾石餘、都合高三百拾五石程有之候処(二)、此節嶋津玄蕃殿持切名ニ被仰付之由候、然者市太夫殿家来四拾九家(来)、前より鹿屋へ致中宿、男女及式百式拾人程候、右家来共之儀、右高之内致作職渡世仕来候処、返地最寄違(二)御繰易御座候得者、家来共作職ニ相離、必至与迷惑仕候、数年物入を以出来為仕(明)地方之儀(二)候間、現高并仕明高、且又御竿願(申)出置候新仕明高迄、鹿屋之内中名・下名之内ニ御繰易被下、右之内家来共(一)作職地をも被仰付被下度(旨)、願被申出趣達 貴聞候処、願之通繰易御免被成候へハ、地方

差迫り百姓共致迷惑由候、其上数年物入を以為被仕明高之儀ニ候、當時家来共多人數召移場所も不見得候間、持高并仕明高、且又御免之大山野拾五町之儀も、此内之通ニ而可差置旨被仰付候間、此旨可被承知候、

右之通可申渡候、左候而、玄蕃殿方江も右之趣被承置様ニ可申渡候、以上、

(享保九年)
十二月朔日
(種子島久基)
彈正

右之通被仰渡候、鹿屋家来中へも難有可奉存由、東郷仁右衛門より委細以書付申渡候事、

享保九年辰十月四日、用頼東郷仁右衛門より、新城社・菩提所・祈願所御修甫之儀願申上候趣、左ニ相記候、

口上

新城之儀、嶋津市太夫殿先祖代々私領ニ而、所(一)神貫大明神社頭并菩提所淨瑠寺・祈願所蓮勝寺相立、諸私領同前ニ御座候処ニ、新城之儀一節被召揚、

寛文七年如本被返下候ニ付、其後右社頭并淨珊寺之儀ハ取立被申候、然共未御修甫之願ハ無御座候、就夫此節御修補所ニ願申上度御座候間、諸所私領寺社家同前ニ、以後共ニ御帳面ニ被召載被下度奉願候、尤新城儀、諸私領同前ニ壹分出銀之上納仕来申候、且又祈願所蓮勝寺之儀者癘壞仕、未取立無御座候、何れ近年中ニ取立被申所存御座候、先右両所迄を御修甫所御帳面ニ被召載置被下度候、依之家敷間別紙書付差上申候間、右之内以御見合御修甫所被仰付被下度奉存候、此段私より可申上旨、市太夫殿被申附如斯御座候、此等之趣、宜被仰上可被下儀奉頼候、以上、

(享保九年)

辰

十月十六日

嶋津市太夫殿用頼

東郷仁右衛門

右口上書、寺社御奉行所へ差出候処、中取衆山之内權兵衛被受取候、

別紙之覺

新城社頭神貫大明神

一 御宮向壹丈但三方縁

一 廊下式帖

一 横長四敷三間

一 舞殿四敷三間

同所菩提所淨珊寺

一 客殿八敷四間三尺

一 廊下式敷四間

一 茶之間七敷三間但後三尺廂

一 廊下式敷貳間三尺

一 庫理六敷五間三尺(棟)

右之通申上候処、御家老伊集院藏人殿(久起)より以御證

文被仰渡候趣、左ニ相記(棟)、

寺社奉行江

嶋津市太夫殿先祖代々之私領新城へ神貫大明神社頭并菩提所淨珊寺・祈願所蓮勝寺相立、諸私領同前二候処、一節被召揚、寛文七年如本被返下、其後右社頭并淨珊寺被致建立、此節御修補所ニ被仰付、諸私領寺社家同前ニ以後共帳面被書載度旨、家敷間別紙書付を以、市太夫殿用頼より申出趣有之候、新城之儀、諸私領同前ニ壹分出銀も上

納有之事候へハ、願之通右両所御修補御免申渡候
間、御修甫家数等之儀ニ付而、寺社方合力銀相渡、
諸事例之通可被申渡候、

(享保九年)
十一月
(伊集院久矩)
藏人

享保十一年午十二月朔日、大御目附御役嶋津左殿
〔より〕於御家老座直ニ市太夫江被仰渡候、同廿一
日、御役之御禮於御用之間御太刀目録進上仕候、
御取次〔御側〕御用人福山平太夫、

(同)〔享保〕十二年未正月十一日、此前ハ蒲生地頭所ニ
而候処、伊集院へ地頭職御繰易被仰付候、於御
家老座嶋津中務殿より直ニ〔承〕候、
(久廣)
(奉承知)

同年正月廿七日、吉貴〔公〕御上洛之節、伊集院
被遊御通〔道〕、苗代川於御假屋御膳進上仕候、
者△於 御前御上下御〔襟拜領〕仕候、
(小袖頂懸)

同年未四月、琉球中山王より大御目附被仰付候、
〔依而〕為祝儀書中被遣候、

一筆致啓達候、 貴殿大御目附御役御任職之由、

目出度令存候、此等之御祝儀為可申達如斯候、依
之御太刀一腰・御馬代・太平布二疋・燒酎一壺致
進覽之候、聊御嘉儀之品迄御座候、恐惶謹言、

(享保十二年)
卯月五日
中山王
尚敬御判

嶋津市太夫殿
人々御中

享保十三年申三月十三日、市太夫宅江 總州様被
遊御〔光儀〕候、御先番ニ椀山九郎次郎・竹下辰齋・

永田見恕被〔懼〕出候、御包丁人者久米村次〔郎〕兵衛、
御料理衆者兒玉早右衛門・竹下甚兵衛ニ而、御荷

用四人罷出候、御献立之御肴・野菜〔等〕切組之儀者、
磯より相調候而、此方ニ而者煮調迄ニ而候、

總州様昼八ツ前ニ 被遊御入候、依之門外ニ市太
夫・九郎次郎罷出候而御礼申上候、御供之人數者
相良源太夫・名越佐源太・中野森右衛門・平岡八

郎太夫ニ而〔御座〕候、書院〔庭〕中門より表書院御
通〔三〕而、休息所庭ニ被遊御出、休息所ニ被遊御入
候〔而〕、市太夫〔御前へ〕罷出、御目見仕候而さか

り候処、又〔御前へ〕被召出、金子貳百疋御目録ニ而頂戴仕候、左候而、御膳〔被召上〕候、

〔一御熨斗上ル 一御吸物鯛 一御差味わさひす

御献立

御汁いも巻
しゆんさい

たい
ほうふ
御膳しそ

金柑

御食

御二

御煮物
わらひ
ふ
竹之子

御汁たい
山椒

御引而

一鮎ふりしほ
色付

御肴かまほこ

御くわし

きうひとう
しめいも

御吸物かき
三ツ葉・せり

御相伴相良源太夫・名越佐源太、於数寄屋御茶被召上候、御茶道見恕より差上候而、奥書院へ被遊

御入〔候而〕、懐・奥方・子共、御目見仕候、

一御籠飯壹組 一御手樽壹ツ 一たはこ入五拾式〔色々〕

右之品、為御土産磯江進上仕候、九郎次郎より手紙相添候而、富満伊太夫方江被遣候、御供之平岡八郎太夫・中野森右衛門・椀山九郎次郎、御茶道衆兩人、茶食ニ笋羹相添候而酒出申候、其外御足輕兩人・御笠持三人・御挾箱持等茶食ニ酒被下候、休息所之床掛繪壽老人から繪一幅、入 御意候而進上仕候、

總召様昼七ツ前ニ被遊御帰館候、依之門外迄市太夫〔一・兒玉宗因〕罷出御礼申上候
〔罷出御礼申上候、兒玉宗因内證へ詰居申候間、市太夫同前ニ〕

〔相良源太夫・名越佐源太兩人江鮮肴一折ツ、御来駕ニ付萬事御取持忝存候、為御礼乍少分進入申之由候、〕

享保十五年戊正月十一日、大口江地頭職御繰易被仰付候、於御家老〔座〕椀山主計殿より〔直ニ〕被仰渡候、

同十六亥六月六日、若御年寄御役 太守繼豊公よ

り御直ニ市太夫江被仰付候、月番御家老嶋津李殿(久兼)加役之儀迄被仰付候、則御請申上候、右ニ付而御太刀目録二種壹荷進上仕、御礼申上候、御役替ニ付、与力稲留幸右衛門事寄与力ニ被仰付度旨、以書付申上候へハ、願之通被仰付候、右為御礼、磯御屋敷・御下屋敷、武・西田(并)御家老中江罷出候事、同十六年亥十一月廿八日、於御用之間、御小納戸を以 總州様より市太夫江御上下一具拜領仕候、

元文二年巳十一月

嶋津(久兼)權七

そめ

右者、於鉄殿 御本丸御輿へ參上之節供を〔も〕いたし、御用之節者御差圖次第、於嘉久殿御内通ニ茂罷出候儀被差免候、依之絹布着用被差免候、右之通、納殿役人より可申渡候、以上、

(元文二年)
十一月

(嶋山久初)
主計

右ニ付而、市太夫より為御禮用頼萩原甚七を以御納殿役人西田嘉左衛門迄申上置候、

元文三年午九月三日、於鉄殿

(吉豊)
入道様江初而御目見於鞍川御屋鋪被仰付候、御進

上物、

(同日)

一古金式部

御着代御目錄豎紙

(同日)

一古金壹部

おいくとのへ横目錄

(同日)

一青銅百疋

野村とのへ豎目錄

(同日)

一御樽肴

おすま様へ

右者、入来院千之丞殿於鉄殿御相合ニ而御進上有之候、

御拜領物

(同日)

一緋縮緬壹卷

一白縮緬壹卷

右 入道様より御目見之節、於鉄殿へ拜領ニ而候、同年午十一月十九日、市太夫江乘輿御免被仰付候、

写

(同日)
御自分儀歩行不自由ニ付、於磯西口御番所迄乘輿乗通、御門涯ニ而下乗可仕旨被 仰出候間、難有

可被承知仕候、右通被 仰渡候ニ付而者、磯下馬
 涯ニ而只今迄者下乗候得共、不及其儀候、勿論於
 鹿兒嶋(者)種子嶋(久基)栖林御役中御免被成候通可被相心
 得候、以上、

(元文三年)

十一月十一日

比志嶋隼人(範房)

嶋津市太夫殿

元文三年午十二月十四日

於鉄殿御助抱被成候ニ付、市太夫殿世話之儀候間、
 そめ事權七殿懷取持可仕旨、於嘉久殿より被仰
 渡候旨、榊山△主計殿より致承知候、

右之通候間、家中之面々承知可仕旨、御差圖ニ而
 御座候、以上、

御取次

山口文九郎

(同)元文四年末五月五日、於鉄殿御事、去午九月三
 日於鞍川御屋鋪 入道様江初而御目見被仰付候、
 其後御機嫌伺等も不被申上候ニ付、此以後御機
 嫌伺可被申上候間、御序を以被達 貴聞可給旨、

市太夫より嶋津登殿江直ニ頼置候処、同五月十五
 日、入道様より年頭歳暮寒暑之節、使を以御機
 嫌可被相伺由、登殿御取次ニ而承候、

元文四年末五月十五日、若年寄御役步行不自由ニ
 付、此内御断申上置候処、御免被仰付候、同日
 大口地頭職御断申上候、

口上覚

(五月晦日)

私事痛所有之、御役難相勤、此程御断申上候處、
 願之通被仰付、難有奉存候、依之私事隱居被仰付、
 同苗權七江家督被 仰付被下度奉願候、此等之趣
 を以、御申可被下儀奉頼候、以上、

(元文四年)

五月晦日

嶋津市太夫

六月十一日、市太夫并權七御用候間、麻上下着仕
 候而可罷出由承候間、市太夫為名代喜入主膳を頼、
 權七同道ニ而登 城(在)被致候処、御家老左京殿御
 取次ニ而、隱居家督願之通被仰付候御書付を以
 被仰渡、御礼申上候、依之 玄蕃殿并御家老中・

御若年寄衆・大御目附衆へ御礼廻り致候、

同六月十一日、市太夫江者久龜、權七江者要人事与
名替之儀申上、願之通被 仰渡候、

市太夫代屋敷役人者榎木弥右衛門・中津野主税・

伊集院寛左衛門・中村平右衛門・桑波田八郎右衛

門・岡留圓右衛門・谷山常巻甚兵衛相勤中候、甚兵衛

江者要人代二相掛候而相勤申候常巻節、三要人役之節八相談役谷山甚兵衛上

一要人役相勤候内二相談役相始、川井田傳右衛門、

与相續いたし候相勤申之儀、中村政右衛門被申付候、新城役人者中村采女、

同氏平右衛門・池田弥三右衛門・吉長次郎右衛

門・同氏十郎右衛門・同氏弥六左衛門相勤候、

女子 釜菊

正徳五乙未年四月十五日誕生、

母鹿兒嶋士廻源兵衛尉頼中女

享保四己亥年十一月六日天七早世、法号常盛

院殿春林光栄大姉 墓所南林寺境内

女子 男来里

享保二丁酉年三月四日誕生、母同前、

同三戊戌年八月廿八日天七早世、法号花顔童
女 墓所右同、

女子 釜袈裟

享保三戊戌年八月六日誕生、母同前、

同四己亥年九月廿一日天七早世、法号玉筵童

女 墓所右同、

久隆

初久寧中久直 權七 要人 市太夫

享保五庚子年十月四日誕生、

母樺山相馬忠郷女之至太守繼豊公第三御

女

親市太夫厄年二依付而權七致誕生候而、則役人

桑波田八郎右衛門子分二成候而、三歳迄於彼宅八郎右衛門

養育仕らせ候、

享保十三年申三月十五日、權七事

太守繼豊公御直元服被 仰付候而、御太刀目録并

天折折六合・御樽三荷獻上仕候、親市太夫より

も御太刀目録進上仕候、中權七支度之儀者伊藤

相左衛門へ相頼候、御奏者者新納右衛門、理髮

者嶋津大藏殿二而(御座)有之候、(左候而)御脇指一腰(頂戴)拜仕申

領仕候、元服之次第、如御作法首尾能相濟候而、

於私宅大藏殿(申請一門中其外心安面、多人數申入候而祝)其外一門中致請待候而祝仕候、權

七事者玄蕃殿奉始、御家老中・御若年寄・大御目

附衆へ御礼廻りいたし候、

享保十九年寅八月廿三日、(權七)半元服之願申上

(候而)御免被仰付候▽而、半元服いたし候△、

同廿年卯八月六日、權七前髮取之願申上候而御免

被仰付候、

同年卯九月二日、權七新城へ差越候而致狩候處(二)、

前目狩倉之内木場瀬田尾二而初完射候而、行司竹

下太郎兵衛江山神(祭)并矢先祭申付(候、右)祝と

して麻上下一具・青銅百足太郎兵衛江被下候、左

候而、所諸役人(中)家(申)来不殘犬付迄一汁一菜之

料理ニ燒酎被下候、

元文二年巳九月廿五日、於新城折目完射候而祝い

たし候、
(以下○ト記載内容相違スル)

同四年未六月廿八日、要人家誓之御礼三種二荷二

而申上候、

嶋津權七(久寧)

右親久鼈殿、就願御役御免被成候節、多年首尾(能)好

被相勤、身帶向難被續由二付(而)、先今程小普請

銀御免被成候旨被仰渡(置)候、隱居被仰付、權七

江家督被仰付候而茂、久鼈殿江被仰渡置候通小普

請銀御免被成候、

右之通申渡、首尾係江も如例可申渡候、以上、

(元文四年)
六月

(顯姓久顯)
左京

(本文書ハ七五号文書ト同文ナリ)

右、蒲生十郎兵衛御取次二而、要人江直ニ御書付相

渡候、

元文五申年

於嘉久殿御方江何そ付御祝儀等申上候節、間々伺

御機嫌進上物等差上△、奥通御番所迄参上仕候筋

ニ、此節御免被仰付被下度奉願候、此等之趣御申

可被下儀奉頼候、以上、

(元文五年)

正月十日

嶋津要人(久寧)

(本文書ハ八〇号文書ト同文ナリ)

右ニ付而御免之写、

本文之通、何そ^ニ付御祝儀[▽]又者[△]進上物被差上、
奥通り御番所迄參上之儀共、願之通被仰付候、此

旨申渡候、以上、

(元文五年)
正月

(島津久家)
奎

(本文書ハ八〇の1号文書ト同文ナリ)

右之御取次小林仲太兵衛ニ而御座候、

元文五年申二月十六日、要人致家督候而、私領新

城江初手入船ニ而罷越、直ニ 久鼈殿御隠居所ニ參

上仕候處ニ被祝候而、三献・差味・吸物・取肴等

銚子出候、役人池田弥三右衛門・吉長弥六左衛門

兩人御前へ被召出候而御盃被下候、兩役人より茂

奉祝候而御酒肴進上仕候、

同日、宗社神貫大明神江御神樂被差上候、然者社

司郡山宮内より奉祝候而酒肴進上仕候、

同十七日、要人新城七社へ參詣ニ而御神樂差上被
申候、

同日、要人七社之參宮相濟、假屋江被罷歸候處ニ、
久鼈殿も来駕ニ而祝之御料理御寄合御座候、

三月五日、新城へ初手入ニ付而淨珊寺・妙蓮寺江
祝ニ而料理被振舞候、

同日、新城諸役人・家部立之家来之面々江二汁二
菜之料理祝ニ而被下候而、銚子者一篇ツ、被下候、

鹿屋中宿之家来不残右同断ニ而候、諸役人江料理
被下候節者、相伴吉永一山ニ被仰付候、其外足輕・

中間・濱人・百姓、名頭并諸役相勤候者江者、一
汁二菜之料理被下候而銚子一篇被下候、

同廿日、家来中之弓 上覽被致候処ニ、大ふとう
足矢兩人御座候、猪八重喜三左衛門安利・竹下七

郎左衛門貞盛ニ而候、右兩人江為褒美弓一張・矢
壺手ニ麻上下一具宛給候、

同六月八日、

太守義久公第二御姫、嶋津修右衛門尉彰久之室新
城様百年御回忌之御吊、於淨珊寺御執行有之候、

然者留山泰傳坊先祖留山助兵衛事者、新城様御厚

恩不淺者ニ而、御卒去之節殉死仕候、其詔を以泰

傳坊へ御靈膳之御手長被仰付候而相勤申候故、役

人同席ニ而御料理被下候、然者助兵衛墓所を今度

新城様御玉屋之後ニ相直可申旨被仰渡候而、其通

ニ仕候事、

寛保元年酉十月廿三日、吉長弥六左衛門役儀御断

申上候而、代役海江田覺左衛門ニ被仰付候、然者

此前者新城役人兩人、屋敷役人近年者谷山甚兵衛

一人ニ而、外ニ相談役一人被申付置候へ共、此節

より新城役人中津野太郎左衛門・覺左衛門・甚兵

衛三人繰廻ニ屋鋪之役所可相勤旨此節被仰付候、

扱又此内者役人被仰付候而も誓紙茂無之事情へ共、

此節より誓紙被仰付候、且又側廻り相勤之面々江

も同前誓紙被仰付候、

女子 袈裟千代

享保八癸卯年八月廿三日誕生、

母廻源兵衛尉頼中女

元文三戊午年四月廿日卒去、歳十六 法号

法宝院殿實服正貞大師 墓所南林寺境内

将香

初将長 中将賢 金次郎 權太夫

享保十乙巳年三月廿四日誕生、

母樺山相馬忠郷女 名字号細瀧、

享保十八年丑二月廿四日、金次郎元服ニ付、烏帽

子御親嶋津玄蕃殿を奉頼候而、昼八ツ時分より御

入被成候、髮結支度等之儀者伊藤相左衛門江相頼

候、理髮者和田次右衛門被相勤候、玄蕃殿江金次

郎より御太刀目録進上仕候、玄蕃殿より金次郎江

御脇指一腰給候而頂戴仕候、元服之儀式首尾能相

濟、御祝御座候、入来院主馬定勝殿御夫婦其外御心安

キ御方数多被仰入候而、御馳走御座候而、玄蕃殿

夜半ニ御立被成候、翌廿五日、市太夫并金次郎玄

蕃殿御宅へ御礼參上仕候、

元文二年巳八月廿八日、金次郎初而御目見仕候、

進上物者御太刀目録・一種一荷ニ而御座候、左候

而、御城代御家老中・若御年寄衆・大御目附衆へ

御礼ニ罷出申候、

同年九月、金次郎新城於北野狩倉初完射候而、山(六)之神祭役用ニ申付候、左候而、諸役之面々、江御祝被下候、

同三年午五月十三日、金次郎角入之願申上候而致角入候、

同午十一月二日、金次郎前髮取之願申上候而、前髮被取候而、御役目中へ御礼ニ罷出申候、

寛保三年亥正月十日

御自分事明日四ツ時御用之儀候間、麻上下着用ニ

而可被罷出候、以上、

(寛保三年)
正月十日

(純字)
西彦太郎

細滝金次郎殿

亥正月十一日

金次郎麻上下着用仕候而致登 城候処ニ、御本丸

梅之間ニ而、彦太郎御取次ニ而

隅州様御側御小姓御役被 仰渡、則御請申上候而、

直ニ 磯江御礼ニ参上仕、夫より御役目廻り致候

而御禮申上候、

同年亥正月十二日、金次郎儀權太夫与名替之儀奉願候處ニ、関山軍兵衛御取次ニ而、願之通被仰付候、

明日御用候間、精進ニ而麻上下着用ニ而、四ツ時ニ

可被罷出候、以上、

(寛保三年)
正月十二日

御小納戸役

山田元右衛門

細滝金次郎殿

同十三日四ツ時、麻上下着用仕候而罷出候処、江戸

詰當春代り合被仰付候而、直ニ御禮申上、則 磯

江御礼ニ参上仕候、尤御役目中へ罷出候而御礼申

上候、御小姓役被仰付候而、今日より御下屋敷へ

相勤申候、

同十六日、此節御側御小姓被仰付候ニ付、同役之

衆数多祝儀ニ八ツ後より被相尋候而、吸物・取肴

ニ而銚子出候、尤料理出候而夜入五ツ過ニ各被罷

帰候、

同十七日、筆者衆皆々祝儀ニ見舞ニ而、料理并吸

物・取着等段々出候、
同廿三日
鮮着一折 手樽壹ツ

右者、樺山主計殿より御小姓被仰付候ニ付御祝被
成候而被下候、依之御礼ニ致参上候、
同廿九日

御着一折

右者、於鉄殿より御小姓被仰付、且又江戸詰迄
被仰付候ニ依而御祝被成候而、御本丸より御使
を以被下候、西田嘉左衛門宅へ見舞候而御礼申上
候、

口上覚

私事、御側御小姓御役ニ而、當春江戸詰被仰付置
候、来月廿二日、主計殿同立ニ被差遣被下度奉願
候、此段御申上可被下儀奉頼候、以上、

(寛保三年)
二月十日 細滝權太夫

本文申出之通、来月廿二日、主計殿同立ニ小倉筋

被差立候条、如例可申渡候、以上、

(寛保三年)
二月 (島津久香)
大蔵

細滝權太夫殿

右之通、亥二月十二日、関山軍兵衛御取次ニ而被
仰渡候、

御着一折 手樽壹荷

右者、玄蕃殿御方江、此節 隅州様御側御小姓被
仰付候而難有奉存候、為御禮進上仕申候由ニ而、
權太夫御見廻申上候、
同日

御着一折

右者、相良金右衛門方へ權太夫より遣申候、

口上覚

私事、御側御小姓御役被仰付、且又江戸詰迄被仰
付、来月廿二日被差立筈御座候、依之新城へ先祖
墓参仕度奉存候、日数十日御暇被下度奉願候、此
段御申上被下度奉頼候、以上、

(寛保三年)
二月十九日 細滝權太夫 (将香)

新城御暇、本文願之通被仰付候条申渡候、以上、

寛保三年 御取次 (金歴) 関山軍兵衛
二月廿一日

同日、主計殿與力衆肝付源之丞・肥後次右衛門、旅与力家村兵左衛門三人被仰入候而、權太夫此節江戸詰被仰付候ニ付、主計殿江諸事之儀御頼申候間、道中船中在江戸中、何角請箆之儀御頼被成候付、右三人江一首尾之為御礼料理御寄合有之候、料理以後久鼈殿・要人も被罷出候而、萬端之儀委曲御頼被成候、
同廿七日、權太夫此内御暇被申上置候付、新城江今日被罷越候、供人数者貴嶋李右衛門・浅田元右衛門、小者ニ田尻與市、人足孫右衛門ニ而候、
亥三月五日、權太夫新城より夜五ツ半ニ被罷帰候、
同十二日、首途御座候而、上諏方明神へ參詣有之、御祝御座候、
同廿日、權太夫御番ニ罷出答候処ニ、御當地近々ニ罷出答候故、御断申上候而不罷出候、
同廿二日、權太夫上洛ニ付、朝四ツ時被罷立候、供人数貴嶋李右衛門・浅田元右衛門、小者田尻與市、

手道具一本・挾箱一荷・駕籠壹挺ニ而御座候、右荷一疋ニ而一汁三菜之料理ニしゆんかん相付候、久鼈殿・要人・權太夫用頼吉田孝右衛門御寄合ニ而候、立跡之御祝、喜入安次郎殿・飯牟礼藤兵衛・川田堅助・廻源右衛門・山口文九郎・伊地知太兵衛・尤吉田孝右衛門奥ニ而一汁二菜之料理・吸物・取肴ニ而御銚子段々出申候、留永勾當并清市被召寄候、
閏四月三日、七ツ前ニ芝御屋鋪江着仕候而、支度者定紋付袷麻上下着仕候而、御殿江參上申候而、御両殿様江御機嫌伺申上候処、直ニ御目見被仰付候、初而御目見仕候ニ付、難有奉存由、則御礼申上候、扱又御精進日外之日、御両殿様へ輕キ品進上仕申候、
〔雜雙〕
太守様江 牛皮鉛壹箱、
〔余信〕
薩州様江 右同断、
御殿より相下候而、御家老を始御役目之御衆へ初二御目見被仰付候、御禮廻りいたし候、
今日着仕候首尾、御近習衆へ申達候、御家老衆ハ

御逢被成候、

二度目之上りより者、着之節旅支度之俣ニ而罷出、

御機嫌伺申上ル由候、初而之人者麻上下ニ而参上

仕ル事之由候、

亥六月十三日

本田孫右衛門より、明日麻上下ニ而四ツ時罷出候

様御觸有之、十四日ニ罷出候処ニ、

薩州様より麻御上下一具拜領被仰付候、初而拜領

仕候ニ付、御家老衆・御側御用人衆・御部屋御小

納戸衆・御近習衆へ御礼廻りいたし候、

八月八日

一越後ち、ミ御帷子一ツ 一御晒壹疋

一紗綾壹反 一袖嶋御綿入壹ツ

一御熨斗目御紋付御綿入壹ツ

一御袷縮緬嶋壹ツ 一茶宇御袴壹ツ

一御帷子嶋壹ツ

右八品、 太守様より拜領仕候、初而之拜領ニ付

而、御小納戸衆・御近習衆・御用人衆・御家老衆

江御礼ニ罷出候、

同月廿一日

御守殿より拜領物被仰付候、御包物左之通、

一ふくさ三ツ 一二口三ツ 一楊子差五ツ

右者、村路殿御取次ニ而被下候、則御礼申上候、

※(行間)

【亥十一月三日】

一太守堂ニ御代参權大夫江被仰付候而相勤候節、正月之外

者ふくさ物・麻上下、供兩人、小者一人、道具持一人、

雨具持一人、挾箱持一人、御借馬壹疋ニ而候、平日之御

代参者熨斗目着用ニ不及候、

亥十一月十三日

御守殿より御細工之物指一品拜領仕候而御礼申上

候、

十二月十六日

御守殿より御手渡同前ニ拜領物、御歳暮として被

下候、

一御包物壹ツ 一琥珀御帶一筋 一鼻紙袋一ツ

右之通頂戴仕候而御礼申上候、

延享元年甲子正月元日

薩州様御座之間ニ而、御側廻り之面々へ昼九ツ半

時分ニ御目見被仰付候、元日之儀者 御両殿様江

年頭之為御祝儀青銅百疋ツ、進上為仕来由候へ共、

五拾疋之進上ニ被仰付候、

正月四日

今晚御福引之御祝有之候而、權大夫江も品物差出

候様ニ被仰付候而一品差出候、然者

薩州様御出被遊候、三雲布權大夫引取候而戴申候、

二月四日

太守様より拜領物被仰付候而、御小納戸衆へ御礼

之儀申上候、

子八月十五日

太守様より拜領物被仰付候、品(物カ)餘多ニ而御座候、

御礼申上候、

九月九日

重陽之節句ニ而、支度長上下あおの物ニ而勤方仕

候、但更衣綿入、

延享二乙丑年二月廿八日

今日四ツ時、土持新八より麻上下着用ニ而御用之

儀被仰渡候、當春

薩州様

隅州様御下向之御供被仰付候、依之則御礼申上候、

右之通御供被仰付候故、御家老衆を始候而、御役

目之御方江御礼廻いたし候、

三月十三日

太守様より拜領物被仰付候、

一嶋御布子式ツ 一御帷子式ツ 一紗綾一反

右之通頂戴仕候間、御礼之儀御小納戸衆を以申上

候事、

三月廿六日

薩州様昼九ツ時分、備中殿御小屋へ被遊 御入候

二付、權太夫事御勝手ニ相話候様ニ奉承知候ニ付、

朝四ツ前より彼御方へ参上(仕候カ)、支度者熨斗目麻

上下着仕り、御入前以中門外江罷出候而御礼申

上候、然者被遊 御入候而御慰物杯参候而、別而

御機嫌宜、夜入九ツ過ニ被遊 御立候、權太夫者

御立跡迄罷居候而、七ツ時分ニ御暇申候而罷帰候、

丑四月十九日

小林仲太兵衛より麻上下着仕候而罷出候様ニ致承

知候而罷出候処、仲太兵衛御取次ニ而、

太守様より為御心附白銀拜領仕候、難有奉存候由

御礼申上候、

同廿一日

此節 御下向ニ付、御守殿より御供之人數江於

表御近習番所ニ御料理被下候ニ付、熨斗目麻上下ニ

而参上仕候、御料理者ニ之膳迄被仰付候、御茶菓

子・後菓子、濃茶・薄茶、後段ニそは切被下候、

吸物・御取肴・御銚子被下候而、各難有御礼申上

候、

御守殿より御料理頂戴仕候ニ付、

御而殿様へ御礼ニ参上仕候処、伊地知千左衛門御

取次ニ而、御目錄ニ而金子式百足拜領仕候而、則

御禮之儀申上候、

丑四月廿二日

太守様より薩州様江御餞別被進候、且又御供之人

数江茂御料理被下候、但御米上之間ニ而御座候、

同日

菊姫様より御吸物・御銚子迄被下候、支度者不洗

之物麻上下ニ而候、

同日

菊姫様より御目錄を以金子百疋權太夫江被下候而

御礼申上候、

四月廿三日

薩州様今日四ツ時被遊御首途候付、羽織袴ニ而御

供仕候、今日より御部屋江相勤候様ニ被仰渡候、

今日より羽織袴着仕候、

同日

薩州様より御帷子一ツ拜領被仰付候、御礼申上候、

四月廿五日

太守様より御包物拜領仕候而、御礼申上候、

同日

薩州様今朝五ツ半江戸被遊 御發駕候ニ付而、權

太夫御供仕候而、東海道并山陽道・九州路迄道中

御機嫌能被遊御通路候、權太夫も無恙御供仕候、

五月廿二日

薩州様朝四ツ過鹿府江被遊 御着城候、

權太夫も首尾好御供ニ而被致下向候而御祝有之候、

要人より被相招候御人数者有川玄菴・東郷仁右衛

門・山口文九郎・川田堅助、御用頼吉田孝右衛門

ニ而候、夜入候而伊地知太兵衛者被罷出候、右之

衆輿^(二カ)被通候而、一汁二菜之料理并吸物・取着・

御菓子・銚子段々ニ出申候、

八月十八日

明四ツ時、麻上下ニ而權太夫罷出候様ニ岸喜右衛

門より御觸有之、十九日罷出候処ニ、嶋津李殿よ

り関山軍兵衛御取次を以、来春江戸詰被仰付候、

依之為御礼 磯江参上仕候、

九月廿七日

新城へ御暇申上候而權太夫今日罷越候、供者貴嶋

李右衛門・浅田元右衛門、小者・人足ニ而候、

十二月六日四ツ時、御小納戸衆より御用之由申来

候而参上仕候処ニ、佐久間甚太夫御取次ニ而、

薩州様より御衣服拜領仕候、

一 御布子御紋付あおのもの 壹ツ

一 裏付御袴 壹ツ

一 嶋御帷子 壹ツ

右之通頂戴仕候、依之甚太夫宅江御礼罷出候、

十二月十一日

薩州様御上洛ニ付、五社江御首途ニ而御参詣被遊

候、然者權太夫若宮江御先番被仰付候而相勤申候、

支度者熨斗目長上下ニ而御座候、

閏十二月廿六日

薩州様御事、備中殿御宅へ御光儀ニ付、御先番被

仰付候而、昼九ツ前ニ彼御宅江罷出候、

薩劔様者九ツ時分ニ被遊 御来駕候而、段々之御馳走御座候、

延享三年寅正月元日

權太夫四ツ前登 城仕候、供人数者家来兩人・小者壹人、手道具一本・挾箱壹ツ・長柄壹本・笠箱迄持せ候、當分御小姓御役ニ而候へ共、正月又者

屹立候節者、家格ニ而被罷出儀、用頼吉田孝右衛門前より去御方江御同被申上候へ者、右之供廻り

ニ而不苦由承候ニ付、右之供人召列候而被罷出候、
寅正月三日

薩劔様昼九ツ前 磯江年頭之御祝儀、且又御上洛ニ付御暇乞ニ御参上之御供、權太夫江被仰付候而

御供仕候、然者
正月四日

總劔様より權太夫江御目見被仰付候而御礼申上候、
正月八日

薩劔様朝四ツ半時鹿府 被遊御發駕候ニ付而、權太夫登 城仕候而御立之御祝儀申上候、支度者熨斗目麻上下着仕候、

朝四ツ時、權太夫御用之由承罷出候へ者、小林仲太兵衛御取次ニ而、来ル二月廿四日立、表方同立

被差立候由被仰渡候而、則御請申上候、

二月十二日
權太夫上洛ニ付、今日被致首途候、依之 久鼈殿

要入殿私宅へ申請候而御祝有之候、

同廿日
於鉄殿 御本丸より此方江御帰被成候、来ル廿二

日、御婚姻之御祝有之筈候、御入之節者、權太夫

玄喚迄罷出候而御礼申上候、權太夫支度者麻上下

ニ不洗之衣服着仕候、

昼九ツ時より 於鉄殿御婚姻之御祝之儀式御座候、

依之 於嘉久様へ久鼈殿より御婚姻之御祝儀被仰

上候、使者權太夫相勤申候、

太守様御方江茂右之御祝儀久鼈殿より被申上候ニ

付、權太夫使者相勤申候、

寅二月廿四日
權太夫上洛ニ付、朝四ツ時分鹿兒嶋罷立候、供人

者浅田元右衛門、小者孫助ニ而候、

寅力
壬四月十九日

芝御屋鋪江權太夫暮六ツ過ニ着仕候、支度者羽織袴ニ而 御殿江参上仕候而、

御両殿様へ御機嫌奉同候、此節者木曾路罷通り候、

寅力
壬四月廿五日

今度着仕候御小姓人数相中より

御而殿様江多葉粉進上仕候、支度之儀者麻上下二
而参上仕候、

寅七月十日

御小納戸衆より權大夫御用之由承候付罷出候處、

太守様より

一御熨斗目壹ツ 一縮緬御袷壹ツ

一綸子壹反 但地黒御紋笹りんとう

右之通拜領仕候而難有奉存由、御小納戸衆迄御

礼申上候、

七月十四日廿日
盆両日之儀者、芭蕉上下類ニ而勤ニ罷出申候、

同日
太守様より權大夫江御細工之物拜領仕候而、御小

納戸衆迄御礼申上候、

同日
菊姫様より權大夫江御細工之物拜領被仰付候、依

之村路殿迄御礼申上候、

十一月廿一日
太守様被遊御隠居候ニ付、隅笏様与奉唱候、

薩州様被成御家督候付、太守様与奉称候、

十一月六日
太守様被遊御家督候ニ付御祝被成候而、權大夫江

金子貳百足拜領被仰付候而難有奉存、御近習衆迄

御礼申上候、

延享四年卯正月三日

太守様御座之間江被遊 御出座候而、御側廻り之

面々江年頭為御祝儀御流被下候、權大夫江茂罷出

候而御盃頂戴仕候、

二月十三日

菊姫様より年頭為御祝儀御包物、權大夫江拜領被

仰付候、村路殿迄御礼申上候、

四月十日

太守様より大場庄太左衛門御取次ニ而金子五両拜

領被仰付候、御内々ニ而被下候間、御礼不及申上

由致承知候、

四月十六日

御小姓同役中代り合之人数、来ル廿二日着之由承

候、然者昨日立日限之儀申出候様ニ被仰渡候、依

之今日同役中申談候而、来ル廿二日ニ各着仕候ハ、

来ル廿四日罷立可申由願申上置候、

四月十八日

太守様御下國ニ付、今日御首途被遊候、刻限者昼

九ツ半時ニ而候、左候而、護摩所江御入被遊候、

四月廿一日

菊姫様より御細工之物拜領仕候而、村路殿迄御礼

申上候、

御小姓同役代り合之衆、昼八ツ過時分芝御屋敷江

着ニ而有之候、

卯四月廿三日

太守様朝五ツ時江戸被遊 御發駕候、御去跡ニ

隅州様江御祝儀申上候、

同日
權太夫事、明廿四日江戸罷立申筈ニ而、

隅州様江御機嫌伺御暇乞ニ參上仕候處ニ御目見被
仰付候、御家老衆へも御對面申候而、御暇乞いた
し候、

同日

隅苧様より 太守様江箱沓ッ被進候付、權太夫御

中途ニ而參掛ニ可差上由被仰付候間、挾箱之内ニ
入付候而東海道罷登候処ニ、岡部之宿

太守様御泊被遊候故、昼七ツ時分罷通候間、直ニ
參上仕候而 御機嫌奉伺候而、右箱差上申候、

四月廿四日

權太夫芝御屋鋪罷立候而、東海道罷通申候、伊佐

岡伊右衛門杯一列ニ而御座候、

七月朔日
權太夫先月廿八日阿久根江着船ニ而、同廿九日向

田之陸地罷通り、向田罷立候而、鹿兒嶋へ七月ニ
日ニ着いたし候、供者浅田元右衛門、小者孫助ニ
而候、

卯七月三日

權太夫朝四ツ時分麻上下着仕候而登 城いたし、

昨日ニ御當地江着仕候首尾申上候、
十月朔日
久鼈殿於新城病氣差發り大節之由申来、御暇申上

66の1

候而新城へ則差越候処ニ、病重候而今曉七ツ時分
被致卒去候、

久鼈殿卒去ニ付而、權太夫御暇之申重之奉願候處
ニ、願之通御暇被下候、

十一月廿三日

權太夫忌明候而、今日より罷出候而御奉公相勤候、

同日
遊谷喜三左衛門より權太夫江御用之由申来候而、

麻上下着仕候而、朝四ツ時分御用人座江罷出候処
ニ、大場庄太左衛門御取次ニ而、當秋江戸詰被仰
付候、日限之儀者其節可申出由被仰渡候、大藏殿

より被仰付之由候、

(延享五年)

辰四月權太夫婚禮之次第書

辰四月十四日
一同十四日四ツ時過、弥今日權太夫九ツ時分より

罷出可申候間、諸事前以申談置候通、御新造暮
時分より御出可被下旨、伊地知太兵衛を以可被
仰入候、

一御書院床立松、掛物壽老人、

一御新造御出前以遠目付置、御出之段申通候節、

御待上臈盛塩持御出迎、要人殿御出迎可被成候、

御勝手見廻之衆薄縁迄御出、役人中門脇迄可罷出候、

一主膳殿御夫婦御出之節、遠目付置候而告来候ハ、御勝手詰之衆并役人可罷出候、一御熨斗上ル、
一御三献 但御人数御新造・鎌田市藤太殿奥方・

權太夫、

一御熨斗下ル、

一主膳殿御夫婦、其外御勝手之衆御着座、

一御薄茶上ル、 一御多葉粉盆上ル、

一御持せ物御披露、一於鉄殿より御進物御披露、

辰四月十四日
一御吸物上ル、 一御銚子上ル、 一御挾肴上ル、

右段々差上候而、時分見合御料理上ル、但一汁

三菜、

一御盞御銘々差上、御肴・御吸物・御挾肴差上、

三篇相濟、御湯上ケ御膳下ル、

一御茶菓子上ル、 一御濃茶上ル、

一御持せ御披露、一御吸物・御肴・御銚子見合

候而段々差上□、

一御内證三而御新造御入、御茶立御祝、

但御茶立調之儀、言人見合可申付候、

一御吸物・御銚子・御肴段々差上、時分見合御後段上ル、

一御立之節、御出之節之通同前、

主膳殿御方次第書

辰四月十四日
一當日近方江遠目附置、御出之段可申通候、

一表書院床掛物、竹ニ立松、

辰四月十四日
一奥書院床掛物壽老人、立松、

一御駕御出之節、勝手見廻之衆玄喚迄可被罷出候、

奥書院御刀掛ニ可被掛候、

一安次郎殿玄喚迄御出可被成候、主膳殿江茂御出

迎可被成候、

一御駕奥書院江御通り御着座、御新造并喜藤次殿

奥方御出合、

一御熨斗上ル、一御三献 但御人数三人、

一要人殿其外御三献不相濟内ニ御出被成候ハ、

表書院へ御案内可申上候、

一御三献相濟、何れも奥書院へ御通御着座、

一御熨斗下ル、一御薄茶 一御多葉粉盆
 一御進物御披露、一主膳殿御夫婦御出、御請可
 被成候、
 一御太刀目録

但御覽江主膳殿より御祝被成候而、御内證ニ而可被
 進(候カ)

辰四月十四日
 一御吸物 一御銚子 一御挾肴

一御料理一汁三菜 一御盃銘々上ル、

一御銚子上ル、一御肴 一御銚子 一御吸物

一御銚子 一御挾肴 一御湯上ル、

一御膳下ル、一御茶菓子 一御濃茶

一御持せ御披露、

一見合次第御吸物・御銚子・御挾肴段々可差上候、

一御立之節、最前之通詰合之面々可被罷出候事、

一御婚姻之當日、權太夫事主膳殿御方へ御出被成

候ハ、御同心人東郷四郎左衛門、

一御肴一折鮮鯛式枝 平樽一荷酒十盞

一御茶六袋 一御化粧二箱 一御燕脂二

右權太夫より之進物として被進候、

一此方御勝手江御頼被成候而御出之御人数、嶋津
 頼母殿御夫婦・鎌田市藤太殿奥方・和田源右衛
 門・内田仲左衛門・郡山嘉右衛門・伊地知太兵
 衛ニ而御座候、

一主膳殿御夫婦・御新造・安次郎殿奥方夜入五ツ
 時分御出可被成候、

辰四月十四日
 一御肴一折鯛式枝 御樽一荷酒十盞

右權太夫殿江主膳殿御夫婦より被進候、

一御肴一折右同 御樽一荷右同

右要人殿江主膳殿御夫婦より被進候、

一御肴一折

右六十郎殿江主膳殿御夫婦より被進候、

一御肴一折

右權太夫殿江安次郎殿御夫婦より被進候、

右者、六折目御婚姻當日為御進物參候ハ、御

披露吉田孝右衛門、

一御太刀一腰 青銅百足

右者、權太夫殿江主膳殿御方ニ而被進候、

一御肴一折 御手樽一荷

右者、權太夫殿江嶋津頼母殿御夫婦より被進候、
一御肴一折 御手樽一荷

右者、權太夫殿江鎌田市藤太殿御夫婦より被進候、

辰四月十四日

一御座人数、御新造・主膳殿御夫婦・頼母殿御夫婦・市藤太殿奥方・要人・權太夫・六十郎・和

(將監)

田源右衛門・内田仲左衛門・郡山嘉右衛門・伊地知太兵衛、

一御待受鎌田市藤太殿奥方御勤被成候、

一御婚姻ニ付而、役人中・御附女中、随性尼・於由良・浅田元右衛門江輕キ御料理被下候、

一何れも様御供廻り土迄、於番所挟肴ニ而酒振廻申候、役人藪田佐司右衛門尉出合候而致挨拶候、
一御時服一重

右者、御婚姻之當日、御新造江於鉄殿より御祝被成候而被進候、御披露吉田孝右衛門、

一主膳殿奥方并御新造より御用頼役人中へ御盃被下候、

四月十五日

一御肴一折 御樽一荷

右者、御婚禮之翌十五日、權太夫夫婦奥へ参上二而、要人殿御夫婦江被進候、

四月十五日
一晒壹疋

右者、權太夫奥方江要人殿御夫婦より初而奥江御出被成候付而、御祝被成候而被進候、

同日
一青銅百疋

右者、御婚禮以後、奥へ初而權太夫参上ニ付而、奥女中より奉祝候而、水掛上候ニ付為御祝被下候、

同日
一御肴一折 御手樽壹ツ

右者、御婚禮為御祝儀、役人中より 權太夫様

へ進上仕候而御盃被下候、
四月十六日
一今日御三ツ目ニ而、要人事權太夫同道ニ而主膳

殿御方江罷出候、權太夫奥方江者先達而被參候、
同日
一御肴一折鯛貳枚 御樽一荷酒十盃

右主膳殿御夫婦江權太夫夫婦より被進候、

同日
一御肴一折横交 御樽一荷右同

右者、安次郎殿御夫婦江權太夫より被進候、

辰四月十六日

一御肴一折鮮鯛貳枚 御樽一荷酒十盃

右主膳殿御夫婦江要人より

同日 一御肴一折積交 御樽一荷酒七盞

右安次郎殿御夫婦江要人より

同日 一御肴一折積交

右幸之丞殿・八之丞殿江要人より

右者、御三ツ目として主膳殿御方へ要人并權太

夫夫婦御見舞申上候節被進候、

同日 一青銅百疋

右者、御三ツ目之為祝儀、主膳殿御方御用頼衆

へ被遣候、

同日 一白銀貳両

右同断ニ付、彼御方役人江被下候、

同日 一小杉原三束

右同断ニ付、彼御方年寄衆へ被下候、

同日 一青銅百疋

右者、彼御方ニ而權太夫江祝候而、水掛有之候、

水掛之衆へ被下候、

辰四月十六日 一麻上下一具

右者、水掛ニ付而、彼御方役人江權太夫より遣候、

五月廿六日 各事、當秋代り合立之儀、表方立壹所ニ被差立候、

尤表方遲立相見合候而被差立候様ニ可申上候、此

段通達候様ニ大場庄太左衛門より致承知候、權太

夫来ル廿七日御當地被召立筈ニ付而、今日致首途

候、五社江者當時忌中ニ而遠慮ニ存候故、自分看經

所太郎坊等へ致參詣候、

六月廿六日 明日御當地罷立筈ニ付而、御本丸江參上仕候而、

太守様江御機嫌奉伺、御暇乞申上候、御家老衆へ

も掛御目、罷立首尾申上候、

同日 權太夫江戸詰ニ付、鹿府今日罷立候、供者淺田元

右衛門・松原郷右衛門ニ而候、

右ニ付而、喜入主膳殿奥方・安次郎殿御夫婦・畠

山喜藤次殿奥方・和田源右衛門・伊地知太兵衛朝

四ツ前之より御出ニ而、夜五ツ後御立被成候、尤朝

昼晩之御料理并吸物・取肴・御菓子・銚子段々出

申候、

辰九月六日 今日七ツ過ニ芝御屋鋪江着仕候而、御殿江參上仕

候而、着之首尾御家老衆江申上候、尤 隅州様江

御機嫌奉伺候而退出仕候、

十月六日
昨五日、宮之原甚五兵衛より御用觸有之、今朝罷

出候處ニ、御書付を以被仰渡候者、

隅州様来春被遊 御帰國候ニ付、權太夫江御供被

仰付候旨申聞せ可置由被仰渡候、

但支度之儀者平服ニ而罷出御用承候、

十二月朔日
来春 隅苧様被遊 御下向候ハ、御番方被仰付

候由、鎌田六郎太夫御取次ニ而被仰渡候、

隅州様来春被遊 御下向候ハ、二月上旬 御發

駕可被遊由、宮之原甚五兵衛御取次ニ而奉承知候、

同十一日
太守様今日四ツ半過ニ芝御屋鋪江被遊 御光着候

而、御祝儀ニ權太夫参上仕候而御機嫌奉伺候、但

支度者不洗之衣服上下着仕候、

辰十二月廿八日
隅州様江来春 御帰國之御供被仰付候御礼申上候、

同日
隅州様来春 御下向之御暇、公方様より今日御

願之通御給ニ而、御而殿様江右之御祝儀權太夫

申上候、但支度者熨斗目麻上下ニ而御座候、

寛延二年巳正月二日

隅州様御下向之日限二月四日江戸御發駕被遊筈ニ

被仰出候、左候而、御首途之儀者今月廿一日被仰

出候而奉承知候、

正月十五日
菊姫様より御包物

一 御多葉粉入式ツ 一 鼻紙袋壹ツ

一 ふくさ式ツ

右者、御年頭として拜領仕候而、難有村路殿迄御

礼申上候、

巳正月十六日
嶋津十太右衛門より麻上下着用ニ而早々罷出候様

ニ致承知候而、則参上仕候處ニ、

太守様より御金拾五兩拜領被仰付候、然者 隅州

様御病身ニ而御下向被遊候、權太夫御小姓ニ而萬

事太儀成勤仕候ニ付、為御心附金子右之通被成下

之御口上ニ而御座候、依之別而難有奉由、御礼之

儀十太右衛門迄申上候、

同十七日
来ル廿一日 御首途ニ付、羽織袴着用ニ而罷出相

勤候様ニ被仰渡候、然共何そ之御祝事御客人等之

節者、此内之通上下着用可致由被仰渡候、

同廿日
隅苧様より拜領物被仰付候品者、

一 御はさみ壹本 一 小刀壹本

右之通被下候而御礼申上候、

同廿二日
隅州様より御袷ツ被下候而御禮申上候、

巳正月廿二日
御守殿より御目錄ニ而金子三百疋

同日
菊姫様より御目錄ニ而金子式百疋

右者、今度 隅州様御供仕候而權太夫罷下候ニ付、

為御餞別拜領被仰付候而、難有御礼申上候、

同廿七日

来月四日、 隅州様江戸 御發駕、午之上刻被遊

御立筈ニ被仰渡候而奉承知候、

二月四日

今日午之上刻被遊 御發駕ニ付、御供之人數御料

理被成下候、但支度羽織袴ニ而候、

同日

隅州様御立前御三献上り候、權太夫熨斗目長上下

着仕候而、御配膳相勸申候、

四月十八日

權太夫此節 隅苧様御供仕候而下着ニ依而、向田

乞迎ニ貴嶋左右衛門・人足三左衛門差遣候、權太

夫今日下着ニ付而、喜入主膳殿おく方・安次郎殿

奥方・畠山數馬殿奥方昼八ツ前より權太夫宅へ御

出被成候而、御料理出候而御祝御座候、吸物・御

取肴・銚子段々出申候、

※2

※1 (行間)

〔巳六月廿五日〕

一 太守様御不快被遊御座候故、御小姓同役中申談候而、

稻荷・諷方・神明江御平愈之御祈願ニ御神文差上候而

罷歸候処ニ、御近習三原源五左衛門より山沢五右衛

門・伊地知嘉右衛門・名越佐源太・細瀧權太夫只今早

々御用之由承、則平服ニ而罷出候処ニ、隅州様より

思召を以 太守様御病為御快然、權太夫儀者花尾山

二御代參被仰付候而、則參詣仕候、外三人之衆も三所

へ御代參被仰付候一

※2 (行間)

〔巳七月六日〕

一 薩苧様御病御大節ニ付、隅州様より諷方・稻荷両社

へ御病御平愈之御誓願ニ、御内々而權太夫江御代參

被仰付候而、夜八ツ時分ニ參詣仕候一

※3 (行間)

〔七月廿四日〕

一 慈徳院様於福昌寺御葬送、今晚四ツより九ツ之間御執

(宗信)

行御座候付、御小姓非番之人數者 隅州様へ奉伺候

而、御葬送之御供權太夫仕候、同役中も同前之事情、

但薩州様御逝去者七月十日ニ而御座候一

口上覺

巳八月二日
 ※3 御側御小姓御役、寛保三年亥正月十一日被仰付候、

一 私事、嶋津市太夫家内弟ニ而、市太夫屋敷ニ罷居候、

一 兄市太夫持高式千七百八拾六石六斗三升四合壹勺五才所持仕候、

一 御役料銀米無御座候、

右之通、明細帳為御見合此段申上候、以上、

(寛延二年)

巳

八月二日

(将查)
 細漣權太夫

右書付、御下屋鋪御近習役所江差出候、

巳九月十七日

權太夫市来湯治之御暇日数廿五日給候而被罷越候、

蘭田佐司右衛門・浅田元右衛門、小者松原郷右衛

門、人足平兵衛供仕候、

午三月六日

隅州様児ケ水江御湯治ニ御光越被遊候ニ付、權太

夫御供被仰付候、御立前四ツ半時御供之人数相

揃候而、昼九ツ時ニ御立被遊候、

但御番方被仰付候、

午四月十日

於児ケ水児玉小六御取次ニ而被仰渡候者、權太夫

事者 於嘉久様市太夫宅江御入之時分者 御目見

も被仰付、能御存被成候、

隅州様御假屋江於嘉久様御入之節者相詰候様ニ有之候ハ、御満悦ニ被思召候ハ、向後之儀者

御前へ罷出、又者御祝儀御機嫌伺も納殿迄参上ニ

而申上候様ニ^(被力)仰付由、小六御取次ニ而被仰渡御

礼申上候、早速奥御納戸衆へも右之御礼申上候、

今日八ツ半時分、於嘉久様御方之御假屋より参

上仕候様ニ奉承知候而、則罷出候処、奥江被召通

候而 於嘉久様より御盃頂戴仕候、然處ニ 隅州

様被遊御入候而、終夜相詰申候、

同日 於嘉久様より權太夫旅宿江玉子一籠被饋下候付、

納殿迄御礼ニ参上仕候、

午四月十五日

於嘉久様御假屋江 隅州様御滞在被遊候付而、權

太夫も相詰候様ニ被仰付相詰候間、下御假屋江者

相詰不申候、

同日

隅州様今日九ツ時、児ケ水被遊 御立候ニ付而、

權太夫御先番相勤候而、朝四ツ半時分より御先ニ

罷立候、

同廿五日

今日八ツ半時分、喜入江 隅州様御着被遊候而、

喜入ニ而も奥江被^レ通候而相詰申候、

同廿七日

隅州様鹿兒嶋江昼八ツ前ニ被遊御着候而、御着之

御祝儀申上候、

同日

權太夫事、御下屋鋪奥へ罷通候様ニ被仰付候而参

上仕候処ニ、 隅州様江茂御入被遊候而、御同席ニ

而 於嘉久様より御盃被下候而頂戴仕候、初而奥

へ被召通候付、御年寄衆迄御礼申上候、 隅蒔様

御方御近習衆江茂御礼申上候、

午五月廿五日

隅州様より拜領物被仰付候、

一 あおのもの御布子沓ッ

一 袖嶋御袷沓ッ

右之通、權太夫江被下候而御礼申上候、

女子 松袈裟 享保十三戊申年三月七日誕生、母

同、喜入安次郎室

女子 於鉄殿 享保十六年辛亥年七月十五日卯時

於 御城誕生、 父太守繼豊公 母澁合喜

左衛門女 (系傳) 益之介様御同[□] 嶋津市太夫久

隆室

将次 万之助

享保十七壬子年正月十日誕生、
(ママ)

母廻源兵衛尉頼中女

同年七月十九日夭亡、法号幻空淨鏡童子

将盈

六十郎

元文四己未年三月廿六日誕生、

母家臣鮫嶋九左衛門尉旨美女

(系線及ヒ●●●印ハ朱書ナリ)